

平安後期文学の生成と同時代の享受
——『更級日記』と後冷泉朝前後——

大塚誠也

目次

凡例……………	2
序章……………	1
第一部 『更級日記』と孝標女の時代……………	7
第一章 「殿の中將」藤原長家と祐子内親王家……………	8
第二章 浮舟と「隠し据ゑ」……………	19
——『浜松中納言物語』との相互性——	
第三章 長谷寺記事と菅原道真……………	33
第四章 源資通と「天照御神」「冬の夜の月」……………	41
第五章 女房日記の踏襲と逸脱……………	52
——主家賛美の欠如をめぐる——	
第二部 後冷泉朝前後の作者達と読者達……………	65
第一章 「左右」の修辞法の展開……………	66
——紫式部から後冷泉朝へ——	
第二章 『狭衣物語』における源氏の宮付の女房達……………	78
——男君への応対を中心に——	
第三章 『狭衣物語』の「大弐三位」と大弐三位藤原賢子……………	90

第四章	『四条宮主殿集』における恋の歌群の遍在……………	102
第五章	後冷泉朝における后妃文芸圏と内親王文芸圏の位相……………	112
終章	……………	122
引用文献一覧	……………	125
初出一覧	……………	133

凡例

一 各主要作品の引用本文は、それぞれ以下のものに拠った。ただし、漢字や仮名等の表記を私に適宜改め、傍線等を付した。

・『更級日記』：藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫校注・訳『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（新編日本古典文学全集26、小学館、一九九四年）

・『浜松中納言物語』：池田利夫校注・訳『浜松中納言物語』（新編日本古典文学全集27、小学館、二〇〇一年）

・『狭衣物語』：小町谷照彦・後藤祥子校注・訳『狭衣物語』（新編日本古典文学全集29・30、小学館、一九九九～二〇〇一年）

・『四条宮主殿集』：冷泉家時雨亭文庫編『平安私家集六』（冷泉家時雨亭叢書第一九卷、朝日新聞社、一九九九年）

一 『四条宮主殿集』以外の私家集の引用本文は、『新編私家集大成』（web版、古典ライブラリー、二〇二二年四月配信）に拠り、それ以外の歌集の引用本文は『新編国歌大観』（角川書店、一九八三～一九九二年）に拠った。ただし、私に適宜漢字をあて、句読点を補う等した。

一 右の作品以外の引用本文は、各章末毎に何に拠ったかを明記した。

序章

本論文は平安後期、特に一一世紀後半の後冷泉朝期における文学の研究を通じて、作者及び同時代の読者の、有機的な関連を考究するものである。この時代は、『更級日記』や『狭衣物語』等の文学作品に恵まれ、かつ多数の歌合の催行もあり、仮名文芸が盛んに生成・享受されていた。この時代は、一世代前の『枕草子』や『源氏物語』の陰に隠れがちであったが、現存する作品数や作者数の規模ではむしろそれらに勝っている。今後、より一層注目されるべき時代といえよう。

本論の狙いは、後冷泉朝前後に活動した女房等、文芸の担い手達がいかに関わり合い、その関わりがいかに作品の生成と享受に影響を与えたのかという問題を究明することにある。同時代における複数の作者達と読者達は、どのように影響を与えあっていたのか。複数の具体的な事象の指摘、及び考察を積み重ねた上で見えてくる、文芸的営為の様相に迫りたい。

本論文は、作品研究や作者研究という研究目的ないしは研究手法を超えてゆくものである。本論文の議論を通じて、作り手や受け手、作品間の影響関係といった諸相が、厚みを持った総体的な営みとして明らかになるだろう。従来軽視されてきたといつてよいこの生成と享受の同時代的な影響は、本来は文学研究においてより重要な位置を占めるべきものである。

以下、序章ではつぎの三点、「平安後期」ないしは後冷泉朝という時代、『更級日記』という作品とその研究史、後冷泉朝の作者達と読者達という問題を確認した上で、各章の狙いを述べる。

一 「平安後期」ないしは後冷泉朝という時代

「平安後期」という用語は戦後間もなく確認できるものの、それが指し示す時代は研究史において揺れ続けている。これに対して「後冷泉朝」という用語は後冷泉天皇の即位した万寿二年（一〇二五）から治暦四年（一〇六八）までを明確に指す。煩雑ではあるが、本論の前提としてまず用語の研究史を押さえる。

管見では、戦後から一九八〇年頃までの「平安後期」は、「一一世紀後半から平安末期まで」を広く指す場合が多い。最も早い例としては、一九五一年の益田勝実「平安後期に於ける貴族文芸の一潮流——形による救済の試みに就いて——」、一九五二年の関根慶子「平安後期の新旧歌論の対立について」等¹⁾に用語が確認できる。大規模なものでは一九六五年の『国文学』の特集「平安後期の文学」、一九七八年の井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』²⁾も同様の時代区分である。

ところが、一九八〇年以降は「一一世紀後半の院政期前まで」を狭く指す場合が多くなる。

論文集や単著の題目でも用例が増え、例えば一九八二年の中古文学研究会編『平安後期物語と歴史物語』一九八三年の守屋省吾『平安後期日記文学論 更級日記讃岐典侍日記』等(3)、枚挙に遑がなくなる。

なお時代区分の揺れはジャンルの問題も関係しており、「平安後期物語」は一一世紀後半の狭い期間を指す場合がほとんどであるのに対し、他ジャンルの場合はより広めの期間を指す場合が多いといえる。

このように「平安後期」という用語の指す時代区分は研究史による変遷やジャンルによる差異があり、現在も統一されていない。本論は「平安後期物語」のように、「平安後期」という語を狭義に用いるものである。この方針は、一一世紀後半にあたる「後冷泉朝」前後を文芸的な一時代の区分とすることにおのずからなる。

では、この方針に意義はあるのだろうか。直前の『枕草子』や『源氏物語』の時代や、以後の院政期に対して、「狭義の平安後期」ないしは後冷泉朝はどのような文芸的状况にあったのか。そこに特質といえるものはあったのか。

先行研究においては、早くに池田亀鑑氏が祿子内親王家に対して「一條朝の場合とは異なり(中略)派閥的なものが解消されてゐる」(4)と述べ、犬養廉氏も同様に「後冷泉朝宮廷は、頼通を中心とする一大血族集団であり、この世界には嘗ての一条朝に見られた如き表だつた対立はない」(5)と述べている。特に犬養氏の指摘した「融和」「共有」といった認識は、現在広く浸透しているといつてよい。

たしかに右の指摘は妥当性があり、この時代の文芸活動を検討する上で欠かせない観点である。しかし、同調的、協調的な時代性という認識が浸透しすぎるあまり、個別の人物や個々の交流に対して、先入観をもって見てしまう弊害が生まれてしまう恐れもある。同質性という先入観は、様々な特質を見落とす懸念を常にはらむものであろう。

そのような中で、近年では個別の施政者に着目したものとして、和田律子氏の頼通論や後冷泉天皇論(6)、中村成里氏の後朱雀天皇論(7)等が注目される。これらは後冷泉朝とその前後において施政者の文化的な特徴を研究するものであり、「融和」「共有」とは別の観点から時代を捉えようとするものである。

本論は、施政者ではなく文芸の生成と享受にじかに携わるもの達、すなわち個別の作品と女房に着目し、この時代を捉えようとするものである。作品の作り手が読み手を意識するとき、または読み手が作品を通じて作り手を意識するとき等から、時代の中の個性が看取できる。時代の中の個性とは、作品研究や作者研究を超えた、より広い視野により見えてくる時代の断片である。

これらの積み重ねが後冷泉朝の文芸の様相を新たに明らかにすると考えられる。次節と次々節ではこの点を詳しく述べる。

二 『河原日記』の研究史と展開

『更級日記』は菅原孝標女の作と伝わる仮名日記であり、一人の女性の半生記という体裁をとっている。近代以降の『更級日記』研究は、長らく「日記文学」ないしは「自照文学」という観点とともにあった。古くは池田亀鑑氏の「自照の文学とは（中略）作者の個性が常にIchの形に於て、自己自らの真実を、最も直接的に語らうとする懺悔と告白と祈りとの文学の一系列」「自照の文学は、内から内への文学である。省察の文学である」という言挙げが端的に表わしたように⁸⁾、日記文学は「身の上話」と「省察」という観点とともにあった。『更級日記』に限らないが、このような観点を含む日記文学研究は現在も行われている。平安の仮名日記を近代的な個人観のみで捉えることには限界がありそうだが、たしかにこのような研究姿勢も一つの手法かもしれない。

ただ一方で稿者は、日記作品は史実をもとにした、史実と地続きの記述によって構成されているという点こそが研究上重要であろうと考えている。日記作品の記述は文芸に携わった実在の人物達の記録の宝庫であり、生成と享受の様相を究明する上で格好の資料である。加えて『更級日記』は、多様な叙述を含み持つ作品でもある。『更級日記』は家庭を守る女性の記録を有しながら宮仕えの女房の記録も有する。そして『源氏物語』を筆頭に多数の物語に親しんでいる上、紀行や伝承、説話に関する叙述までも有する。『更級日記』は後冷泉朝前後を研究するにあたり、横断的な研究方法によって、有効な成果を多数提供しうる作品である。

『更級日記』を時代の中で捉えようとする研究の萌芽は、津本信博氏による周辺人物の伝記的研究⁹⁾に認められるが、近年は和田律子氏の孝標女と頼通をめぐる研究¹⁰⁾や、福家俊幸氏による女房及び物語作者という立場に着目した注釈¹¹⁾等も注目される。

稿者も『更級日記』の記事を端緒として、孝標女が関係した周辺人物や孝標女の読み手への意識等を探り、『更級日記』がいかなる時代に生まれたのか、いかなる時代が『更級日記』を生んだのかという問題をまずは考察したい。

三 後冷泉朝の作者達と読者達

後冷泉朝期は、前後の時代と比較して現存する作品や歌合の記録類が多い。これも前述の「協調的」等と並ぶ、この時代の文芸の特徴といえる。後冷泉朝期は奇しくも『更級日記』と同様に、横断的な手法による生成と享受の研究が有効な時代である。

物語では『狭衣物語』『逢坂越えぬ権中納言』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『私家集では和歌六人党の男性歌人の諸集や、『出羽弁集』『四条宮下野集』等の女房家集、歌合では寛子等の后妃主催のものや、祐子・禊子内親王姉妹主催の諸歌合等が現存しており、横断的な研究を通じた文芸活動の究明が可能な環境にある。

これらを個々の作品研究という視点ではなく、時代における生成と享受の研究という視点からトータルにながめることで、従来とは異なった研究課題が見えてくるだろう。久下裕利氏の王朝物語官名形象論や井上新子氏の物語歌合をめぐる諸論稿などは先駆的な問題意

識を持つものであるが¹²⁾、このような視点は現在僅少であり、本論文は一つの先駆となるだろう。例えば、『狭衣物語』は近年テクスト論や受容の研究が盛んであるが、同時代的な女房同士の関係性という点で、重要な問題がまだ山積している。『四条宮主殿集』は寛子付の女房家集でありながら、その特異な構成により後冷泉朝の文芸状況と切り離されて認識されていた。

このような問題に一つ一つ向き合い、複数の作品への横断的なアプローチから後冷泉朝期の様相を探りたい。所属も地位も異なる女房達の関係性や創作態度、享受の姿勢といった諸相を、「融和」「共有」とは別の観点から、複数指摘することとする。

四 各章の狙い

以下、各章の狙いを具体的に列記し、序章の結びとする。

【第一部 『更級日記』と孝標女の時代】は『更級日記』をめぐる五つの章からなる。作品や作者の内面のみに向かうのではなく、『更級日記』という作品を周辺人物や読み手への意識という問題から捉えることで、作品の外部、すなわち平安後期の文芸的状况という開かれた研究課題に向き合うことができるだろう。

【第一章 「殿の中將」藤原長家と祐子内親王家】では、日記中に道長男の長家が点描されることを端緒として、広い視点から孝標女の宮仕えを研究したい。長家が後年、孝標女が仕えることとなる祐子家別当に就任していることは従来ほぼ看過されてきた。しかし、撰関家の末子的存在であり、歌人としても意欲的に活動していた長家という存在から、孝標女及び主家である祐子家の新たな側面が見えてくるのではないか。

【第二章 浮舟と「隠し据ゑ」——『浜松中納言物語』との相互性——】では、『更級日記』以外の作品も含め「隠し据ゑ」という表現及びモチーフに注目する。浮舟に端を発する、別邸に秘匿されるという女君の新奇な境遇が、後冷泉朝に入り『更級日記』及び伝孝標女作の『浜松中納言物語』にのみ集中して現れることから、孝標女の『源氏物語』受容と物語創作という問題と読者達の問題と、両方に迫りたい。

【第三章 長谷寺記事と菅原道真】では、長谷寺記事群と孝標女の父祖道真(天神)とを考え併せる。長谷寺記事と道真とは一見無関係に見えるが、各寺社の十一面観音の照応や、道真偽作の長谷寺縁起類から、二つのつながりが見出せそうである。併せて、同時代の文芸をめぐる天神信仰にも触れ、時代の中における孝標女の意識も考えたい。

【第四章 源資通と「天照御神」「冬の夜の月」】では、出仕先で交わされたやり取りの中の、冬の月が「すさまじきもの」とされるという言説に着目する。平安中期、後期の冬の月の用例及び「すさまじきもの」と評される用例を調査することで、ここに新たな側面が見えてくるのではないか。併せて、この場面と天照信仰との関わりに留意して、『更級日記』における物語と神仏信仰という大きなテーマにもアプローチしたい。

【第五章 女房日記の踏襲と逸脱——主家賛美の欠如をめぐる——】では、宮仕え記事

に主家賛美の記述が欠如していることに着目し、そこから政治的状況に迫りたい。同時代の他作品との比較検討を重ねることで、『更級日記』における読者に対する意識や、アピールの方向性といった、生成と享受の問題が見えてくるだろう。

【第二章 後冷泉朝前後の作者達と読者達】は後冷泉朝とその前後における、五つの章からなる。こちらでは後冷泉朝の文芸的状況の考究を目的として、作者と作品に限定されないレンジの広い議論を集積させる。例えば『狭衣物語』や『四条宮主殿集』を端緒とする章もあるが、特定の作品に依らない章もある。これは時代的な状況を研究することの重要性の提起でもあり、その研究成果の嚆矢ともなるだろう。

【第一章 「左右」の修辞法の展開——紫式部から後冷泉朝へ——】では、仮名作品にみられる「左右／ひだりみぎ」の用例を広く調査、考察する。「左右」の語には複数の意味を重ね合わせる特殊な用法が存在したとおぼしく、ここから作者間や作品間、通時的、共時的といった様々な影響関係が見出せそうである。散文韻文を問わず、また漢文や上代の用法をも視野に入れつつ、議論を展開したい。

【第二章 『狭衣物語』における源氏の宮付の女房達——男君への応対を中心に——】では、『狭衣』の源氏の宮付の女房達に着目する。先行作品の『源氏物語』等との比較を通じて、『狭衣物語』の源氏の宮付の女房の特徴を探りたい。彼女達を、『狭衣物語』が作られたとおぼしい実在の祿子家女房達と考え併せることで、生成・享受圏の新たな諸相が見えてくるだろう。

【第三章 『狭衣物語』の「大式三位」と大式三位藤原賢子】では、狭衣帝の乳母である「大式三位」に着目する。彼女は物語の終盤で狭衣思いの乳母から権威的な高位の乳母に変わすが、同時代の大式三位藤原賢子の存在を考慮に入れたとき、結末部のいまだ指摘されていない技巧が見出されるだろう。主人公の最終的な在り方とともに、実在の賢子に対する揶揄や戯画化といった問題も浮上しよう。

【第四章 『四条宮主殿集』における恋の歌群の遍在】では、従来マイナーな扱いをされてきた女房家集『主殿集』に光を当てる。この家集は仏道帰依を吐露する序跋と、出家の前夜をシンメトリーに配列した構成から、長らく仏道の問題意識ありきの研究状況にあった。しかし今まで見過ごされてきた恋の遍在や寛子家周辺の問題を視野に入れて、「女房」や「後宮」といった観点からこの家集に再検討を加えたい。

【第五章 後冷泉朝における后妃文芸圏と内親王文芸圏の位相】では、女房集団の活動を主家ごとに比較検討する。この時代は協調・融和・共有といったキーワードのもと文芸活動が語られるが、后妃や内親王といった主家の違いに目を向け、現存・散逸作品を概観することで、この時代の文芸活動における家ごとの新たな位相が見えてくるだろう。

注

(1) 益田勝実「平安後期に於ける貴族文芸の一潮流——形による救済の試みに就いて——」『文学』第一九卷第一号、一九五一年一月)、関根慶子「平安後期の新旧歌論の対立について」『お茶の水女子

- 大学人文科学紀要』第二巻、一九五二年二月）等。
- (2) 『国文学』（第一〇巻四号、一九六五年三月）、井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』（笠間書院、一九七八年）。
- (3) 中古文学研究会編『平安後期 物語と歴史物語』（笠間書院、一九八二年）、守屋省吾『平安後期日記文学論 更級日記讀岐典侍日記』（新典社、一九八三年）。
- (4) 池田亀鑑「後期」の概説（久松潜一編『日本文学史 中古』至文堂、一九五五年、三三三頁）。
- (5) 犬養廉「撰関時代後期の文学潮流——後冷泉朝文壇への証明——」（『国文学解釈と鑑賞』第二八巻 第一号、一九六三年一月）。
- (6) 和田律子『藤原頼通の文化世界と更級日記』（新典社、二〇〇八年）。
- (7) 中村成里『平安後期文学の研究 御堂流藤原氏と歴史物語・仮名日記』（早稲田大学出版部、二〇一一年）。
- (8) 池田亀鑑「自照文学史」（津本信博編『日記文学研究叢書第一五巻』クレス出版、二〇〇七年三月、初出は『国文教育』一九二六年十一月）。
- (9) 津本信博『更級日記の研究』（早稲田大学出版部、一九八二年）。
- (10) 前掲(6)の和田著書。
- (11) 福家俊幸『更級日記全注釈』（角川学芸出版、二〇一五年）。
- (12) 久下裕利『王朝物語文学の研究』（武蔵野書院、二〇一二年）、井上新子『堤中納言物語の言語空間——織りなされる言葉と時代』（翰林書房、二〇一六年）。

第一部

『更級日記』と孝標女の時代

第一章 「殿の中将」藤原長家と祐子内親王家

『更級日記』前半の少女時代の記事には、死んだ「侍従の大納言の御むすめ」、すなわち藤原行成女が、作者孝標女のもとに猫になって会いに来るというエピソードがある。この場面では、行成女の猫転生が特に印象的であるが、行成女の死に際して点描される、その夫・藤原長家についても注目すべき問題があるのではないか。これまでの『更級日記』研究ではとりあげられることさえほとんどなかったが、本章では、日記中に点描される藤原長家という人物を、当時の宮廷社会や、女房達の文化圏という視点から考察することを目的とする。これは、日記作者である孝標女や、日記読者である当時の人々の問題、いわば『更級日記』の一基底の解明へと通ずるだろう。

ちなみに、近年の先行研究には、少女時代の記事と、出仕後の孝標女の周辺とを積極的に関わらせながら考察するものがある。和田律子氏や、福家俊幸氏の論稿⁽¹⁾が挙げられるが、本章もその点でこれらと軌を一にするものである。

以下具体的に、長家の点描される場面を確認した上で、長家の親戚関係や職掌、文芸活動といった問題を、孝標女や当時の人々に留意しながら順に見ていきたい。

一 『更級日記』に点描される藤原長家

藤原長家についての先行研究は、まとまったものとして久保田淳氏の『新古今歌人の研究』⁽²⁾、井上宗雄氏の『平安後期歌人伝の研究』⁽³⁾がある。長家は藤原道長の六男であり、明子所生であったが、倫子の養子となった。道長、頼通に可愛がられる、撰閲家の末子的な存在であった。また、作歌活動に意欲的であり、御子左流の祖としてもよく知られる。

長家は治安元年(一〇二二)の春に幼妻・藤原行成女に先立たれてしまうのであるが、その時の悲嘆に暮れる様子が、『更級日記』の少女時代の記事に点描されている。それがつぎの本文である。本章では引用に際し、人物呼称に対し適宜(一)内に注を補った。

また聞けば、侍従の大納言の御むすめ(行成女)亡くなりたまひぬなり。**殿の中将**(長家)おぼし嘆くなるさま、わがものの悲しきをりなれば、いみじくあはれなりと聞く。上り着きたりし時、「これ手本にせよ」とて、この姫君の御手をとらせたりしを、「さよふけてねざめざりせば」など書きて、「鳥辺山たにに煙のもえ立たばはかなく見えしわれと知らなむ」と、いひ知らずをかしげにめでたく書きたまへるを見て、いとど涙を添へまざる。^(二)

(二) 二九六頁～二九七頁

孝標女が行成女の死を伝え聞くこの場面は、乳母の死の場面の次に置かれ、乳母、行成女、姉という、少女時代に連続する死別記事の中程に位置する⁽⁴⁾。ここでは、行成女の夭折と

ともに、夫である長家の悲嘆を併せて伝え聞いているが、この「殿の中將おぼし嘆くなるさま」という点描に着目したい。

『更級日記』中、長家が登場する場面は右の一箇所だけであり、文言もごく簡単なものとなっている。しかし、『更級日記』という作品自体が、公卿等をはじめとした、いわゆる上流貴族の登場場面に乏しいという性格を持っていることを考え併せると、今回の長家の登場が、日記にとって本文表現の簡素さと裏腹に、重要な意味を持っているのではないかと思われる。

そもそも、行成女の夭折は、当時の貴族社会において広く認知され、おそらく語り種にされていた出来事であったようである。長家と行成女両者の家柄からも、そのことは容易に想像できるが、つぎの『栄花物語』巻第一六「もとのしづく」には、行成女の夭折と長家の悲嘆の様子が詳しく記述されており、当時の具体的な状況の参考になる。

侍従大納言の御姫君、ついたちごろよりいみじうわづらひたまひて、限り限りと見えたまふ。大納言の北の方も、静心なく思しまどふ。三位中將も若き御心地に、いとあはれに思しまどふ。いみじう頼もしげなくおはすれば、限りにこそはと思しまどひたり。

(中略) 中將の君いみじう若うをかしげなる男の、烏帽子、直衣なるが、ものもおぼえず泣きまどふさま、あはれに悲しげに見えたまふ。(中略)

中將の君、思ひ寝に寝たる夜の夢に、女君の見たまひければ、中將殿、
夢のうちの夢の宿りに宿りしてわが身は知らで人ぞ恋しき

また、

死ぬばかり恋しき人を恋ふるかな渡河にてもしも逢ふやと (②二六頁〜二七一頁)

史実としての信憑性が完全に保証されるわけではないが、右の引用に見える長家の「いみじう若うをかしげなる男の、烏帽子、直衣なるが、ものもおぼえず泣きまどふさま」という様子や、二首の挽歌は、当時の世間において広く流布していた長家像かと思われる⁵⁾。

また、漢文日記では、『小右記』治安元年(二〇二)三月一九日条に行成女が死去した際の記録が残っており、つぎに引用する治安元年(二〇二)一〇月二四日条には、長家が斉信女との再婚を迫られ、行成女の一周忌が過ぎるまでは再婚をしたくないと、涕泣して無言の抗議をしたとある。

宰相云、来月九日中宮大夫斉信如着裳「欠損」「行婚禮」右近中將長家云々、而中將一切「欠損」、去四月妻亡、一周忌間可無他忌而不知彼指意、偏所經營云々、入道憚室呼中將宣事由、涕位無言、仍憚室曰、至今不可示左右、可任彼心者、是権大納言行成一昨日所密談也、

この再婚の話は、行成と実資が密談した内容のようであるが、長家が故行成女を思慕し、悲嘆に暮れていた様子は、当時広く流布していたのではないかと考えられる。

この長家という人物が、当時の人々からどのように認識され、どのような評価を受けていたのか、他史料に広く目を通しながら確認していきたい。そこから、長家と孝標女との後年

のつながりや、両者の仕えた祐子内親王家とのつながりが、新たに覚えてくる。これは、『更級日記』の作者や読者圏を考察する上で、無視できない問題である。

次節では、まず祐子内親王家における長家と孝標女の後年の接点を確認しておきたい。

二 長家の祐子内親王別当就任について

行成女の死から約二十年後、長家と孝標女両者は、奇しくも祐子内親王家に仕えることになる。長家は長暦四年（一〇四〇）十一月二三日に、祐子の別当に就任するのだが、孝標女も長暦三年（一〇三九）冬頃に、祐子家に初めて出仕しているのである。

長家の祐子別当就任については、つぎの『春記』長暦四年（一〇四〇）十一月二三日条に詳しい記述がある。

甲戌、晴天、今日故中宮第一女宮袴着日也（中略）関白被参御前、又召予被仰云、**以按察藤原朝臣長家**、可為祐子内親王别当之由可仰者、予申云、可仰他上卿歟、将只可仰彼人歟、仰云、只可仰彼人也者、**即仰長家卿了**、在南廊下、良久之内大臣参進、被奏詔書清書、予奏之、即下給了

右の記事から、祐子の袴着の儀に際して、後朱雀天皇と頼通が、長家を祐子の別当としたことがわかる。孝標女が祐子家に出仕した正確な日付はわかっていないが、御物本『更級日記』の書入や出仕記事の前後の文脈から、長暦三年の冬頃と推定できる。この時期、祐子の母である娘子中宮が逝去したことにより、祐子のもとに公卿や女房達が後盾として配されたのであろう。このような事情も、孝標女の出仕時期の裏付けになるかと思われる。

しかし、この孝標女と長家との後年の関係について言及している論者は、管見の限り津本信博氏のみである⁶。津本氏は、長家の祐子別当就任の史料として右の『春記』の記録を掲げ、つぎのように述べている。

この長家は日記に「殿の中將」と呼ばれている道長の六男で、作者の書道の手本になった行成女の夫なる人物である。（中略）その行成女は治安元年に病死してしまい、孝標女は悲嘆にくれるが、それから十八年後行成女の夫・長家に宮仕先の祐子内親王家で逢うことになるが、作者の胸には複雑な思いが去来したことであろう。（八三頁）

津本氏の指摘は首肯されるべきものであり、長家と孝標女は祐子家周辺において、何らかの形で交流を持っていたのではないかと思われる。

ただ、私見によれば、長家には別当就任以外にも、『更級日記』との関わりにおいて、注目に値する点が多々認められる。長家が『更級日記』に与えた影響を、さらに掘り下げて考察することが可能ではないだろうか。

長家は、政治的側面においては、祐子家にとって単なる別当以上に重要な存在であり、文芸的側面においては、女房文化圏及び歌活動という方面に強い関わりを持つ人物である。これは、『更級日記』の作者、読者をめぐる問題を考える際に、留意すべき一側面となるだろう。

次節以降で、長家の政治的側面と文芸的側面を順に確認したい。

三 長家・行成一族・中関白家系皇統

本節では、長家が親子の代に渡り、行成等と非常に親近していたことをまず確認した上で、そのことよって、長家が定子——敦康——姫子——祐子という皇統と、接点を持つ人物であったことを明らかにしたい⁷⁾。この、祐子へと繋がる系図は、道隆を外戚とするため、便宜上中関白家系の皇統と呼ぶ。

長家が行成に婿取られるも、行成女の夭折により婚姻が解消されたことは先に確認した。行成は『更級日記』にも「大納言殿」として、名のみが幾度か登場するが、長家と行成は、単なる婿と舅以上に、行成女との婚姻を契機として長らく親しい間柄であったようである。まず、長家の父である道長と行成のやりとりについて、『権記』長保元年(九九九)一二月七日条の内容を確認する。

…丞相命云、此事雖不承指期日、承一定之由、汝恩至也、大都候顧問之後、觸事雖見芳意之深、不能示其悦、今在斯時、彌知厚恩、於汝一身事無所思、**我**(道長)有數子之幼**稚**、**汝**(行成)亦有數子、若有天命有如此事之時、必可報此恩、亦如兄弟可相思之由、可仰含者、欣悦給旨甚多、…

右の引用は、彰子入内に大きく貢献した行成に対し、道長が謝意を述べた際の記録である。ここで道長は、「我に数人の子が有り、汝行成にも同様に数人の子が有る。もし天命があつてこの事のような時があれば、必ずこの恩に報いよう」という発言をしている。これは、後に道長男の長家と行成女との婚姻が成立した要因の一つかと思われるが、この時点から長家と行成の親族同士のつながりが強く存在していたことがわかる。

実際、行成女の死後、婚姻が途絶えた後も、長家が行成に親近していたことが、つぎの『栄花物語』巻第三〇「つるのはやし」の記事からうかがえる。

…**この殿**(行成)の御死こそ、いとあへなき御事に世の人聞ゆ。**中納言殿**(長家)、かからぬをりならましかば、送りきこえてまじと口惜しう、人知れずあはれにぞ嘆かせたまふ。
③一七三頁～一七四頁

行成の死に際し長家は、父道長と同日でなければ、葬送に参列できたものと悔しく思ったとあり、長家と行成は行成女の死後も長らく親密な間柄であったことがわかる。

そして、長家は行成の死後、行成男の行経を養子としていたことが、『栄花物語』巻第三四「暮まつほし」の記事により確認できる。

内より御使**行経**の四位少将参る。手書きの大納言の御子、今の**権大納言民部卿**(長家)になりたまへる、子にしたまへり、かたちよく華やかなる人なり。
③二八七頁

これは、行経の宮中での出世のために取られた措置だと思われるが、長家と行経は実際に親密な関係を築いていたらしい。

なぜなら、つぎに引用する『春記』長暦二年（一〇三八）一月二日条には、長家男「家通」（道家のことか）（8）が元服に際し御前に参上した記録が見え、このとき行経が家通の「輔者」を務めたことが併せて記されている。

今日中宮大夫長家卿息故頼明妻原也、其女為妻也、**家通**加首服云云（中略）**亥終許**、**長家卿****息**参入、**行経朝臣**為其**輔者**云々、…

また、のちに詳しく紹介するが、関白左大臣頼通歌合、いわゆる水閣歌合の一番左の歌を、長家が実作し、行経が清書したことが『左経記』長元（一〇三五）八年五月一六日条中の首付で確認できる。これらのことから、長家は行成だけでなく子の行経とも、実際に親近した間柄であったといえよう。

つぎに、長家と行成、行経の親近性と考え併せるかたちで、中関白家系の皇統、すなわち定子——敦康——姫子——祐子の四者へと目を向けた。行成、長家、行経は、定子達に代々親近していたようである。

まず行成であるが、定子に仕えた清少納言の『枕草子』によく登場することから、彼が定子方の文化圏において、深く関わっていた存在であることが想像される。そして行成は、職掌上は定子に仕えていたわけではないが、彰子の立后に際し、定子の体面を保てるような名分とも解釈できる進言を、一条天皇にしている（9）。行成は、厳しい境遇となっていく定子に対しても、配慮を欠かなかったのだろうと思われる。

定子の崩御後には、行成は敦康親王の別当となり『権記』長保三年（一〇〇一）二月二八日条、その後も、行成が敦康の戴餅に奉仕した記録『権記』長保四年（一〇〇二）一月一日条）や、敦康によく奉仕するようになると一条天皇から念を押された記録（同年四月二八日条、敦康家の経済状況を道長に答弁した記録（同年五月四日条）等が散見され、実務等において行成は敦康によく奉仕していたことがうかがえる。行成は定子——敦康母子のためによく奉仕していたのである。

つぎに長家であるが、彼は先に述べた祐子の別当就任以前に、彼女の母である姫子中宮の中宮大夫を務めていたことが、『栄花物語』巻第三四「暮まつほし」の記述から確認できる。

三月に、また**式部卿**宮の**姫君**（姫子中宮）、后に立たせたまふ。一品宮をば皇后宮、この宮をば中宮と申す。大夫には**民部卿**（長家、…（後略）（③二八八頁）

右の記事は長暦元年（一〇三七）のことと思われるが、姫子は敦康の実子であり、このときは頼通の養子となっている。行成が定子——敦康のもとでよく活動したのに続き、長家も姫子——祐子の二代に渡り、政治的な後見となっていたことがわかる。

つづく行経も、中関白家系の皇統にある程度親近していたようで、『栄花物語』巻第三四「暮まつほし」には、姫子入内の際に、行経が勅使として姫子のもとに参上したこと（③二八七頁）が見え、『春記』長暦三年（一〇三九）十一月七日条には、行経邸に渡っていた祐子と頼通が、高倉邸に帰った記録がある。姫子への勅使は公の職務であるが、祐子の滞在については、行経が祐子に関わりのある存在であったことが想像される（10）。

以上のように、長家は行成、行経とともに、代々中関白家系の皇統に親近した存在であった。このような系図上の観点から、長家が祐子の別当に就任したことの政治的有効性が読み取れる。敦康の別当であった行成の婿長家は、敦康女である嬢子や孫の祐子の後見に就いている。このことは、嬢子家や祐子家の関係者達にとっても、好ましい人選と認識されていたのではないか。

加えて、嬢子と祐子が、執政者である頼通にとって、外戚政治の重要人物であったことも無視できない。嬢子は後朱雀天皇の中宮として皇子出産を期待され、祐子も同様に「立后事故中宮御女皇等事、関白有懇切之気云々」〔春記〕長暦四年（一〇四〇）八月九日条）と、頼通がいずれ立后させたいと懇切に思っていた皇女であった。このような、頼通の外戚政治において重要な存在であった嬢子、祐子母子の後見を務めた長家は、後見としてその存在を重要視された人物であったと思われる。実際、長家は「得意人々候御前聞之、所謂長家師房等也」〔春記〕永承七年（一〇五二）七月二日条）と、頼通の意を得る人としてその名を挙げられている。

結果として、嬢子、祐子は外戚政治に貢献しなかったものの、長家が中宮大夫や別当に就いた当時、行成の元婿であり、撰関家の男子である彼に、嬢子家や祐子家の者達は、強く注目したはずである。その者達には、『更級日記』を著した孝標女や、日記読者となる周辺の女房、貴族達が確実に含まれる¹¹。『更級日記』に「殿の中将」として長家が登場することについて、以上のような政治的背景を考慮すべきだろう。

四 長家の歌合参加への姿勢

本節では、長家の文芸的側面として、彼が参加した歌合をもとに、その参加姿勢や、注目すべき作歌を確認する。

ちなみに、長家の文芸活動についての先行研究には、前掲の井上氏、久保田氏のもの以外に、久下裕利氏のものがある¹²。久下氏は、章子内親王家女房の出羽弁が、長家と接点を持ち、彼から文芸活動上の影響を受けたと指摘する。論拠として、『出羽弁集』中の、章子が長家邸に方違えをした記事や、出羽弁が差配したとおぼしい物語歌合中の物語名に、長家の官職である「民部卿」が二度も用いられること等を挙げるが、首肯されるべき論考である。のちに再び触れるが、長家は出羽弁と深く関わり、女房達の文化圏へ影響を与えていたと思われる。

さて、長家が出席した歌合は、現在記録が残っているもので、三つの歌合が確認できる。この数字は、当時の歌合の開催頻度を考えると、決して多い数字ではないが、撰関家の男子という高い出自であることや、歌合への積極的な参加姿勢、同時代歌人と似通った作歌等を考慮すると、長家が歌合や作歌活動において、人々に一目置かれる存在だったのではないかと思われる。

以下、三つの歌合から長家に関する箇所を、順に引用し検討する。なお、引用に際し、長家を指す官職名に囲みを付した。

①長元八年（一〇三五）五月十六日 関白左大臣頼通歌合

：諸卿参入。内大臣、春宮大夫、中宮権大夫、**権大納言**、…（中略）

一番 月 左勝

夏の夜もすずしかりけり月影は庭しろたへに霜とみえつつ（後略）

右の①は「水閣歌合」とも呼ばれる歌合で、長家の出席が確認できる最初の歌合である。長家は一見、観覧のみをする「諸卿」として、歌合に参加したように見える。ちなみに、長家は退下する際、頼通から馬一頭を贈られたことが記録されている。

ただ、長家が本歌合で詠出していた可能性として、一番左の歌に注目したい。十巻本歌合の本文では、一番左は作者名が無記名となっている⁽¹³⁾。しかし、当日の子細を記録した『左経記』長元八年五月一六日条には、一番左の首付として、作者に関する注記が存在する。『左経記』では、「夏の夜も涼かりけり月景の庭白妙に霜と見管な」という和歌本文に、「行経書實大納言」と付されており、これは井上氏が指摘するとおり⁽¹⁴⁾、長家が歌を作り、長家の養子となっていた行経がそれを清書したという意味だと思われる。歌合の一番左を実作するあたり、長家の歌合に対する積極的な参加姿勢、詠作への自負心がうかがえる。当然、それは周囲の人々にも認知されていたはずである。

②永承五年（一〇五〇）六月五日庚申 祐子内親王歌合

桜 **中宮大夫**

花の色に天霧る霞たちまがひ空さへ匂ふ山ざくらかな

郭公

寝覚めして聞きたびごとに郭公旧りせぬものは五月雨の声

鹿

過ぎてゆく秋のかたみにさを鹿の自が鳴く音も惜しくやあるらむ

つぎに②の歌合であるが、これは長家が別当を務めた祐子内親王家のもとで催された、比較的大規模な歌合である。長家は歌合の後宴で、興の乗った他の公卿とともに、和歌を三首詠んでいる。

三首目の歌には、同時代の歌合に注目すべきものが二首ある。

さよふけてた^{かく}びのそらにてなくかりはおのがはかぜやよさむなるらむ

（皇后宮春秋歌合・一〇・伊勢大輔）

たちはなれさはべに荒るる春こまはおのがかげをやともと見るらむ

（弘徽殿女御歌合・七・しげなり）

これらはいずれも動物を擬人化し、下の句において「おのがくやくらむ」と、その心中を推量する詠み方になっている。先行歌では、鶯を詠んだ「こづたへばおのがはかぜにちる花をたれにおほせてこくらなくらむ」（古今集・一〇九・そせい）等が類似するものの、動作主の動物名が歌中にあり、かつ下の句で「おのがくやくらむ」の構造を取っている歌は、長家の時代以前には見られない。

時系列としては、しげなり歌が長久二年（一〇四二）、長家歌が永承五年（一〇五〇）、伊勢大輔歌が天喜四年（一〇五六）となるが、この三首の類似性を見るに、長家は同時代の出詠歌群の動静に関わるかたちで詠作を行っていたようである。特に、伊勢大輔歌はつぎの③で述べる通り、長家が選者として歌合に選出したものである。長家が他者の出詠歌に目を配り、同様に他者も長家の出詠歌を参考にすることがあったのではないか。

③天喜四年（一〇五六）四月卅日 皇后宮寛子春秋歌合

講師 左 権亮顕家 右 亮師基 読師 左 新頭中将顕房 右 前頭中将隆俊

判者 内大臣堀川 頭 左 内大臣 右 民部卿大宮（中略）

六番（中略）右 鹿 民部卿

高砂の尾上の鹿をゆく舟のうらがなくや過ぎがてに聞く（中略）

八番（中略）右 紅葉 民部卿

大堰川たぎつ瀬もなく秋ふかみ紅葉の淵となりにけるかな（中略）

九番（中略）右 菊 民部卿

紫の深からざりし秋だにも菊は心にしめてしものを

この③の歌合では、長家は右方の選者という大役を務めている。この時長家は、右方の十首のうち三首に、自作の和歌を選ぶという行動を取っている。右に引用した六番、八番、九番の和歌であるが、自作を多く選出するという行為からは、長家の作歌活動における明らかかな自負心、積極性を見てとることができる。

まず九番の歌であるが、同時代の歌に気になるものがある。

人しれずひとまたざりしあきだにもただにねられしころの月かは 『相模集』（二一九）

この歌の詞書は「月いみじうあかき夜」となっており、公の場で詠まれたものかどうかはわからない。ただ、傍線部のように長家歌と一致する箇所があり、長家と相模の詠作間に、何らかの関係がある可能性も考えられる。

一方、自作を多く選ぶ長家の行動は、やはり周囲から注目されたようである。『袋草子』が引く『土右記』の逸文とおぼしい『土記』の記事に、この時の長家と周囲の様子が記されている。

土記云、前一日、左方人向内大臣家判者撰和歌。右方向民部卿家長家撰定。民部卿以自作多入。方人含咲者衆云々。

長家が自作を多く選んだことに対し、方人で笑いを含んだ者が多かったとある。これは、長家の自負心や自尊心に対し、半ば呆れ、半ば感心したような、単純な嘲笑ではない笑いであったかと思われる。

また、『四条宮下野集』七七の左注からは、別の方面で長家の采配が話題となっていたことが確認できる。

宮の歌合、世にののしりて、日記あることなれば、これは書かず。（中略）方人の民部卿のもとにて選られしに、方の人々集まりて、宮亮師基、「御歌三つ入りぬ」と、告げ遣

せ給へりしほどに、「女院(彰子)より「これを」と、仰せられたるとて、伊勢大輔がに、二つは替へられぬ」と口惜しがり給ひしこそ、その折うれはしかりしか。

寛子付きの女房下野の歌が、長家によってはじめ三首選ばれていたところ、彰子から長家へのはたらきかけにより、そのうち二首を伊勢大輔の歌に変えられてしまったというエピソードである。このエピソードからは、長家と彰子の親密さや、それによる選出の変更が人々の耳目を集めたであろうことがうかがえる。この選出変更は、下野の他に、左注に名前が確認できる師基や、伊勢大輔方の女房達のもとでも、話題になっていたはずである。これも、長家の選出に対して、周囲が関心を持っていた例であろう。

以上、長家の参加が確認できる歌合を、順に三つ見てきた。長家は歌合に参加する際、作歌に積極的な姿勢を見せており、かつ彼の出詠歌の中には、同時代の歌人達の歌と構造が共通するものが含まれていた。長家について、井上氏は「数寄者としての態度を深めて行った」(15)と述べるが、首肯されるべきである。このような長家の姿勢は、周囲の人々に認知され、文芸活動によく関わる人物として捉えられていたはずである。

ここで考え併せたいのが、『栄花物語』に幼妻を失った長家の悲嘆が詳しく記されるといふことや、久下氏が述べる出羽弁と長家との文芸上の繋がりにある。長家は、『栄花物語』では悲劇の貴公子として詳述され、『出羽弁集』では方違えに渡ってきた章子家女房達により、邸宅を賛美する歌を多数詠まれ、『物語合』では差配者とおぼしい出羽弁にその存在も意識されていた。長家は自身の和歌活動と同様に、このような女房達の文芸的諸活動においてもよく関わりを持ち、意識される存在であったことと推察される。

『更級日記』の作者は祐子家女房であり、読者は祐子家の女房や祐子自身、そしてその周辺の人々ではないかと思われる。日記中に「殿の中將」として長家が登場することについて、前節で述べた政治的背景と同様、本節で述べた文芸的背景も考慮すべきだろう。

五 まとめ

本章では、『更級日記』に登場する「殿の中將」長家をめぐって、親戚や職掌という政治的背景と、歌合や仮名作品という文芸的背景の二点から考察をした。長家は、孝標女の仕えた祐子家の人々や、周辺の人々にとって、重要かつ印象深い人物であった。

このことから、長家が『更級日記』に点描された理由や意図といったものが、見えてくるのではないか。日記作者である孝標女にとって、長家は主家の別当であるが、彼は少女時代に交流があった行成女の婿である。長家の姿を点描することで、自分と長家の意外なつながりを日記に記すといった意図があったのかもしれない。また、日記読者である当時の人々、特に祐子周辺の女房達から、長家は政治的にも文芸的にも強く意識されていたはずで、彼の日記登場は、読者達に『更級日記』をより親しませる要因となったとも思われる。孝標女は読者達に向けて、日記の記事を祐子家にとって受け入れやすい、ふさわしいものにしようと長家を記したのかもしれない。

一方で、長家が日記に記される意図として、祐子家側からの外部に対するアピールということも考えられよう⁽¹⁶⁾。『紫式部日記』や『枕草子』が、交流のある上流貴族を記事にし、後宮の権威、隆盛をアピールしたように、『更級日記』も長家の名を挙げて、彼が別当であり、祐子家に親近していることを示したとも考えられる。ただ、『更級日記』は主家賛美、主家の対外的アピールという要素を素直に記した作品ではなく、この問題は論じるべき点が残る。第一部第五章で改めて考えたい。

※『栄花物語』は「新編日本古典文学全集」に、『小右記』は「大日本古記録」に、『権記』『春記』『左経記』は「増補史料大成」に、『袋草子』は「新日本古典文学大系」に、歌合は「平安朝歌合大成」にそれぞれ拠った。

注

- (1) 和田律子「場の文学」としての『更級日記』(『藤原頼通の文化世界と更級日記』新典社、二〇〇八年)、福家俊幸『更級日記』冒頭表現と上洛の記の成立——候名と読者の問題——(『学術研究——人文科学・社会科学編——』第六〇号、二〇一二年二月)。
- (2) 久保田淳『新古今歌人の研究』(東京大学出版会、一九七三年、一八〇頁〜一九三頁)。
- (3) 井上宗雄「道長の諸子」、(『平安後期歌人伝の研究増補版』笠間書院、一九八八年)、初出は「藤原長家の生涯」(『国語国文』第四三巻第二号、一九七四年二月)。
- (4) 秋山虔校注『新潮日本古典集成 更級日記』(新潮社、一九八〇年)の「解説」一四二頁では、この連続する死別記事を「人の世の愛別離苦」と捉え、志津田兼三「更級日記考——なぜに夕顔・浮舟か、そのよしなき物語・歌の中心に」(『国語と国文学』第五八巻一〇号、一九八一年一〇月)では、行成女の死を姉の死の呼び水のようなものと捉え、久我有生『更級日記』「猫への転生」段の位置づけ」(『解釈』第五八巻第三・四号、二〇一二年四月)では、猫の転生譚が、「姉と作者の感性の同一性を示す」「姉妹の物語の発端」であると捉える。
- (5) ちなみに、甲斐稔『栄花物語』と藤原長家」(『國學院大學大学院紀要——文学研究科——』第一五輯、一九八三年)は、長家の挽歌が行成家の史料によるものではないかと考察している。
- (6) 津本信博『更級日記の研究』(早稲田大学出版部、一九八二年)。ちなみに、津本氏は同書四五頁〜四七頁、一二四頁で、孝標女兄弟である定義と長家との、交流の可能性を指摘する。
- (7) 長家達と中関白家系の皇統との繋がりについての考察は、二〇一三年一月二二日に、和田律子氏より教示を賜った。なお、この問題に関連する同氏の論稿に、「藤原頼通文化世界における『枕草子』の一樣相——『更級日記』を中心に——」(『古代中世文学論考』第二九集、二〇一四年四月)がある。
- (8) 前掲(3)井上論文の二九頁において、井上氏はこの「家通」は長家男の道家の誤りだろうと指摘する。首肯されるべきである。
- (9) 黒板伸夫『藤原行成』(吉川弘文館、一九九四年)に詳しい。

- (10) 行経の事跡は、黑板伸夫「藤原行成の子息たち——後期撰関時代の政治と人脈を背景に——」(『後期撰関時代史の研究』吉川弘文館、一九九〇年)に詳しい。
- (11) 『更級日記』の末尾部分によれば、隠棲し、孤独な身の上の孝標女がこの日記を書いているように読めるが、稿者はこの日記の大部分が女房の文化圏周辺において執筆されたと想定している。当時の仮名作品の成立状況等を考えると、日記読者として、ある程度多数の周辺の人々を想定すべきかと思われる。
- (12) 久下裕利「第一部 王朝物語官名形象論——物語と史実と 第一章 民部卿について」(『王朝物語文学の研究』武蔵野書院、二〇一二年)、初出は「民部卿について——王朝物語官名形象論——」(『古代中世文学論考』第二集、一九九九年六月)。
- (13) ちなみに一番左の和歌の作者名について、二十巻本歌合では「行経」、『栄花物語』では「四位少将行経」、『後拾遺集』では「民部卿長家」、『袋草子』では「長家卿」となっている。
- (14) 前掲(3)井上論文の三一頁。
- (15) 前掲(3)井上論文の四二頁。
- (16) 祐子家側からの対外アピールとして、長家が日記に記された可能性については、二〇一三年八月二三日、日記文学会大会第六四回大会において、桜井宏徳氏より教示を賜った。

第二章 浮舟と「隠し据ゑ」

——『浜松中納言物語』との相互性——

『更級日記』では「浮舟の女君のやうに、山里に隠し据ゑられて」（二二四頁）というように、浮舟の「隠し据ゑ」られる境遇が「あらましごと」（同頁）として記されるが、この願望はのちに「薫大将の宇治に隠し据ゑ給ふべきもなき世なり」（二二九頁）とある通り、実現できずに終わる。この二つの記事から、作者である菅原孝標女は浮舟に強い思い入れを持った人物だと考えられてきた。また、『更級日記』の浮舟言及記事は孝標女の物語嗜好が表れたものであるという理解がこれまででは一般的なようである。

しかし、この二つの記事は浮舟物語の鍵語といふべき「隠し据ゑ」の持つイメージを的確に把握しているとみられる。加えて、後述するが「隠し据ゑ」は女君が男君の別邸に秘匿されるという、当時の物語において特殊な境遇を表す語であった。孝標女はその境遇と浮舟にとりわけ注目したということになる。「隠し据ゑ」に関しては、孝標女の『源氏物語』受容と物語創作を研究する上で改めて考察されるべきである。

本章はこの『更級日記』の浮舟言及記事における鍵語「隠し据ゑ」をめぐる、孝標女が浮舟物語をどのように読み解き、認識したのか、さらにはそれをどのように用いたのかという問題を論じる。「隠し据ゑ」は、現存する平安時代の仮名作品の中で、『源氏物語』と『更級日記』、そして孝標女作とも伝わる『浜松中納言物語』の三作品にのみ集中して用いられている。しかし、従来の研究では『浜松中納言物語』の用例の検討がとりわけ不足しており、上記の三作品をめぐる議論も不十分なものととらざるをえなかった。この問題を、作品間の関連性と引用という点から考察したい。

『浜松中納言物語』の作者については慎重を期すべきではあるが、これまでの研究状況から孝標女が作者である蓋然性が高いといえよう。古くは藤原定家の手になる御物本『更級日記』の仮名奥書に『夜の寝覚』『みづからくゆる』『朝倉』と並んでその名が著作として記され、藤原為家等の撰による『続古今和歌集』一三一四番・一三九〇番には『浜松中納言物語』の作中歌が異同はあるものの「菅原孝標朝臣女」作として載る。

藤岡作太郎氏が『更級日記』と『浜松中納言物語』の夢の頻出や『源氏物語』からの影響の類似を指摘し、同一作者説を推して以来¹⁾、諸氏により検討が重ねられており、研究史は池田利夫氏が早くにまとめている²⁾。同一作者説は現在でも、父兄の任国等を論じた須田哲夫氏、仮名奥書の執筆態度や類似表現を論じた樋口芳麻呂氏、「石山」等を論じた和田律子氏、「信濃」を論じた福家俊幸氏等により研究が重ねられている³⁾。また同一作者説を論じたものではないが、保坂本『源氏物語』からの摂取を論じた加藤昌嘉氏や、物語群の地名を論じた久下裕利氏の論稿等もある⁴⁾。

これらの先行研究の成果を踏まえ、稿者も両作品の同一作者説を採りたい。孝標女が『浜松中納言物語』の作者ならば、彼女は「隠し据ゑ」という表現もしくはモチーフを、ジャン

ルの異なる二つの自作において相関的に引用していたと考えられる。それはいかなる創作行為であろうか。また、それはいかなる効果を当時の読者に与えたのであろうか。

以下具体的に、『源氏物語』と『更級日記』の「隠し据ゑ」の用例を押さえた上で、『浜松中納言物語』の「隠し据ゑ」を詳しく確認する。「隠し据ゑ」がいずれも女君の特殊な境遇を表す鍵語として用いられている点から、二作品の関係をまず考察する。つぎにそれと併せ、同時代の他作品において「隠し据ゑ」に類するモチーフがどの程度確認できるか検討する。そして最後に、「隠し据ゑ」という鍵語もしくはモチーフが、『更級日記』と『浜松中納言物語』においていかに顕著であり、『源氏物語』の受容からいかなる展開を見せているかを改めて考察する。

一 『源氏物語』の「隠し据ゑ」られる浮舟

本節では論の前提として、『源氏物語』における浮舟の「隠し据ゑ」について確認する。浮舟が薫により、密かに宇治の別邸に住まわされる展開はよく知られているが、このような居住形態が物語において特殊であることは、意外と注目されていないようだ。

浮舟巻において浮舟は薫により密かに盗み出され、世間の目を忍んで宇治の別邸に住まわされることになる。女君が男君により盗み出される物語は枚挙に遑がなく、この浮舟の場合もそれに類するのだが、従来の盗まれる物語とは一線を画する点がある。すなわち、女君が男君の別邸に秘匿されて住まわされ、男君は同居しないという点である。これは薫が慎重で消極的な性格であることや、浮舟が劣り腹で後見を持たない存在であること等が要因と考えられるが、それらの組み合わせが新奇性を生んだのだろう。

このような展開は、散佚物語について考慮する必要があるものの、現存する物語には先例がほぼ存在しないようである。例えば『落窪物語』の落窪の君や『源氏物語』の紫の上は、盗み出されたのち男君の自邸に住まわされ、やがて公的な婚姻に準ずる形で居住する。また、『伊勢物語』六段の芥川や『大和物語』一五五段の山の井等は、女君を盗み出した男君がそのまま自邸を捨てて逃避行を凶っており、やはり浮舟の場合とは状況が異なる。

このように、先行する物語における盗み出される女君達を確認すると、浮舟は従来の盗まれる女君達とは異なった境遇に置かれていることがわかる。浮舟物語は盗まれる話を発展させながらも、男君の管理する別邸⁵での秘匿という特殊な居住形態が描かれたものであった。ちなみに平安後期の作品に関しては後述するが、より後代の、すなわち中世の物語では男君による秘匿よりも女君の失踪という展開が流行するようである。『しのびね』の姫君や『いはでしのぶ』の伏見大君等がそれにあたる。

浮舟の状況を端的に示す本文中の鍵語は「隠し据ゑ」である。「隠し据ゑ」られる浮舟の境遇に着目した先行研究に、石井正己氏と井野葉子氏の論稿⁶がある。両氏が着目したように、浮舟はその境遇において「隠し据ゑ」等の表現が繰り返し用いられる女君であったが、

その男女関係が物語史において新機軸を打ち出したものであるということは、より注目されるべきだろう。

「隠し据ゑう」という動詞を、主要作品の通読による調査ののち、各作品の索引類及びジャンナレッジの日本古典文学全集の検索機能を用いた調査を行ったところ、『平中物語』一例、『枕草子』一例、『源氏物語』三例、『更級日記』二例、『浜松中納言物語』六例、『夜の寝覚』一例、『今昔物語集』二例、『宇治拾遺物語』一例が確認できた⁷⁾。本章が扱う三作品以外は人を物理的に物陰に隠すという意味で「薄のあたりに」法師をぞ隠し据ゑたりける⁸⁾（『平中物語』四八二頁）、「童を」屏風のうちに隠し据ゑたれば⁹⁾（『枕草子』一一八頁）等のように用いる例ばかりである⁸⁾。

それらに対し、女君の特殊な居住形態を示す浮舟の「隠し据ゑ」の用例は、宇治十帖において打ち出された、物語展開の新しさを表している。

A 浮舟巻 大内記、匂宮に対し浮舟について語る。

下の人々の忍びて申ししは、女をなむ隠し据ゑさせ給へる、けしうはあらず思す人なるべし。^{⑥ 一一四頁}

B 浮舟巻 浮舟、匂宮に「隠し据ゑ」られる場合を考える。

……いとあだなる御心本性とのみ聞きしかば、かかるほどこそあらめ、またかうながらも京にも隠し据ゑ給ひ、ながらへても思し数まへむにつけては……^{⑥ 一五八頁}

C 夢浮橋巻 薫、浮舟の現在について邪推する。

いつしかと待ちおはするに、かくたどたどしくて帰り来たれば、すさまじくなかなかなりと思すことさまさまにて、人の隠し据ゑたるにやあらんと、我が御心の思ひ寄らぬ限なく落としおき給へりしならひにとぞ、本に侍める。^{⑥ 三九五頁}

これらは浮舟の境遇を表現しており、Aは「薫が浮舟を宇治別邸に「隠し据ゑ」ていた」という用例、Bは「たとえ匂宮が浮舟を京の別邸に「隠し据ゑ」ても」という用例、Cは「何者かが浮舟を小野に「隠し据ゑ」ているのだろうか」という用例である。

ちなみに、浮舟をめぐる「隠し据ゑ」の類似表現として「浅はかならぬ方に心とどめて人の隠し置き給へる人」（浮舟巻^{⑥ 一〇五頁}）、「かやうの人隠し置き給へるなるべし」（浮舟巻^{⑥ 一三三頁}）、「宮にかしこまり聞こえて隠し置き給へりける」（蜻蛉巻^{⑥ 二四四頁}）、「その御妹、また忍びて据ゑたてまつり給へりける」（手習巻^{⑥ 三五七頁}）等も散見される。「隠し据ゑ」は三例、関連の「隠し置き」等は四例確認できる⁹⁾。

薫が浮舟を「隠し据ゑ」ていたことは物語展開の上でも大きな比重を占めており、Bの仮定表現とCの推量表現では、薫以外の男君を主語として「隠し据ゑ」が用いられている。浮舟の「隠し据ゑ」が、拡がりをもって描かれていることがわかる。

Bは二人の男君の間で煩悶する浮舟の心内語であり、仮に匂宮の京の別邸に「隠し据ゑ」られたとしても、異母姉である中の君に知られて不都合だと考えている。このBは他の用例と異なり、当事者である浮舟自身によって「隠し据ゑ」の語が仮定表現で用いられる。浮舟

は自身の境遇について尋常の婚姻形態ではなく、あくまで「隠し据ゑ」という特殊な状況を想像しており、彼女の「隠し据ゑ」のイメージが強調されている。

Cは夢浮橋巻の末尾、すなわち『源氏物語』全体の末尾であり、小野にいる浮舟の境遇について薫が、何者かが浮舟を「隠し据ゑ」ているのだろうかと邪推する場面である。ここでは薫の俗な思考が皮肉をもって描かれるが、一方で浮舟が「隠し据ゑ」という鍵語を伴ってイメージされる点も注目されよう。事実とは異なるものの、浮舟は物語末尾においてもなお「隠し据ゑ」られる状況を想像されている。宇治十帖は浮舟の「隠し据ゑ」のイメージをあくまでも強く打ち出しつつ、終焉を迎えるのである。

以上、浮舟をめぐる「隠し据ゑ」という鍵語の重要性を確認した。浮舟は「隠し据ゑ」という鍵語が繰り返し使用されるだけでなく、薫を含む複数の男君との関係においてその状況を強く想起させられていることがわかった。

次節では、本節で確認した浮舟の「隠し据ゑ」という状況が『更級日記』においてどのように記述されているかを確認する。

二 『更級日記』における「隠し据ゑ」への着眼

『更級日記』及び孝標女と、『源氏物語』の浮舟との関連を論じた先行研究及び注釈類¹⁰は多数存在し、議論の内容も様々である。日記中、孝標女は鄙びた東国から上洛したり、山里に滞在したりと、浮舟と重なるような行動をたびたび取っており、二者の間わりは『更級日記』の研究上、重要かつ広範囲に渡る問題である。その中でも、孝標女が浮舟の物語をいかに受容し、『更級日記』執筆に利用したかという問題を扱った論稿に藤田彰子氏、塩田公子氏、和田律子氏、有馬義貴氏等¹¹のものがあり注目される。本章も同様に『更級日記』執筆上の浮舟受容を考察するが、特に次節の『浜松中納言物語』に関連しうる「隠し据ゑ」の問題を中心に扱うこととする。

『更級日記』において物語の登場人物が確認できる引用の記事は、後述の短い二箇所を除けばつぎのD～Gの四つである。EとFからは「隠し据ゑ」が確認できる。

D 物語を読み、夕顔や浮舟の容姿に憧れる。

物語のことをのみにしめて、我はこのごろわろきぞかし。さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし。 (二九九頁)

E 浮舟のように山里に「隠し据ゑ」られたいと空想する。

いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに、山里に隠し据ゑられて、花紅葉、月、雪をながめて、いと心細げにて、めでたからむ御文などを、時々待ち見などこそせめ、とばかり思ひつづけ、あさましきことにもおぼえけり。 (三二四頁)

F 平凡な結婚後、浮舟とほど遠い我が身を嘆く。

親たちもいと心得ず、ほどもなくこめ据ゑつ。(中略)このあらましごとども、思ひしことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや。光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。薫大将の宇治に隠し据ゑ給ふべきもなき世なり。あなものをぐるほし。いかによしなかりける心なり、と思ひしみはてて、まめまめしく過ぐすとならば、さてもありはず。(三二八・三二九頁)

G 初瀬詣での途上、宇治の頼通別邸にて浮舟を思う。

むごにえ渡らで、つくづくと見るに、紫の物語に宇治の宮の娘どものことあるを、いかなる所なれば、そこにしも住ませたるならむとゆかしく思ひし所ぞかし。げにをかき所かなと思ひつつ、からうじて渡りて殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女君のかかる所にやありけむなどまづ思ひ出でらる。(三四三頁)

Dは物語に耽溺し浮舟達に憧れる場面、Eは浮舟のように「隠し据ゑ」られることを願望する場面、Fは結婚後、「隠し据ゑ」られるような境遇は実現不可能であると痛感する場面、Gは宇治を訪れた孝標女が、浮舟の居住した宇治別邸を想起する場面である。このうちEとFでは「隠し据ゑ」という鍵語が使用され、かつは破線部「あらましごと」と、すなわち起こりうる事態ないしは希望する事態とされている¹²⁾。

『更級日記』には「とほぎみ」(二九八頁)、「かばね尋ぬる宮」(三〇六頁)等、物語名が多数見える。しかし、物語の内容にまで踏み込んだ記述は、右の浮舟言及記事以外では「光源氏のあるやう」(二七九頁)、「在五中将の、いざこと問はむと詠みける渡りなり」(二八六頁)のごく短い二箇所のみである。これらを併せた六箇所中、DとGの主要四箇所がいずれも浮舟に言及する記事であることから、『更級日記』の物語引用における浮舟の特別な位置が看取されよう。Dの夕顔やGの八の宮の娘達などが並列的に引用されているものの、記事のほとんどは浮舟についてである。加えて夕顔等は人物のイメージの上で浮舟と連続性が認められるが、鍵語ないしはモチーフというレベルで「隠し据ゑ」を見出せるのは浮舟のみだろう。

DとGの四つのうち、EとGの三つが傍線部のように浮舟の境遇に注目した内容となっており、その中核には「隠し据ゑ」の鍵語及びモチーフが存在する。浮舟は男女の三角関係、入水、にわかな出家等と様々なイメージを持つ女君だが¹³⁾、孝標女はその中で「隠し据ゑ」のみを繰り返し直接的に引用している。また、Eの「山里」「隠し据ゑ」「心細げ」¹⁴⁾等は、前節で確認した浮舟の境遇の表現として正鵠を射ており、浮舟引用は一方で要領のよい紹介と説明にもなっているといえよう。

『更級日記』は物語耽溺から仏教帰依へと向かう女性を描いた作品と捉えられることが多いが¹⁵⁾、それに伴い浮舟の記事も将来の夢からその否定へと流れになっている。これらの記事は、孝標女の実人生における述懐と理解することもできる。

しかし本節で確認したように、孝標女は『源氏物語』に関して「隠し据ゑ」に焦点を絞り引用し、さらにその記事は浮舟と「隠し据ゑ」の紹介・説明にもなっていたとおぼしい。ここから、『更級日記』の浮舟記事が物語に関する受容や創作といった営為といかに結びつい

ていたかを考えたい。また、当時の読者達はこの浮舟記事をどのように読んだのだろうか。この点は次節と次々節を踏まえ、まとめて論じる。

次節では『更級日記』を念頭におきつつ『浜松中納言物語』の「隠し据ゑ」を検討する。

三 『浜松中納言物語』の「隠し据ゑ」られる女君達

『浜松中納言物語』には女君等の居住形態を指す語として「隠し据ゑ」六例が見られる。これは『更級日記』と『浜松中納言物語』の相関性を示す一要素と認められそうである。両作品の具体的な比較検討を通じて作品間における「隠し据ゑ」の様相を押さえ、孝標女の物語をめぐる受容と創作という問題を考えたい。

『浜松中納言物語』には「隠し据ゑ」に関わる大弐の娘、吉野の姫君と、「隠し据ゑ」に関わりうる唐后が登場する。しかし管見の限り、先行研究では大弐の娘について指摘がなされるのみである。以下、『浜松中納言物語』における「隠し据ゑ」、及び類似する文言等も含めた鍵語ないしはモチーフを、女君毎に確認する。

まず大弐の娘であるが、彼女は衛門の督の妻となるのに際し、旧知の中納言から「隠し据ゑ」を目論まれていたと語られる。

H 中納言、大弐の娘を「隠し据ゑ」ようとしていた。

ありつきなむのちにぞ、みづからばかりに、浅からぬ心のうち見せ知らせて、語らひ寄りつつ、忍びやかならむ山里に隠し据ゑたらむ、とおぼしつるに…… (二二六頁)

この「隠し据ゑ」は結局実現しないが、つぎのIとJでは「率て隠し」「隠し置き」という表現とともに、大弐の娘を盗み出し、我が物にしたがる中納言が繰り返し描かれている。

I 中納言、大弐の娘に盗み出しを迫る。

……まことに見捨てがたければ、「いざ、やがて率て隠してむ。いかにおぼすべき」とのたまへば、ほのかにうちうなづきて、今少しなびき寄りたる、いとらうたく心苦しけれど、我は今少し思ひまさられて…… (二四一頁)

J 中納言、大弐の娘の婚儀を見て、煩悶する。

われはさ(引用者注——盛大な婚儀)こそ、えかうてもてなさざらまし。思ひとどめていまいう思ふとも、かすかなる山里に隠し置きて、たまさかに忍びつつぞ通はまし。女のため、いかが心細からましとおぼしつづけて…… (二五二頁)

右の一連の三箇所では、HとJに「忍び」「山里」「心細からまし」という浮舟の境遇を示す語が用いられているほか、Iにおいて中納言は実際に大弐の娘のもとに忍び入り、連れ出しを迫っている。衛門の督との婚儀を前にした大弐の娘が「ほのかにうちうなづき」、密通している中納言に靡く様子も注目されよう。

先行研究では右のHとJに相当する箇所について、森岡常夫氏等が『更級日記』の「隠し据ゑ」との照応関係を指摘している¹⁶。「隠し据ゑ」をはじめとした鍵語の共通や別邸に秘匿されるという状況等から考えても、H・Jの「隠し据ゑ」等の表現もしくはモチーフは『源

氏物語』の影響下にあり、かつ前節で示した『更級日記』の浮舟言及記事とも関連していると考えられる。ここでは、さらにIについて注目したい。

Iの場面は従来軽視される傾向にあった。しかしIにおける盗み出しを迫る中納言の姿勢や、大弐の娘の浅薄な同意という描写により、「隠し据ゑ」が緊迫したものとして強調されていることは看過できない。結末としては中納言の躊躇により盗み出しは未遂に終わるが、「隠し据ゑ」は可能態として十分起こりえた物語展開だったといえる。HとJの中納言の心中思惟は反実仮想的であるが、このIの緊迫した場面との連続性を考えると、作品理解における大弐の娘の重要度が改めて認められよう。

そして、この強調された「隠し据ゑ」状況が未遂に終わることが、『更級日記』の浮舟言及記事と関わるのではないだろうか。『更級日記』では山里に「隠し据ゑ」られることが「あらましごと」として願望されるも、実現不可能という結末だった。その際「ほどもなくこめ据ゑ」(三二八頁)られた平凡な結婚を嘆いているが、これは『浜松中納言物語』の大弐の娘の場合と重なる。

大弐の娘は「隠し据ゑ」が強調されながら尋常の婚姻に落ち着く女君であり、鈴木紀子氏は、受領階級という大弐の娘と孝標女の共通性に着目し、「受領階級の女が抱いた夢」とする(17)。鈴木氏の論稿はIの展開を十分に捉えていない点に問題があり、また『更級日記』中の叙述をそのまま実在の孝標女の夢と捉えている点にも疑問は残るが、先駆的な指摘であろう。この「隠し据ゑ」が実現するか否かという問題は、『浜松中納言物語』と『更級日記』の相似性を示している。

つぎに吉野の姫君であるが、彼女は大弐の娘とは反対に、実際に「隠し据ゑ」状況が実現する女君である。吉野の姫君は浮舟とよく似通った人物であり、物語後半で中納言と式部卿宮という二人の男君に順に「隠し据ゑ」られることになる。吉野の姫君も大弐の娘同様「隠し据ゑ」という鍵語が用いられるが、こちらについては管見の限り未だ指摘がない。

K中納言、吉野の姫君の隠し処を乳母子の里と定める。

……形見の若君隠し据ゑ給へる中將の乳母子の御里、いと広く清げなる家なれば、そこを忍びてさるべきやうにつくろひて、御調度などせさせ給ひて…… (三二五頁)

L中納言、式部卿宮に知られぬよう苦慮する。

……浅からず忍びて隠し据ゑたる人ありと聞き給ひては、かならずゆかしう心にくしとおぼいて…… (三五五頁)

M式部卿宮、吉野の姫君を知り好色心を抱く。

……迎へ出で給ひて、隠し据ゑてかぎりなきさまになむ思ひとどめ給へるなど、さだかなるたよりに聞きつけ給へる御心地、いとめづらしう…… (三七〇頁)

N式部卿宮、吉野の姫君を盗み、梅壺に「隠し据ゑ」る。

……内裏におはしまして、御宿直所の梅壺に隠し据ゑさせ給ひて…… (四〇一頁)

O中納言、吉野の姫君を「隠し据ゑ」ていた頃を回想する。

つれづれと隠し据ゑ聞こえ給へりしほどは、心のひまなくおぼされしを…… (四四五頁)

Kは若君を「隠し据ゑ」ている乳母子邸を吉野の姫君の隠し処にしよとす場面であり、「隠し据ゑ」の文法上の目的語は若君であるが、吉野の姫君の「隠し据ゑ」表現に準ずるものとしてカウントした。他の用例は全て吉野の姫君についてである。

吉野の姫君の用例については、「隠し据ゑ」という鍵語が繰り返し用いられている点が第一に注目される。『源氏物語』の浮舟の三例、『更級日記』の記事の二例、『浜松中納言物語』の大式の娘の一例に対し、吉野の姫君は四例、Kも含めれば五例である。

注目すべき点として第二に、吉野の姫君については「隠し据ゑ」が実現するということが挙げられる。孝標女の時代の物語作品には、浮舟の影響下にある女君達が多数登場するが、意外なことに男君の別邸に秘匿されるという物語展開、すなわち「隠し据ゑ」は、吉野の姫君以外に確認できない¹⁸。先に確認した通り、男君の別邸に秘匿されるというのは浮舟物語の新奇性とおぼしく、「隠し据ゑ」をめぐって浮舟と吉野の姫君の照応関係が読み取れる。浮舟に対して複数の男性を主語とする「隠し据ゑ」が用いられていたように、吉野の姫君にもL・M・Oで中納言、Nで式部卿宮を主語とする「隠し据ゑ」が用いられるという点も指摘できる。

ちなみに吉野の姫君はK以前にも、吉野の山里で社会から隔絶され、後見を失いながら中納言の庇護により居住していた(三〇九〜三二八頁)。ここでは「隠し据ゑ」という鍵語こそないが、姫君はその要件に合致した状況で山里に居住していたともいえよう。

最後に唐后に触れたい。唐后は「隠し据ゑ」という鍵語も用いられず、秘匿もされない女君であるが、その居住形態や中納言との関わりから、「隠し据ゑ」られる浮舟の影響が認められるのではないかと考えられる。つぎのような場面が注目される。

P 唐后、河陽県に住まわされ、帝を通わす。

……大きな内裏にこそ置かせざらめとて、ほど近き河陽県のかぎりなくおもしろき
に、三つ葉四つ葉の殿造りして据ゑたてまつり給ひて、(中略)忍びておぼしめしあまる
折々、行幸して逢ひ見給ふやうなれど、(中略)月をも花をも見つつ過ぐし給ふは、心や
すくおぼさるる、かつは世づかぬ御心とおぼし知らる。(四五〜四八頁)

Q 中納言、密通相手を唐后と知らず、盗もつとす。

「……たれと聞こゆる人ぞ。(中略)忍びて侍る所へ迎えたてまつりてむ」(七〇頁)
Pは後宮の軋轢を避けるため、帝が唐后を郊外の河陽県に住まわせ、時々行幸しているとい
う説明、Qは誰と知らず唐后と密通した中納言が、唐后を盗んで隠し処に住まわせようとす
る場面である。唐后は社会から秘匿される存在ではないが、Pの「月をも花をも」愛でること
とができる自然豊かな郊外の別邸に住まわされ、「世づかぬ御心」と境遇を憂う状況にある。
これは浮舟の、山里の別邸に居住し男君を待つ心細い心境と重なるだろう。またQでは中納
言が「忍びて侍る所」、すなわち隠し処のような別邸に唐后を盗もうとしており、この点も
「隠し据ゑ」と符合している。

特にPの唐后の状況、すなわち寵を受ける后でありながら郊外の別邸に住まわされ、不安
定な境遇をかこつという特殊な設定は、浮舟の「隠し据ゑ」のモチーフから影響を受けたも

のと考えられないだろうか。唐后が他の二人とは位相を違えながらも「隠し据ゑ」の影響下にあるとすれば、『浜松中納言物語』は三人もの女君に関して「隠し据ゑ」のモチーフを用いていることになる。

以上、『浜松中納言物語』の三人の女君と「隠し据ゑ」について検討した。唐后は特殊な設定であったが、大弐の娘と吉野の姫君については「隠し据ゑ」の鍵語もしくはモチーフが明らかに利用されていることが確認できた。この二人の女君は、物語中の重要度では差があるが、「隠し据ゑ」のモチーフの担い手としては拮抗している。そしてその内実は対照的であり、大弐の娘が「隠し据ゑ」られずに終わる女君であるのに対し、吉野の姫君は「隠し据ゑ」られる女君である。この対比的な図式は、先に見た『更級日記』における願望と実現不可能という二段階の叙述と重なり合うだろう。「隠し据ゑ」の成否をめぐる二作品間の相似性がひとまず確認できる。

孝標女の物語創作において、彼女の「隠し据ゑ」への願望を認めようとする先行研究は複数存在する⁽¹⁹⁾。しかし、孝標女がいかに物語を受容しつつ創作を行ったかということを考えるとき、当人の願望や嗜好だけでなく、物語本文あるいは日記本文から析出される問題自体も同様に、その特徴を論じるための確かな手掛かりとなるのではないか。『更級日記』と『浜松中納言物語』に見られる「隠し据ゑ」の様相からは、孝標女という作者の特質がうかがえるだろう。

両作品の「隠し据ゑ」は、『源氏物語』の「隠し据ゑ」がそのまま引用されるのではなく、願望と実現不可能、あるいは未遂と実現という、成否をめぐる対比的な図式に従って描かれる。このような構造化された「隠し据ゑ」に関してはこちらはまとめて触れたい。

次節はまとめの前段階として、同時代の他作品における「隠し据ゑ」の様相を概観する。

四 同時代の他作品と「隠し据ゑ」のモチーフ

同時代の他作品には、女君を別邸に住まわせるという意味で「隠し据ゑ」という語が使われる例は確認できず⁽²⁰⁾、「隠し据ゑ」という状況に置かれる女君も確認できない。ただ一方で、他作品からは「隠し据ゑ」に通じる構想や表現をいくつか確認しうるため、ここで触れる。本節では散逸物語も含め、他作品の関連箇所を概観する。この調査は、広い視野をもって「隠し据ゑ」を考える手立てとなるだけでなく、『更級日記』と『浜松中納言物語』の突出した「隠し据ゑ」表現を再確認させるものともなるだろう。

まず現存作品の『狭衣物語』であるが、飛鳥井の君と源氏の宮に関連する表現がある。飛鳥井の君は乳母の家に居住していた折、狭衣に「隠ろへぬべき所あらばあるさまにしたがひて」(①一一四頁)と隠し処に移住させられることを構想され、「音無しの里尋ね出でたらば、いざ給へよ」(①一一五頁)とそれを仮定の話として打診されている。源氏の宮は齋院に卜定した折、狭衣に「さすがに我がものとひき忍び取り隠し聞こえさせて、ひたすら深き山里なごにもさすらへ聞こえんも、あるかひなかるべし」(①二七五頁)と、山里への盗み出しを空

想されている。いずれも具体的な盗み出しが匂わされることのない、ささやかな狭衣の言動にすぎないが、男君によって別邸に密かに住まわされるといふ設定は「隠し据ゑ」に通じるものと考えられる。

つぎに孝標女作とも伝わる『夜の寢覚』であるが、寢覚の上に関連する表現がある。寢覚の上は巻一から中間欠巻部分の長期間において、男主人公に盗み出しを迫られるが、その計画は「隠し据ゑ」に通じる。男主人公は物語冒頭の随所で、「取り隠し」(九一頁)、「率て隠し」(一一一頁)等と寢覚の上を盗み出したがる。中でも「かのこと、今日明日のほどにも。世の憂きめ見えぬ山路をなむ尋ね出でたる」(一九五・一九六頁)という盗み出しを迫る手紙と、「九条の尼君の家」(二〇二頁)を隠し処にしようとする場面は、寢覚の上が山里めいた郊外に住まわされる「隠し据ゑ」の展開を予期させる。この盗み出し計画は、『無名草子』の「大臣に入道の許し取らせ給ひしほど、大将の千々の言葉を尽くして、率て隠してむと苛れ揉まれ給ひしに」(二三〇頁)という説明から、中間欠巻部分まで及んだことがわかる。この男主人公の一貫した行動は、物語の構成を考える上で無視できないものだろう(21)。

つづいて散逸物語であるが、孝標女作とも伝わる『朝倉』と『みづからくゆる』が特に注目される。『風葉和歌集』等からの復元研究により、『朝倉』では白河に女君が一時「隠し据ゑ」られるような、『みづからくゆる』では大内山に女君が一時「隠し据ゑ」られるような展開があったかと推測されている²²。いずれも現存資料に「隠し据ゑ」の語が確認できず、筋立の復元についても慎重な姿勢をとらなければならないが、留意すべき二作品であろう(23)。

以上、同時代の他作品を概観した。それらからは「隠し据ゑ」を想起させるような構想は部分的に見られるようであるが、「隠し据ゑ」という鍵語そのものと「隠し据ゑ」という状況は確認できなかった。当時、浮舟に端を発する「隠し据ゑ」というモチーフへの意識は、孝標女以外にも多少は存在していた可能性がある。しかし、『更級日記』『浜松中納言物語』の両作品では「隠し据ゑ」の鍵語及び境遇が群を抜いて頻出しており、やはりその特異性は揺るがないだろう。孝標女は突出して「隠し据ゑ」を受容し、創作を行っていたといえるのではないか。

次節では、再び『更級日記』『浜松中納言物語』を考え併せ、本章のまとめとしたい。

五 『更級日記』『浜松中納言物語』の相関性——まとめ——

本章では時代状況にも目を配りつつ、『更級日記』と『浜松中納言物語』が突出して『源氏物語』の「隠し据ゑ」を受容していることを確認した。この両作品は「隠し据ゑ」という鍵語を繰り返し用いつつ、そのモチーフを強く打ち出していた。孝標女が自作の日記と物語両方において「隠し据ゑ」をめぐる叙述を繰り返すことに、どのような意味を見出すべきだろうか。

二節と三節で詳しく見た通り、日記にせよ物語にせよ、孝標女は「隠し据ゑ」に対し願望と実現不可能、未遂と実現というように、相反する要素を結び付けていた。成否をめぐる二項対立として考えたとき、『更級日記』では「隠し据ゑ」が願望されながらのちに実現可能なものとされており、『浜松中納言物語』では「隠し据ゑ」が吉野の姫君で実現し、大式の娘で未遂に終わっている。孝標女は両作品において、「隠し据ゑ」を魅力あるものに描きつつも、あくまでその境遇を相対化しながら打ち出していた。

両作品における「隠し据ゑ」は、鍵語の共通以上の相関性を有する。具体的には、『更級日記』の浮舟記事から『浜松中納言物語』の大式の娘・吉野の姫君を捉えれば、『浜松中納言物語』は日記中の着眼を踏まえた自作物語による創作実践とも見なせるし、逆に『浜松中納言物語』の大式の娘・吉野の姫君の側から『更級日記』の浮舟記事を捉えれば、『更級日記』は日記による自作物語への評言めいたコメントとも見なせるだろう。

『浜松中納言物語』は孝標女晩年の作とも考えられており、『更級日記』とはさほど間を置かず成立した可能性が高い⁽²⁴⁾。右のような双方向的な認識は、孝標女の周辺にいた当時の読者達にも難なく共有されていた可能性がある。孝標女は祐子内親王家の女房であり、彼女がとりわけ物語に精通した物語作者及び日記作者であったことは、同僚等のよく知るところだったろう⁽²⁵⁾。密接に結び付いた両作品における「隠し据ゑ」という鍵語ないしモチーフは、引用元の『源氏物語』だけでなく互いを想起させ合うものだったと考えられる⁽²⁶⁾。

また孝標女が両作品を用いて重層的に『源氏物語』の「隠し据ゑ」を引用しているという点も、当時の文芸圏においては看過できない問題である。孝標女の時代において散文を創作するという行為は、多かれ少なかれ圧倒的な『源氏物語』という先行作品を意識せざるをえないものだったろう。例えば、伊藤守幸氏は『更級日記』中の読書する孝標女に着目し、孝標女が末摘花を「相似的二重構造」をもって引用し、紫式部の『紫式部日記』の手法を学びつつ「自嘲的」に「自画像を描いている」と論じ、井上眞弓氏や鈴木泰恵氏は『狭衣物語』における引用元の作品との差異を「批評」と論じる⁽²⁷⁾。

引用という行為、とりわけ孝標女の時代における『源氏物語』引用とは、そのほとんどが引用者の『源氏物語』に対する意識を大きく反映したものであったのではないだろうか。このような『源氏物語』引用の観点から捉え直せば、『更級日記』『浜松中納言物語』による構造化された「隠し据ゑ」のアピールは、孝標女が長大な『源氏物語』の中で、とりわけどのような表現やモチーフに物語的な価値を見出し、どのような手法を用いて引用したかという創作姿勢の明確な表れだろう。この点なども、当時の読者達から関心を寄せられるところであったと考えられる。

以上、孝標女の両作品が「隠し据ゑ」をめぐる互いを想起させあうものであったことと、それが『源氏物語』に対する孝標女の創作姿勢の反映であったことを、当時の読者という観点と併せて論じた。孝標女の時代において両作品が相関的に読まれるという状況は、作品を理解する上で看過できない。『紫式部日記』と『源氏物語』ほどでないにせよ、『更級日記』と『浜松中納言物語』はジャンルを超えて密接な関係にあったと考えられる。

※凡例に挙げた作品以外の引用本文もすべて「新編日本古典文学全集」に拠った。

注

- (1) 藤岡作太郎『国文学全史平安朝編』（東京開成館、一九〇五年）の五四九・五五〇頁。
- (2) 池田利夫「浜松中納言・夜半の寢覚は孝標女の作か否かの論争」『国文学解釈と鑑賞』第二七巻第七号、一九六二年六月）。
- (3) 須田哲夫『更級日記』作者像の輪郭——『更級日記』『浜松中納言物語』をめぐって——『日本文学研究』第三八号、大東文化大学日本文学会、一九九九年二月）、樋口芳麻呂「菅原孝標女の和歌——その類似表現——」（和田律子・久下裕利編『更級日記の新研究——孝標女の世界を考える』新典社、二〇〇四年）、和田律子「孝標女の「石山」——「影をならべ」を中心に——」（横井孝・久下裕利編『平安後期物語の新研究——寢覚と浜松を考える』新典社、二〇〇九年）、福家俊幸「孝標女の文学と規範としての紫式部——頼通時代の物語作者——」（和田律子・久下裕利編『平安後期頼通文化世界を考える——成熟の行方』武蔵野書院、二〇一六年）。
- (4) 加藤昌嘉「星と浮舟」『揺れ動く『源氏物語』』勉誠出版、二〇一一年）、久下裕利『『泉守物語』は孝標女の作か』『王朝物語文学の研究』武蔵野書院、二〇一二年）。
- (5) 宇治の邸宅は八の宮の伝領であるが、没後は薫が管理に大きく関わる形になる。
- (6) 石井正己「隠し据えられた女、浮舟」『学芸国語国文学』第三二号、二〇〇〇年三月）、井野葉子「隠す／隠れる」浮舟物語』『源氏物語宇治の言の葉』森話社、二〇一一年）。なお、井野氏は『源氏物語』と『更級日記』の「隠し据ゑ」の共通性も指摘している。
- (7) 前掲の注(6)井野論文にも用例の紹介がある。
- (8) 『宇治拾遺物語』のみ例外的に女性を秘匿する意味で「郡司が家に、京のめなどいふものの、かたちよく、髪長きが候ふを隠し据ゑて……」（巻第七の二、播磨守為家の侍佐多の事、二二八頁）と用いられる。浮舟等から影響を受けたかとも考えられる。
- (9) ちなみに他作品の類例として、『浜松中納言物語』に「隠し置き」一例（二五二頁）がある。『夜の寢覚』には盗み出しの意となる「取り隠し」（九二頁）「率て隠し」（一一一頁）等がある。
- (10) 例えば志津田兼三「更級日記考——なぜに夕顔・浮舟か、そのよしなき物語・歌のを中心にして——」（『国語と国文学』第五八巻一〇号、一九八一年一〇月）、大倉比呂志『源氏』受容のありよう——〈浮舟〉志向の原形質——（『平安時代日記文学の特質と表現』新典社、二〇〇三年）等。
- (11) 藤田彰子「更級日記における浮舟——形象の方法とその意味——」（『中古文学論攷』第七号、一九八六年一〇月）、塩田公子「浮舟」とは違う女の一生——『更級日記』を物語として読む——（『古代文学研究第二次』第五号、一九九六年一〇月）、和田律子『更級日記』の冒頭部——執筆の意図——（『藤原頼通の文化世界と更級日記』新典社、二〇〇八年）、有馬義貴『更級日記』における『源氏物語』の浮舟——孝標女らしき人とのずれをめぐって——（『奈良教育大学国文——研究と教育——』第三八号、二〇一五年三月）。
- (12) 「あらまし」と「の語義については桜井宏徳『更級日記』における「あらまし」と——物語との関わりをめぐって」（『日記文学研究誌』第一八号、二〇一六年六月）に詳しい検討がある。

- (13) 神田龍身「分身、差異への欲望——『源氏物語』「宇治十帖」——」『物語文学、その解体——『源氏物語』「宇治十帖」以降——』有精堂出版、一九九二年)、鈴木日出男「浮舟の入手——薫と浮舟(一)」「『源氏物語虚構論』東京大学出版会、二〇〇三年)、鈴木日出男「浮舟の出家生活——薫と浮舟(二)」「(同前)、坂本共展「浮舟の出家」『源氏物語の展望』第二輯、三弥井書店、二〇〇七年一〇月)等。
- (14) この時代は、「心細し」が美的情趣を含む語になっている。横尾三雄「ころぼそしの文学「狭衣物語」——背景としての自然描写——」『平安朝文学研究』第二卷第六号、一九六八年十二月)、西村加代子「悲哀美としての〈心細し〉——平安朝後期の和歌を中心に——」『国文学研究ノート』創刊号、一九七二年一二月)等。
- (15) 家永三郎「更級日記を通して見たる古代末期の廻心」『上代仏教思想史研究』畝傍書房、一九四二年)等。
- (16) 森岡常夫『平安朝物語の研究(増補版)』(風間書房、一九八一年)。なお管見では、寺本直彦「更級日記「宇治の渡り」の段試解」『源氏物語論考 古注釈・受容』風間書房、一九八九年)、鈴木紀子『浜松中納言物語』における大式とその娘』『国文橋』第一七号、一九九〇年三月)、久下裕利『浜松中納言物語』の世界』(『王朝物語文学の研究』武蔵野書院、二〇一二年)も同様の箇所を指摘する。
- (17) 前掲の注(16)鈴木論文。
- (18) ちなみに『狭衣物語』の宰相の妹(藤壺女御)は自邸へと盗み出されるが、隠し処が自邸である点、秘匿が程なく終わり世間に認知される点等から、「隠し据ゑ」とは一線を画すると考えられる。
- (19) 松尾聰『平安時代物語の研究』(武蔵野書院、一九五五年、改訂増補版一九六三年)、樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』(ひたく書房、一九八二年)、久下裕利「挑発する『寝覚』『菓守』の古筆資料——絡み合う物語——」(横井孝・久下裕利編『王朝文学の古筆切を考える——残欠の映発』武蔵野書院、二〇一四年)等。
- (20) ちなみに『夜の寝覚』には「程なき所に隠し据ゑられて」(二三九頁)と、男が狭い空間に隠される用例がある。
- (21) 『夜の寝覚』と『浜松中納言物語』はともに孝標女作と伝わるが、「隠し据ゑ」の問題において両作品は共通性よりも差異の方が目立つようである。「隠し据ゑ」の様相は、男君の造型や物語の中心人物が男か女かといった要素等と密接に関わるとおぼしく、二作品間の隔絶はそれらの差異によるところが大きいと考えられる。同一作者説の是非も視野に入れ、今後他の議論とも考え併せたい。
- (22) 前掲の注(19)松尾著書、小木喬『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』(笠間書院、一九七三年)、前掲の注(19)樋口著書、神野藤昭夫『散逸した物語世界と物語史』(若草書房、一九九八年)等が挙げられる。なお、『袖濡らす』の北山に住む女君に通う男君や、『あらば逢ふよのと嘆く民部卿』の女君を軟禁する内大臣等、他にも「隠し据ゑ」のモチーフと接点がありそうな散逸物語も存在する。
- (23) ちなみに前掲の注(19)久下論文では孝標女作者説に基づき、『更級日記』仮名奥書に見える四物語と『菓守』に「拉致、略奪のモチーフ」が共通すると論じられており、示唆に富む。

- (24) 卷五の周防内侍歌の引用が根拠とされる。池田利夫校注・訳『浜松中納言物語』（新編日本古典文学全集二七、小学館、二〇〇一年）の「解説」等に詳しい。
- (25) 物語作者という立場から日記が書かれたとする先行研究に、三角洋一「文学史上の「更級日記」の位置」（『古文研究シリーズ一五 更級日記』国語展望別冊N。四四、一九八五年五月）、妹尾好信「『蜻蛉日記』と『更級日記』の執筆契機考」（『王朝和歌・日記文学試論』新典社、二〇〇三年）があり、参考になる。
- (26) 本章は、孝標女作である蓋然性の高い『更級日記』と『浜松中納言物語』を対象を絞って議論を進めたが、他の伝孝標女作の物語と「隠し据ゑ」との関わりにも引き続き留意したい。
- (27) 伊藤守幸「物語を読む女たち」（『更級日記研究』新典社、一九九五年）、井上眞弓「夢のわたりの浮橋」論（『狭衣物語の語りと引用』笠間書院、二〇〇五年）、鈴木泰恵「序 命名『狭衣物語』批評」への思ひ」（『狭衣物語』批評』翰林書房、二〇〇七年）。

第二章 長谷寺記事と菅原道真

『更級日記』の作者とされる菅原孝標女は、菅原道真直系の子孫である。そのため、日記には道真への直接的な言及は存在しないものの、孝標女が父祖道真をどのように意識していたのか、日記中から道真に関する記述を見出しうるかといった問題は、先行研究でもしばしば論じられてきた。

例えば、上洛の記の竹芝伝説と道真の関わりを論じた後藤祥子氏、継母上総大輔の詠歌と飛梅伝説の関わりを論じた田中喜美春氏、日記中の漢詩的表現と道真の関わりを論じた張陵氏、東国の笠森寺等と道真の子孫の関わりを論じた元吉進氏等が挙げられる⁽¹⁾。父である孝標と道真の関わりを論じた池田利夫氏、松本寧至氏等も関連として挙げられよう⁽²⁾。本章はこれらの研究と軌を一にし、日記中の長谷寺記事と道真との関わりを論じる。後世の偽書等まで視野に入れつつ、新たな指摘を試みたい。

以下、『更級日記』の長谷寺記事の特徴を押さえた後、道真の作と偽られた『長谷寺縁起文』等を考え併せる。その上で各寺社に共通する十一面観音の存在を補足し、まとめとして当時の天神信仰と孝標女の問題を考察する。

一 『更級日記』の長谷寺記事

『更級日記』の中で長谷寺が登場する場面は三箇所あり、寺社としては、その登場回数、分量において日記中トップである⁽³⁾。日記では長谷寺は「初瀬」と呼ばれている。

A 母、一尺の鏡を鑄させて、え率て参らぬかはりにとて、僧を出だし立てて初瀬に詣でさすめり。(中略)この僧帰りて、「夢をだに見で、まかでなむが、本意なきこと。(中略)(女)『この鏡を、こなたにうつれる影を見よ。これ見ればあはれに悲しきぞ』とて、さめざめと泣きたまふを見れば、臥しまろび泣き嘆きたる影うつれり。(中略)と語るなり。
(三二〇頁～三二二頁)

B そのかへる年の十月二十五日、大賞会の御禊とのしるに、初瀬の精進はじめて、その日京を出づるに、(中略)(女)「そこは内裏にこそあらむとすれ。博士の命婦をこそよくかたらはめ」とのたまふと思ひて、うれしく頼もしくて、いよいよ念じたてまつりて、初瀬川などうち過ぎて、その夜御寺に詣で着きぬ。祓などして上る。三日さぶらひて、曉まかでむとてうちねぶりたる夜さり御堂の方より「すは、稻荷より賜はるしるしの杉よ」とて、物を投げ出づるやうにするに、うちおどろきたれば夢なりけり。
(三四一頁～三四五頁)

C また初瀬に詣づれば、はじめにこよなくもの頼もし。ところどころにまうけなどして行きもやらず。山城の国柞の森などに紅葉いとをかしきほどなり。初瀬川わたるに、

初瀬川たちかへりつつたづぬれば杉のしるしもこのたびや見む

と思ふもいと頼もし。

(三四八頁)

Aは少女時代の記事である。母は、孝標女の将来を占わせるため、僧を初瀬の長谷寺に遣わした。これは、長谷寺、石山寺、鞍馬寺参詣を道中危険だと断念し、かろうじて清水寺に参詣した後のことである。この記事からは、他の寺社に比べ、長谷寺が孝標女の将来と関連付けられていた形跡が読み取れる。ちなみに僧は夢告で、高貴な女性から鏡の中の悲しげな情景と嬉しいげな情景を見せられるが、これは日記末尾で不幸な老残の身を嘆く述懐(三五六頁)の伏線となっている。

つぎのBは壮年期の記事である。後冷泉天皇の即位に伴う大嘗会の当日、孝標女は長谷寺参詣に出発した。一世の見物である大嘗会をよそに出立する孝標女は、周囲から奇異の目で見られたようである。この参詣は旅程が非常に詳細に記され分量が多い。内容としては、天照信仰(内裏や稻荷信仰と関わる書き振りで、孝標女の出世栄達を示唆する夢告を含む。Bに関する先行研究には、孝標女の政治的意図を読み取る福家俊幸氏、久下裕利氏のもの(4)や、長谷寺の観音信仰と内裏の天照信仰の連続性を推測する松本寧至氏、小内一明氏のもの(5)等がある。いずれも卓見であるが、稿者はこの記事がAと同じく孝標女の今後を示唆している点、特に注目したい。

最後のCはBのすぐ後の記事である。初瀬を再訪した孝標女が、Bと同じく御利益を頼もしく思う場面である。

右のAとCからは、孝標女の未来が長谷寺の靈験により暗示されていることがわかる。類例は他の寺社参詣にもあるが、清水寺の「行くさきのあはれならむも知らず、さもよしなし事をのみ」(三二〇頁)という夢告や、石山寺の「中堂より麝香賜はりぬ。とくかしこへつげよ」(三四〇頁)という夢告のように、いずれも長谷寺と比較して茫洋としている。広隆寺や鞍馬寺参詣が夢告を伴わないということを考え併せても、長谷寺が他の多くの寺社に抜きん出て孝標女の人生と結び付いていることがわからう。

長谷寺の靈験は天照信仰や稻荷信仰が混在しており、単一なものとしては描かれていない。そのため、道真や天神への意識を検討する余地もあると考えられる。次節では『長谷寺縁起文』等の、後世のいわゆる偽書を見ていく。

二 長谷寺の縁起類と菅原道真

後世の長谷寺関連資料には、道真を作者と偽るものがある。まずはその中でも成立が早いとされる『長谷寺縁起文』の冒頭を引用する。

吾遣唐大使中納言從三位兼行左大弁春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣道真。添加^二寺官^一附^二大安寺^一。因依^二小僧之請^一攀^二入長谷靈寺^一。爰則^下面^上為^二勝絶^一之靈場^上。……

右は「吾……菅原朝臣道真」と、執筆者が道真であるように始まる。そして道真が長谷寺に入り、蔵王権現の靈夢を見る話に続き、長谷寺にまつわる様々な挿話が語られていく。

『長谷寺縁起文』の末尾には「寛平八年二月十日 都維那僧行空」とあり、「執筆」の項に再び「遣唐大使中納言從三位兼行左大弁春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣道真」と道真の名が記されている。

この寛平八年二月十日という日付は偽りであり、後世の成立とされている。近年の研究では、藤巻和宏氏はこの縁起文の成立を南都復興等を論拠として一三世紀後半とし、上島亨氏は興福寺所伝等を論拠として一二世紀初頭としている⁶。諸氏の推定に幅はあるが、仮に一二世紀初頭の成立であれば孝標女の時代から約五〇年下った程度であり、あながちに無関係と断ずるべきでないとも考えられる。

つぎに、『長谷寺縁起文』より成立時期は下ると考えられているが、近い位置にある『長谷寺密奏記』がある。これはいわゆる神道的な記述が目立つが、『長谷寺縁起文』と相互補完的な内容になっている⁷。こちらも末尾に「寛平八年二月十日」の日付と、「執筆」として「遣唐大使中納言從三位兼行左大弁春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣」の署名が記載されており、その後後人の書き足しという体裁で「菅右丞相入此山而曰……」と、道真が長谷寺に大鳥居を立てた説話が付載される。『長谷寺縁起文』について注目されよう。

ちなみに、この両書を踏まえて後に成立した『長谷寺験記』(または『長谷寺靈験記』)もある。『長谷寺験記』は大部であるが、道真や天神の説話を多数収録しており、後世における長谷寺と道真・天神の結び付きをよく示す資料である。

また、関連として長谷寺の隣地の興喜天満神社が挙げられる。管見の限りでは孝標女の時代以前にさかのぼる史料は確認できなかったが、興喜天満神社は『日本書紀』に登場する菅原氏の祖・野見宿禰のゆかりの地であるとして、その起源の古さを主張している⁸。

以上、長谷寺と道真の結び付きが確認できる諸資料を通覧した。孝標女の時代までさかのぼる資料として確たるものは挙げられなかったが、『更級日記』の長谷寺記事の背景に道真が存在する可能性は一考すべきであろう。

寺社縁起の作者として著名な文人貴族が擬されるケースは珍しくないが⁹、長谷寺の縁起類に道真が選ばれたことにはしかるべき経緯があるのだろう。『長谷寺縁起文』が成立する以前から、すなわち孝標女の時代以前から、長谷寺と道真、ないしは天神をゆるやかに結び付ける意識のようなものが存在したのではないか。前節で述べたように、『更級日記』の長谷寺記事は天照信仰や稲荷信仰と結び付いていた。孝標女に関しては、特に長谷寺の信仰における多重性を想定したくなる¹⁰。

次節では、その道真と長谷寺を結び付ける具体的な要素として、十一面観音を考える。

三 十一面観音、あるいは観音信仰をめぐる

長谷寺は『三宝絵』の「長谷菩薩戒」によれば、古くから霊木を用いた十一面観音像を本尊としていたようである。

コ、ニ沙弥徳道トイフ者アリ。此事ヲキ、テ思ハク、「此木カナラズシルシアラム。十一面観音ニツクリタテマツラム」ト思テ、養老四年ニ、今ノ長谷寺ノミネニウツシツ。徳道力無シテ、トクツクリガタシ。(中略) 神龜四年ニツクリ終ヘタテマツレリ。(中略) 徳道、々明等ガ天平五年ニシルセル、観音ノ縁起并ニ雜記等ニ見ヘタリ。

『三宝絵』が引用する「天平五年ニシルセル、観音ノ縁起并ニ雜記」は現在散逸しているが、源為憲が依拠したこの記録の信憑性は高いだろう。この長谷寺の本尊が十一面観音であるということが、道真と結び付きうるのである。

ここで大宰府安楽寺について確認したい。安楽寺は現在の太宰府天満宮にあたり、道真が没した地において早くから道真、すなわち天神の祭祀場であった。『菅家御伝記』(嘉承元年(一一〇六)成立)には、安楽寺の十一面観音に関する記載がある。

安楽寺学頭安修奏状云、大宰府安楽寺者、贈大相国菅原道真公喪葬之地、十一面観世音大菩薩靈応之處也、延喜五年八月十九日味酒安行依ニ神託ニ立ニ神殿ニ、稱曰ニ天満大自在天神ニ、……

『菅家御伝記』が引用する「安楽寺学頭安修奏状」は現在散逸しているが、これには安楽寺が十一面観音靈応の処だとある。「安楽寺学頭安修奏状」がいつ頃書かれたものか、すなわち「安修」がいつ頃の人物かは不明である。しかし『菅家御伝記』が引用元を必ず示す編纂方針を採っていることや、この他の引用資料が歴史資料として信頼に足るものであることから、この奏状の述べる内容は、後代の創作ではなく信憑性のあるものと考えられる。『菅家御伝記』自体は孝標女の時代以後の成立であるが、安楽寺が十一面観音靈応の処であるという伝承は、おそらく孝標女の時代以前から伝わっていただろう。

さらに安楽寺は、孝標女にとって馴染みの深い神社であった。孝標女の同母兄弟である基円が安楽寺の別当になっていたことが、『尊卑分脈』や『安楽寺別当次第』からわかる。後者の注には「資忠孫贈二品御弟、孝標子也、于時依レ無ニ長者子孫一用レ之」とあり、それまで傍流の氏長者の子孫が別当を務めていたが、その家系に子がいないため、孝標男の定義に氏長者が移り、弟の基円が安楽寺別当になったという経緯が説明されている。

また、同時代の人々にとっても安楽寺は有名であった。宣旨の作と伝わる『狭衣物語』巻二には「うち続き親たち隠れはべりて後は、安楽寺といふ所になんはべりし」(①三〇二頁)とあり、飛鳥井の君の兄僧が身を寄せていた場所として安楽寺が設定されている。

他に、『経信集』一〇番詞書の「往年参安楽寺聖廟……愁詠蕪詞奉呈別阿闍梨に」や、『為仲集』(尊経閣文庫本)八番詞書の「安楽寺にまゐりて、かまどの山のけぶりをみて」のように、大宰府を訪れた男性歌人が安楽寺に参詣している例もある¹¹⁾。半世代ほど時代が下るが、大江匡房などは大宰帥にあつて安楽寺に関する多数の漢詩、和歌を残している¹²⁾。

このように、安楽寺は孝標女と密接に関わり、かつ同時代の人々にも親しまれていた。安楽寺は西国の受領達を通じて、京でも意外と人口に膾炙していたようである。当然、孝標女は安楽寺と十一面観音の結び付きを認知し、意識していたと考えられる。藤巻和宏氏は後世

の大安寺と長谷寺の縁起をめぐり、十一面観音の共通性に着目しているが¹³、孝標女とその時代にあつては、安楽寺と長谷寺間において着目されるべきかと考えられる。

本章一節で見たように、『更級日記』で長谷寺が抜きん出た扱いを受けていることから、十一面観音の照応を通じた父祖道真ないしは天神の介在が、可能性として想定されよう。

以上の考察に併せて、念のため道真と観音信仰についても触れておきたい。道真の著作からは観音を厚く信仰していた事例が複数確認できる。漢詩では例えば、『菅家文草』一一七番の夭折した我が子の極楽往生を願う「南無観自在菩薩。擁護吾兒坐大蓮」、『菅家後集』四七八番の左遷の折に離京を憂う「都府棲纒看瓦色。観音寺只聴鐘聲」、同集五一三番の死期を悟り観音を念じる「此賊逃無處。観音念一廻」等がある。願文では『菅家文草』六五〇番の吉祥院法華会願文において、幼少期に観音力によって病が平癒したという「発下奉_レ造_二観音像_一之願上。念_二彼観音力_一、汝病得_二除癒_一」がある¹⁴。当時の貴族にとって観音信仰は珍しいものではないが、以上の事例も参考となろう。

また、道真の死後、大宰府安楽寺だけでなく北野天満宮でも観音が重要な信仰の対象であつたという記録が、『北野天満自在天神宮創_二建山城国葛野郡上林郷_一縁起』(天徳四年(九六〇)成立)に見える。「……亦依_二託宣_一、建_二立三間堂_一一字、安_二置観世音菩薩像_一一体、其外雜事累年多許矣、敢非_レ可_二細記_一……」とあるが、北野社では神託により三間堂に観世音菩薩像が安置されたらしい。後世の『北野天神縁起』では「さても本地を申せば、観世音のすいじやく、十一面の尊容なり」と、天神の本地を十一面観音としている。他の縁起類からの影響が想定されるものの、あるいは北野社の仏像も十一面観音であつたかもしれない。

このように、長谷寺と安楽寺は十一面観音によって照応し、他の道真に関する事例からも観音信仰が確認できる。これらと後世の道真偽作の長谷寺縁起類とを考え併せると、孝標女の時代の長谷寺、道真間のつながりがより想起されうると推察される。それは、いわゆる同体説のような明確な教義というより、孝標女や周辺の菅原氏等が抱いていた、ゆるやかな神仏信仰の連続性のようなものであつたかとも考えられる。実際、『更級日記』には先述した長谷寺、稲荷、天照信仰のゆるやかなつながりが確認できる。

次節ではまとめとして、天神信仰が広まっていた当時において、孝標女が父祖道真をどのように意識していたのか、ないしは『更級日記』の記述と道真との関わりを、我々はどのように理解すべきか、といった問題を考える。

四 まとめ——当時の天神信仰と孝標女——

ここまで、『更級日記』は道真や天神に関する直接的な記述を持たないが、長谷寺記事は道真ないしは天神信仰とゆるやかに結び付いていたのではないかという見通しを述べた。それは主に後世の縁起類や十一面観音の照応から導かれるものであつた。

では、父祖でありながら神として祀られた道真は、孝標女に対してどのような存在だったのであろうか。

道真は、死後朝廷に崇る存在として畏怖の対象でありながら、天神として祀られ、次第に菅原氏の氏神や国家安寧の神として、広く信仰を集める存在となった。孝標女の時代には、天神（道真）は既に信仰の対象として、朝廷や貴族達の間にも広く浸透していたらしい。並木和子氏、袴田光康氏等によれば、撰闕家である藤原師輔が北野社を厚く信奉したことを始めとして、特に道長の代以降、撰闕家の子孫が北野社に毎年神馬を奉納するようになる等、施政者と天神信仰は結び付いていったようである⁽¹⁵⁾。

また、当時の文人貴族達も道真・天神を信仰し、多くの詩文を作っていたようであり、『本朝文粹』等に収められている詩序等からはそれがよくうかがえる⁽¹⁶⁾。

孝標女はこのように天神信仰が世に広まった時代を生きた。その状況下において、彼女は自身が道真直系の子孫だということを意識していただろう。ここで、彼女はなぜ日記中にそれを直接記述しなかったのかという疑問が出来る。推測の域を出ないが、道真は単なる父祖ではなく、朝廷に崇り、また朝廷を守護する天神という、特殊な存在になってしまったことが関係しているのではないだろうか。

道真は天神となっており、その家系を露骨にアピールすることは、菅原氏の文人貴族や神職ならばともかく⁽¹⁷⁾、仮名文芸に携わる一介の女房としてはタブーの意識がはたらくのではないかと考えられる。清少納言は『枕草子』中で歌人の家系を謙遜しているが、孝標女にとっては同じような話題は難しいだろう。

その場合、日記中の道真関連の記述は、作者によって意図的に韜晦された形か、作者の意図しない形で現れるはずである。『更級日記』の長谷寺記事は先述の通り日記中の「孝標女」の未来を暗示する内容となっており、靈驗あらたかな父祖道真が介在する箇所としては、ふさわしいと考えられる。

孝標女は物語作家であったとおぼしく、著作と伝わる『浜松中納言物語』には渡唐する主人公が描かれる。また同じく著作と伝わる『夜の寝覚』には道真歌の引用とされる表現がある⁽¹⁸⁾。今後も孝標女の著作から道真の存在を広く探求し、その意義を考究したい。

※引用本文は、『三宝絵』は「新日本古典文学大系」に、『菅家文章』『菅家後集』は「日本古典文学大系」に、『北野天満自在天神宮創建山城国葛野郡上林郷縁起』（『北野天神御伝并御託宣等』所収）『菅家御伝記』『安楽寺別当次第』は「神道大系」に、『北野天神縁起』は「日本思想大系」に、『長谷寺縁起文』は「大日本仏教全書」に、『長谷寺密奏記』は内田濤子「内閣文庫本『長谷寺密奏記』——翻刻と解説——」（『国文論叢』第三二号、二〇〇二年八月）にそれぞれ拠った。

注

(1) 後藤祥子「更級日記の作者と東国——竹芝伝説の周辺——」（木村正中編『論集日記文学 日記文学の方法と展開』笠間書院、一九九一年四月）、田中喜美春「招誘歌の深滞」（『国語と国文学』第七七巻第一〇号、二〇〇〇年一〇月）、張陵『更級日記』と漢文学についての一試論——景物描写を中

- 心に——」(『国語国文』第七九卷第七号、二〇一〇年七月)、元吉進「更級日記と上総国笠森観音」(『学苑』第九〇三号、二〇一六年一月)。
- (2) 池田利夫「菅原孝標像の再検討——更級日記との関連に於て——」(『国語と国文学』第五五卷第七号、一九七八年七月)、松本寧至「菅原孝標は同行しなかった——『扶桑略記』竜門寺参詣記事新解——」(『古代文化』第三一巻第四号、一九七九年四月)。
- (3) ちなみに、日記中に頻出する寺社の登場回数は、長谷寺、広隆寺(太秦)がともに三回であり、関寺、清水寺、石山寺が二回である。
- (4) 福家俊幸『更級日記』の初瀬詣で考——御禊の日に出立した意味」(『中古文学論攷』第一一号、一九九〇年一二月)、久下裕利「迷走する孝標女——石山詣から初瀬詣へ——」(福家俊幸・久下裕利編『王朝女流日記を考える——追憶の風景』武蔵野書院、二〇一一年)。
- (5) 松本寧至「母一尺の鏡を鑄させて——『更級日記』と長谷寺信仰——」(『国学院雑誌』第八〇巻第四号、一九七九年四月)、小内一明「あまてる御神をねむしませ」の夢——更級日記解釈私見——」(『群馬県立女子大学国文学研究』第二号、一九八二年三月)。
- (6) 藤巻和宏『長谷寺縁起文』天照大神・春日明神誓約譚をめぐって——第六天魔王の登場と『長谷寺密奏記』との照応——」(『国文学研究』第一二七集、一九九九年四月)、藤巻和宏『長谷寺縁起文』成立年代の再検討——長谷寺炎上と「行仁上人記」——」(『国文論叢』第三六号、二〇〇六年七月)、藤巻和宏「菅原道真仮託の縁起——大安寺と長谷寺——」(『巡礼記研究』第四集、二〇〇七年九月)等、上島享「中世長谷寺史の再構築」(『国文論叢』第三六号、二〇〇六年七月)。より先行する諸説は、藤巻論文の一つ目にとめられている。なお久下裕利「大望祈願の物語——石山詣から初瀬詣へ——」(福家俊幸・和田律子・久下裕利編『更級日記の新世界』武蔵野書院、二〇一六年)には「菅原道真が著わしたとも知られる『長谷寺縁起文』には長谷寺の十一面観音の本地垂迹が語られ、この観音が天照大神との一体とも喧伝されている時代状況があり……」とあるが、成立時期等をより慎重に勘案すべきかと考えられる。
- (7) 前掲(6)藤巻論文の一つ目等を参照されたい。
- (8) 與喜天満神社についての先行研究は多くないが、例えば岩城隆利「長谷寺と与喜天神社と連歌」(『大和文化研究』第五巻二号、一九六〇年二月)、横田隆志『長谷寺験記』から見えるもの——与喜天神縁起を中心に——」(『日本文学』第五四巻第四号、二〇〇五年四月)等がある。
- (9) 堅田修「寺院縁起の研究」(『日本古代信仰と仏教』法蔵館、一九九一年)等。
- (10) ちなみに中世になると、長谷寺はより多彩な信仰を併せ持つ場となる。遠日出典「長谷寺にみる天神信仰」(『長谷寺史の研究』古代山岳寺院の研究一、巖南堂書店、一九七九年)、吉川宗明「与喜山(奈良県桜井市)山中の「磐座」を探し求めて」(『岩石を信仰していた日本人——岩神・磐座・磐境・奇岩・巨石と呼ばれるもの』研究——『遊タイム出版、二〇一一年)等。
- (11) ちなみに時代は遡るが、『大武高遠集』一七五番詞書には「三月三日安楽寺花宴日、僧都元真のものとにいひやりし」とある。
- (12) 小峯和明「大江匡房——大宰府時代から——」(『国文学解釈と鑑賞』第五五巻第一〇号、一九九〇年一〇月)。

- (13) 前掲(6)藤巻論文の三つ目。
- (14) 川口久雄校注『菅家文章・菅家後集』(日本古典文学大系七二、岩波書店、一九六六年)の六〇〇頁の注。
- (15) 並木和子「撰閲家と天神信仰」『中央史林』第五号、一九八二年三月、袴田光康「光源氏の流離と天神信仰——「須磨」・「明石」巻における道真伝承をめぐる——」(秋澤互・袴田光康編『源氏物語を考える——越境の時空』考えるシリーズ三、武蔵野書院、二〇一一年)。
- (16) 前掲(12)小峯論文。吉原浩人「文道の大祖」考——学問神としての天神の淵源』『日本における「文」と「ブンガク」』勉誠出版、二〇一三年)。
- (17) 例えば、託宣によって道真に官位が追贈される際、菅原幹正は勅使に任じられ『小右記』正暦四年(九九三)六月二十五日条、後日藤原道兼の見た夢告を聞いた際には「甚だ恐ろしい。感慨無量であり、道真が太政大臣の地位を欲することは私が思った通りであり神異を知った」という旨を語っている『小右記』同年閏一〇月六日条。また、近くは父孝標が竜門寺の門に書かれた道真の「神筆」に仮名文を添え書きして不評を買っており『扶桑略記』治安三年(二〇三三)一〇月十九日条、前掲(2)両論文に詳しく論じられている。
- (18) 石川徹「夜半の寢覚は孝標女の作と思う」『王朝小説論』新典社、一九九二年)。

第四章 源資通と「天照御神」「冬の夜の月」

『更級日記』の宮仕えの記事中に、源資通が登場する場面がある。資通は、時雨の夜、孝標女の出仕先である高倉邸で、春秋優劣の論と、齋宮の勅使の話を語り、その後も足掛け三年に渡って孝標女と交友を持つとする。この資通の登場場面は、男女の恋物語を思わせるような、耽美的、虚構的な描き方がなされており、資通に関する従来の研究もまた、専らそのような物語的な問題に重きが置かれてきた。

本章は、それらの先行研究を踏まえた上で、資通の語る齋宮の勅使の場面の、神仏という題材に着目する。この資通の語る齋宮の勅使の場面は、確かに物語的といえる面もあるだろうが、それと同時に、この場面は神仏といった宗教的、信仰的ともいえるべき題材が扱われているという点でも、注目されるべきなのではないかということ論じたい。

以下、今回取り上げる資通の場面と、先行研究を確認した上で、資通の語る齋宮の勅使の場面がどのように神仏の存在を扱っているのかを、「天照御神」(1)と「冬の夜の月」という二つの観点を通じてみてゆく。また最後に、神仏を扱った表現という問題を、『更級日記』における物語耽溺と仏教帰依の問題等と関連させて考える。

一 物語的貴公子と評される源資通

孝標女は中年期、周囲の勧めにより、両親の反対にあいながらも祐子内親王家に出仕する。慣れない出仕に困惑しながらもそれを数年続けていた。ある時雨の夜に、孝標女は出仕先の高倉邸で、源資通と語らう機会を偶然に得る。資通は楽才などに秀で、風流な人物であったらしい。語らいの内容は、主に春秋優劣論と、資通が冬の夜に齋宮の裳着の勅使へ下った体験談であった。次に引用するのは、その資通の体験談の全文である。

①宮仕え先の高倉邸で、時雨の夜、資通の語る冬の夜の齋宮の様子。

「……冬の夜の月は、昔よりすさまじきもののためしにひかれてはべりけるに、またいと寒くなどしてことに見られざりしを、^a齋宮の御裳着の勅使にて下りしに、暁に上らむとて、日ごろ降りつみたる雪に月のいと明きに、旅の空とさへ思へば、心ほそくおぼゆるに、まかりまうしに参りたれば、余の所にも似ず、思ひなしさへけおそろしきに、さべき所に召して、^b円融院の御世より参りたりける人の、いとみじく神さび、古めいたるけはひの、いとよしふかく、昔のふるごとどもいひ出で、うち泣きなどして、よう調べたる琵琶の御琴をさし出でられたりしは、^cこの世のこととおぼえず、夜の明けなむも惜しう、京のことも思ひたえぬばかりおぼえはべりしよりなむ冬の夜の雪降れる夜は思ひ知られて、火桶などをいだきてもかならず出でてなむ見られはべる」

(三三六頁・三三七頁)

*引用に際し、天照御神関連箇所には波線を、冬の夜の月関連箇所には傍線を付した。

資通は、直前の話題、春と秋と、どちらが優れているかは決しがたいとし、最初の傍線部「冬の夜の月は……」と、自身が体験した冬の夜の、斎宮の裳着の勅使の印象的な思い出を語る。それは、降り積もった雪に月が明るく、暇乞いに訪れた斎宮は「余の所にも似ず」、応対してくれた女房は甚だ年老いており、昔語りや琵琶に、京のことも忘れるほど深い感動を覚えた、という内容であった。

この資通の伊勢下向については、『更級日記』勘物と『左経記』にほぼ同様の記述が載っている。それによると資通は萬壽(二〇二五)二年一月二日に京を出立したとあるが、帰京の詳しい日程は記されておらず、①で資通が語った斎宮の体験は、一月末から二月初旬の間であるらしいがそれ以上は絞れない。なお、史実の資通は管絃に秀でた風流人とされており、『順徳院御記』には琵琶の流派として「資通流」という語がみえ、『十訓抄』下十ノ七〇には、琵琶の名手としての資通の逸話が載る等している。

では、次に『更級日記』作中の源資通について先行研究を確認したい。史実と同様に日記中の資通も貴公子として描かれ、その側面の研究が進められてきた。小谷野純一氏は、資通を「理想的貴人」とし、孝標女を「鄙人」とする「物語的結構」が意図されていると述べている²⁾が、これは資通の場面全体に渡っていえることであろう。

また、資通が登場する個々の記事については、中嶋朋恵氏や、和田律子氏の研究等がある³⁾。中嶋氏は、資通の語りと『源氏物語』の共通点に、春秋優劣論と冬の賞美という美意識があることを指摘され、『更級日記』は「源氏物語の春秋優劣論の発展」を「受け継いだ」ものだとする。和田氏は資通の姿が、薫と『紫式部日記』中の頼通とに似通うとし、「源資通は、一方に藤原頼通、一方に薫という」「孝標女によって独自に理想的に創り上げられた人物である」と指摘する。

これらの、資通の場面の物語的性格についてはいずれも首肯されるべきものであり、資通自身もそのような物語的表現を踏まえて描かれているという点で「物語的貴公子」であると思う。なお、この点は、後に触れる「冬の夜の月」についての考察にも関わる。

ただ、物語的であるということと併せて大きく取り上げたい問題に、資通の語る斎宮の場面が神仏を積極的に扱っているということがある。次にこの資通の語る斎宮の場面と、『更級日記』全体に渡る「天照御神記事群」との関わりについてみていく。

二 資通の語りと天照御神記事群

『更級日記』には夢告や物詣を中心として、神仏を扱った記事が繰り返し登場するが、その中に孝標女と天照御神との関わりを扱った、天照御神記事群がある。孝標女は少女時代から晩年に至るまで、以下の②③④の五つの記事を通じて天照御神と関わり続けている。

②物語に耽溺する少女時代、天照御神の夢を見る。

物語のことを、昼は日ぐらし思ひつづけ、夜も目のさめたるかぎりは、これをのみ心に

かけたるに、夢に見ゆるやう、「このごろ皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遣水をなむつくる」といふ人あるを、「そはいかに」と問へば、「天照御神を念じませ」といふと見て、人にも語らず、なにも思はでやみぬる、いといふかひなし。(三〇〇頁)

③初瀬より、僧が帰ってくる。作者、人に天照御神信仰を勧められる。

ものはかなき心にも、つねに、「天照御神を念じ申せ」といふ人あり。いづこにおはします神、仏にかはなど、さはいへど、やうやう思ひわかれて、人に問へば、「神におはします。伊勢におはします。紀伊の国に、紀の国造と申すはこの御神なり。さては内侍所にすくう神となむおはします」といふ。伊勢の国までは思ひかくべきにもあらざなり。内侍所にも、いかでかは参り拝みたてまつらむ。空の光を念じ申すべきにこそはなど、浮きておぼゆ。(三二二頁)

④宮家出仕中に機会を得、内侍所に参拝する。

……ただ大方のことにのみ聞きつつ過ぐすに、内裏の御供に参りたるをり、有明の月いと明きに、わが念じ申す天照御神は内裏にぞおはしますなるかし、かかるをりに参りて拝みたてまつらむと思ひて、四月ばかりの月の明きに、いとしのびて参りたれば、博士の命婦は知るたよりあれば、灯籠の火のいとほのかなるに、あさましく老い神さびて、さすがにいとようものなど言ひあたるが、人ともおぼえず、神のあらはれたまへるかとおぼゆ。(三三〇頁・三三二頁)

⑤初瀬詣での途中、山辺の寺で夢を見る。

その夜、山辺といふ所の寺に宿りて、いと苦しけれど、経すこし読みたてまつりて、うちやすみたる夢に、いみじくやむごとく清らなる女のおはするに参りたれば、風いみじう吹く。見つけて、うち笑みて、「何しにおはしつるぞ」と問ひたまへば、「いかでかは参らざらむ」と申せば、「そこは内裏にこそあらむとすれ。博士の命婦をこそよくかたらはめ」とのたまふと思ひて、うれしくも頼もしくて、いよいよ念じたてまつりて、初瀬川などうち過ぎて、その夜御寺に詣で着きぬ。(三四五頁)

⑥夫の死に茫然、不幸な生涯を願みる。

年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど、後の御かげにかくるべきさまをのみ、夢ときも合はせしかども、そのことは一つかなはでやみぬ。(三五七頁)

右の記事群は大きな筋書きのもとに配列されている。すなわち、孝標女は②で天照御神の夢を見ても意に介さなかったが、③では天照御神とその祀られている場所を知り、④で内侍所に参拝、⑤で内侍所の博士の命婦に相談しろと言われる夢をみるも、⑥で自分は信仰が足らず、不幸な生涯であったと後悔する、という話の流れである。これらの記事群に、先に引用した①の資通の齋宮の記事を照らしてみたとき、①もその記事の配列と内容から、天照御神を扱った記事の一つとして加えてよいのではないかと思われる。

まず記事の配列の問題について検討する。①の記事は、④の記事の次に位置しており、記事の配列として二つ前の③から、③④①という天照御神の祭祀場をめぐる話の流れがある。

すなわち孝標女は、③で天照御神が波線部 a「伊勢」の齋宮と波線部 g「内侍所」に祀られているということを知り、④で内侍所に参拝、①で伊勢の齋宮の体験談を聞くという流れである。作者は、はじめに③で天照御神が祀られている場所を詳しく紹介し、続く④と①で、内侍所と伊勢の齋宮の様子を順に描く。頁数をみればわかるが、これら③④①の記事は短い間隔で配列され、特に④と①は宮仕えの記事中においてそれぞれ天照御神の祭祀場を描いた、並列関係の記事でもあった。

次に、記事間の語句の似通いについて検討する。天照御神記事群同士の繋がりには、一連のストーリーだけでなく、共通する語句の反復使用によっても強調されている。記事をまたいで使用される同一語句には、同一のアルファベットと波線とを付したが、これらの記事群と①の資通の齋宮の記事との間にも、共通する語句が見出せる。とりわけ、④の波線部 b「あさましく古い神さびて」と、①の波線部 b「……いといみじく神さび、古めいたるけはひ」とには、強い共通性がみてとれる。これらの表現は、いずれも神域に仕える年老いた女房の形容であり、やはりここからも④と①の関連性を指摘できるだろう。

しかし、これらの資通の齋宮の記事と天照御神記事群との関連に言及した論考はごく限られており、中村文氏、福家俊幸氏のもののみのものである⁽⁴⁾。両氏は内侍所と伊勢神宮の「神々しい／神さびた老女」の似通いについて指摘しているが、この点と同様に、天照御神の祭祀場をめぐる記事の配列についても着目してよいように思われる。

資通の齋宮の場面は、物語的な表現が用いられていると同時に、右に確認したような神仏を題材に扱っているという点からも、論じられるべきである。次に、この物語的な表現と、神仏が題材であるという観点から、資通が語る「冬の夜の月」という風景描写を扱う。『更級日記』成立以前の冬の月について調査したところ、『更級日記』の資通の語る「冬の夜の月」が物語的な表現であり、かつ神仏を題材とするにふさわしい表現であるといえそうである。次節では、まず『更級日記』に先行する諸作品の冬の月の用例を押さえ、続けて『更級日記』がそれらをどのように作品中に取り入れたのかを検討したい。

三 先行作品の冬の月の用例と「師走の月夜」

文学史上の冬の月については平安時代の作品を対象としたもの⁽⁵⁾だけでなく、上代和歌についてのもの⁽⁶⁾や、中世和歌についてのもの⁽⁷⁾等、多くの観点から研究がなされている。ここではそれらの先行研究の成果を踏まえつつ、まず諸作品における冬の月の用例数を確認し、次に和歌作品の冬の月と、散文作品の冬の月を順にみていく。

本章末尾(五一頁)の表1は、『更級日記』成立期までの大きな歌集の用例数を、表2は『更級日記』成立期前後までの主な散文作品等の用例数を、それぞれ集計したものである⁽⁸⁾。

「師走の月夜」については後述するが、冬の月の用例には季節を判断し難いものや、季節感を読み取ってよいかどうか微妙なものもあり、主観を含まざるをえない集計結果となっている点、諒とされたい。ただ、これらをみてわかる通り、冬の月の用例数は早い時期では

口のものも多く、時代が下るに従って増加する傾向にあるといえることはいえる。

では具体的な用例について、まず和歌作品における冬の月についてみる。

(A) 和歌における冬の月

1 由吉能宇倍尔 天礼流都久欲尔 烏梅能播奈 乎理天於久良牟 波之伎故毛我母
ゆきのうへにてれるつくよにうめのはなをりておくらむはしきこもがも

『万葉集』四一五八・四一三四・宴席詠「雪月梅花」歌一首・右一首十二月大伴宿禰家持作

2 おほぞらの月のひかりしきよければ影見し水ぞまづこほりける

『古今集』冬歌・三二六・読人しらず・題しらず／〔他出〕『古今六帖』三二八／『和漢朗詠集』三八六

3 あさぼらけありあけの月と見るまでによしののさとにふれるしらゆき

『古今集』冬歌・三三二・坂上これのり・やまとのくににまかれりける時に、ゆきのふりけるを見
てよめる／〔他出〕『是則集』二二／『古今六帖』七三二

4 あまの原そらさへさえや渡るらん氷と見ゆる冬の夜の月

『拾遺集』冬・二四二・惠慶法師・月を見てよめる／〔他出〕『惠慶集』一〇八・十二月、ある所
に歌合せさせ給ふ……冬の夜の月／『古今六帖』三二九／『如意宝集』一五／『拾遺抄』一五四

5 いざかくてをりあかしてん冬の月春の花にもおとらざりけり

『拾遺集』雑秋・一一四六・もとすけ・高岳相如が家に、冬のよの月おもしろう侍りける夜、まか
りて／〔他出〕『元輔集』一三〇

和歌史上の冬の月は、散文作品に比べ早い段階から用例があり、まず『万葉集』にみられる。

1 の和歌は家持が雪と月と梅を和歌に詠み込んだ、一二月の詠であるが、これは白居易の「雪月花」という詩句に影響を受けたものであると考えられ⁹⁾、『万葉集』冬雑歌や冬相聞歌には、同様に月が梅の花と共に詠まれるものが散見される。

『古今集』の時代以降になると、2のように氷と共に詠まれたり、3のように月光や雪、花がそれぞれお互いの見立てとなるような、比喻表現としての冬の月が登場し始め、その後の『古今和歌六帖』には「ふゆの月」の項と共に例歌が多数収録される。そして特に注目したい歌が、いずれも『拾遺集』に採られている4と5である。4は他出の『惠慶集』の詞書から、某年一二月に行われた、冬の歌題四つのみで構成された歌合のうちの、「冬の夜の月」の詠作であることがわかる。また、5は詞書や和歌本文から、冬の月を意識的に賞讃していることがわかる。

『古今六帖』の「ふゆの月」や、4、5の冬の月を積極的に扱う和歌等が影響を与えたのか、その後の後宮サロンでは冬の月を賞讃する習慣が定着していく。以下では、扱う問題点をわかりやすくするため、引用する散文作品の用例を、(B)と(C)に分けてみる。

(B) 冬の月を賞讃するもの

① 『枕草子』二八三段 十二月二十四日、宮の御仏名の

日ごろ降りつる雪の、今日はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷いみじうしだり、地などこそ、むらむら白き所がちなれ、屋の上はただおしなべて白きに、あやしき賤の

屋も雪にみな面隠しして、有明の月の隈なきに、いみじうをかし。

(四三六頁)

㊤『源氏物語』朝顔 源氏、朝顔の姫君のもとへ懸想しに行く。

十二月十日よひの月いとあかきに、日比ふりつもりたる雪の、しみかたまりたるが、空はやみたれど……(中略)……なをいとをかしとみゆくに、「月千里にあきらかななり」といふことを、こゑのかぎりずむじたるは、さらにこと笛のねよりも、をかしくめでたし。

(一三七二頁～一三七九頁)

㊦『源氏物語』朝顔 源氏、朝顔の姫君のもとへ懸想しに行く。

月さし出でて、薄らかに積もれる雪の光りあひて、なかなかいとおもしろき夜のさまなり。

(四八五頁)

成立の早いものから数例列挙した。これらは主に冬の月を「おもしろし」や「をかし」と評して賞讃しており、当時マイナーであった冬の月に美を見出す、散文作品としては初期の例である。次に(C)の用例群を引用するが、こちらは内容がより複雑となっている。

(C) 他人に批判される冬の月を、男主人公があえて賞讃するもの

㊧『篁物語』 篁、師走の月夜に女と語らうのを人に見咎められる。

師走のもちごろ、月いとあかきに、物語しけるを、人見て、「誰ぞ。あな、すさまじ。師走の月夜ともあるかな」と言ひければ、

春を待つ冬のかぎりと思ふにはかの月しもぞあはれなりける

(二六頁)

㊨『源氏物語』朝顔 源氏、紫の上と昔今の女の評をかわす。

「時々につけても、人の心をうつすめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの身にしみて、この世の外のことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。すさまじき例に言ひおきけむ人の心浅さよ」とて、御簾捲き上げさせたまふ。月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに……

(四九〇頁)

㊩『源氏物語』若菜下 源氏、女三の宮に琴を教える。

冬の夜の月は、人に違ひてめでたまふ御心なれば、おもしろき夜の雪の光に、をりにあひたる手ども弾きたまひつつ……

(一八三頁)

㊪『源氏物語』総角 薫、月夜の雪景色に大君を悼み歌を詠む。

雪のかきくらし降る日、ひねもすにながめ暮らして、世の人のすさまじきことに言ふなる十二月の月夜の曇りなくさし出でたるを、簾巻き上げて見たまへば、向かひの寺の鐘の聲、枕をそばだてて、今日も暮れぬとかすかなるを聞きて、

おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきこの世ならねば

風のいとほげしければ、蒨おろさせたまふに、四方の山の鏡と見ゆる汀の水、月影にいとおもしろし。

(三三三頁・三三三頁)

㊫『狭衣物語』巻二 狭衣、女二の宮への思いから故大宮邸へ。

世にすさまじきものに言ひふるしたる師走の月も、見る人からにや、宵過ぎて出づる影さやかに澄みわたりて、雪少し降りたる空のけしきの冴えわたりたるは、言ひ知らず心

細げなるに、……

(二二二頁)

こちらの用例は、調べた限り全てのものを引いてきた。『源氏物語』前後の時期から散文作品に現われるこれらの表現であるが、共通する構造として、「世間や他人は冬の月をすさまじきものとして忌み嫌うが、男主人公はかえってその冬の月を賞讃する」というパターンがある。先に引用した『更級日記』の①の資通の齋宮の場面にも「冬の夜の月は昔よりすさまじきもののためしにひかれてはべりけるに……」とあり、この(C)に属する。

ここで、なぜこの(C)のようなパターンが作られたのかを確認したい。これには、平安時代の早い時期から存在していた慣用表現「師走の月夜」が関係しているようだ。次に、(D)としてこの用例を引用する。

(D) 『すさまじきもの』としての慣用句「師走の月夜」

⑨ 『うつほ物語』葦開中 兼雅、北の方や仲忠に不満を漏らす。

「……天の下の皇子たちは、この窪どもに生み果てられたまふめり。この度も男子をこそ生まめ。この師走の月夜のやうなるわざしたんなる者は、女の童のかしけたるをこそ生まめ……」

(一五四頁)

⑩ 『新猿楽記』 第一の本妻の描写。

第一の本妻は、齢既に六十にして、紅顔漸く衰へ、夫は年僅に五人に及び、色を好むこと、甚だ盛なり。(中略) 気装を致すと雖も、敢て愛する人無し。宛も極寒トホサの月夜の如し。

(一四四頁)

⑪ 『光源氏物語抄』 ⑩ 相当箇所に対する注釈。

しはすの月夜と世俗此詞あり 定家

すさまじき物しはすの月よをうなのけしやう 清少納言枕草子 老嫗也

⑫ 『二中歴』 冷物

十二月々夜 十二月扇 十二月蓼水 老女假借 女醉 胡瓜老 々法師醉舞 無酒神楽 勅使社打内競馬 崑崙八仙舞

「師走の月夜」の用例は⑨『うつほ物語』中に早くにみえ、一〇世紀後半頃から使用されていた。これらはいずれも慣用表現として、景物としての冬の月とは関係のない場面で、興ざめなものを指す言い回しになっている。⑨『うつほ物語』では、娘が男児を産まないことに対して「師走の月夜のやうなるわざ」と使われ、⑩『新猿楽記』では老齡の妻の化粧に対して「師走の月夜の如し」と使われる。また、⑪『光源氏物語抄』には『清少納言枕草子』からの引用として「すさまじき物しはすの月夜」という記述があるが、現存する『枕草子』諸本に該当する記述はなく、代わりに⑫『二中歴』には類似した記述がある。

ここで、(C)、(D)の用例群と、(A)、(B)の用例群を突き合わせて考えてみたい。冬の月を貶める用例として(C)を見た場合、他人からの伝聞の形で冬の月が「すさまじ」とされ、(D)では実際の景物としての冬の月とは無関係のところ、「師走の月夜」という語句が使われている。これらの用例と同時期に、(A)、(B)では冬の月が少数ながら歌に詠み込まれる等していたという事実も考え合わせると、冬の月を貶める習慣は、冬の月を賞讃

する習慣と同時期に併存していたということが分かる。

冬の月が貶められる問題について中嶋氏は、「冬の夜の月を「すさまじきもの」とすることは源氏物語以前から言われていることではあるが」と、冬の月が貶められることを自明のこととして簡潔に述べる¹⁰。また宮崎莊平氏は、「冬の月をすさまじと言ったのは清少納言である」という説を否定した上で、それは、だれか特定の人の発言ではなく、「冬の月を興ざめなものとするのは、広く世間一般に言い古され、慣用されてきた言辭である」と述べる¹¹。いずれも首肯されるべき論考であるが、(C)、(D)それぞれの伝聞、比喻表現で冬の月を貶める表現が、(A)、(B)の冬の月を賞讃する表現と同時期に併存している点は、一考の余地がある。

当時、景物としての冬の月を貶める感覚が全くなかったとはさすがに断言しがたいが、『更級日記』の資通の語り等にみえる「冬の月は世間ではすさまじきものとされているが……」というフレーズは、慣用句「師走の月夜」に影響を受けて語られた、ある程度誇張された表現ではないだろうか。

以上、冬の月の表現史と「師走の月夜」をめぐる、『更級日記』の資通の語る冬の夜の月について考えてきた。次に、この資通の語る冬の夜の月が、物語的であり、かつ神仏に関わる表現であるということ論じる。

四 資通の語る冬の夜の月

(C)の用例群が用いている、「世人が貶める冬の月を、主人公はあえて賞讃する」というパターンは、主人公の優美さを強調するという場面に限り見受けられるものである。作り物語を中心に継承されてきたこの表現方法は、物語の生成、享受を通じて用いられているという点で、物語的な表現であるといえる。

また、神仏、この場合は天照御神を扱った表現としての冬の夜のであるが、こちらは先に引用した(C)の『源氏物語』の用例④と⑤との関わりにおいて確認することができる。④は、光源氏が冬の月明りの場面で、波線部「この世の外のことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ」と発言し、⑤では、薫が亡き大君を悼んで冬の月明りの中鐘の音を聞き、波線部「おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきこの世ならねば」という歌を詠む。『更級日記』の①資通の語りの本文も含め、「この世ではない」という表現に傍線部Cを付した。

まず④の光源氏は、「この世の外」という、和泉式部の「あらざらんこのよの外の思ひいでに今一たびのあふこともがな」『和泉式部集』七四四)の歌にも通じるような輪廻転生を意識させる言い回しを用いる。また、続く「おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ」という言い回しは、御法巻の法華千部供養の場面で用いられる「もののはれもおもしろさも残らぬほどに……」(四九七頁)と通じ合う¹²。これらから④の光源氏の発言は、仏教世界を意識させるような非日常の異界を想起したものと考えられないだろうか。

次に①の薫は、大君の死を悼み「つひにすむべきこの世ならねば」と、無常観や来世観とすべき発想に基づいた和歌を詠む。こちらも、この世、つまり今生を半ば否定して、大君へと思いをはせるところに、非日常的な感覚を読み取ることが可能である¹³。

『更級日記』の①資通の斎宮の場面の、「余の所にも似ず」、「この世のこととおぼえず」という表現は、これら『源氏物語』の冬の月の持つ、非日常的な異界としての感覚に通じるものである。『更級日記』作者は、このような資通の語りが天照御神の祭祀場にふさわしいと考え、日記に選択したという側面もあるのではないか。ちなみに、『源氏物語』の冬の月はやや仏教的な雰囲気の場合であり、『更級日記』の資通の語る冬の夜の月は天照御神の祭祀場の場面であるが、小内一明氏が「作者の信仰世界は観音信仰を中軸にして神仏習合の理解のもとに、それなりにまとまりを持った統一的な信仰世界であったと解釈したい」と述べるように¹⁴、日記作者は様々な点で神仏という信仰対象を緩く一括りに捉えていたと考えられる。そのため、冬の夜の月は非日常的な異界を表現するものというような、信仰上の厳密さを伴わない認識のもとに、作者はそれを用いていたのではないだろうか。傍線部Cの「この世ではない」という内容の表現が共通しているのも、偶然ではないように思う。

以上、資通の語る冬の夜の月が、物語的な表現であり、かつ神仏を題材とするにふさわしい表現であるということを見てきた。本稿では最後に、今回扱った問題を、『更級日記』における物語と神仏、信仰という大きなテーマと関わらせて考える。

五 物語と神仏、信仰——結びにかえて——

『更級日記』には、物語耽溺から仏教帰依へというテーマをはじめとして¹⁵、文芸活動がそのまま仏道信仰となるという狂言綺語観についての研究¹⁶等、物語と神仏、信仰という二項の問題が常に付きまとっている。私は、この物語と神仏、あるいは信仰という問題を考えるにあたって、今回取り上げた源資通のような、物語と神仏の、『更級日記』記事中の緩やかな繋がりというものを考えてゆきたい。

『更級日記』の物語と神仏の関係を考えるとき、物語耽溺から仏教帰依へということや、狂言綺語観等いずれを対象にするにせよ、どうしても「物語」対「神仏、信仰」という二項対立的な構図を想起しがちになる。たしかに、『更級日記』の筋書きでこれらの二項は対立的に描かれており、その点では二項対立的な構図のもとに研究がなされる必要がある。

しかし、今回の資通の語る斎宮の場面のような、物語的な表現をもって神仏、信仰という題材が描かれるという記事も、同様に物語と神仏、信仰という二項を有するものなのではないか。それら是对立することなく、緩やかな繋がりをもって日記中に現われている。このような記事は『更級日記』中に少なくないと思われる、それらを神仏、信仰の物語的な描写というような観点のもとに研究することで、従来の研究と併せて、『更級日記』の持つ物語と神仏、信仰の関わりを、より明らかにできるであろう。

※本文引用は、『十訓抄』『枕草子』『源氏物語』『うつほ物語』は「新編日本古典文学全集」に、『順徳院御記』は「史籍集覧」に、『堺本枕草子』は林和比古編『堺本枕草子本文集成』（私家版、一九九〇年）に、『篁物語』は「日本古典文学大系」に、『新猿楽記』は重松明久『新猿楽記・雲州消息』（現代思潮社、一九八二年）に、『光源氏物語抄』は中野幸一・栗山元子編『源氏物語古註釈叢刊第一巻』（武蔵野書院、二〇〇九年）に、『二中歴』は『二中歴』三（尊経閣善本影印集成一六、八木書店、一九九八年）にそれぞれ依った。

注

- (1) 「天照御神」の呼称は一般的でないが、御物本『更級日記』中の表記が「あまてる御神」で統一されているため、本稿でもそれに倣い「天照御神」の呼称に統一した。
- (2) 小谷野純「更級日記源資通との邂逅譚」〔平安後期女流日記の研究〕教育出版センター、一九八三年。
- (3) 中嶋朋恵「春秋優劣論と冬の月」〔東京成徳短期大学紀要〕第一七号、一九八四年三月、和田律子『更級日記』における宮仕えの記をめぐって〔立教大学日本文学〕第七四号一九九五年七月。
- (4) 中村文「孝標女の変容——『更級日記』再出仕記事を読み直す——」（和田律子・久下裕利編『更級日記の新研究——孝標女の世界を考える』新典社、二〇〇四年）、福家俊幸『更級日記』天照大神の夢——創作された時代の言説として——〔国語と国文学〕第八七巻第八号、二〇一〇年八月。
- (5) 前掲(3)中嶋論文、佐藤祐子「古典に現れた月の研究——平安時代の冬の月——」〔信大国語教育〕第五号、一九九六年二月）、菅井麻由子『源氏物語』「冬の月」試論——朝顔巻をめぐって——〔東洋大学大学院紀要〕第三六集、一九九九年）、久下裕利「雪と月と」〔王朝物語文学の研究〕武蔵野書院、二〇一二年）、宮崎莊平「冬の夜の月——若菜下巻に関連して——」〔王朝女流文学攷——物語と日記——』新典社、二〇一〇年）等。
- (6) 中西進『雪月花 雪の匂い』小沢書店、一九九五年等。
- (7) 松井律子「家隆の冬の歌（一）——「湖上冬月」歌をめぐって——」〔就実語文〕第一三号、一九九二年一月）等。
- (8) 前掲(5)佐藤論文にも、冬の月の用例数を表にしたものがある。
- (9) 『白氏文集』二五六五「寄殷協律」の第四句「雪月花時最憶君」（平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引下冊』同朋舎出版、一九八九年より）。
- (10) 前掲(3)中嶋論文。
- (11) 前掲(5)宮崎論文。
- (12) 吉見健夫氏の教示による。
- (13) ㊸と㊹の共通性に言及するものとして、高田祐彦「山姫」としての大君——宇治十帖の表現構造——『*しむらぎ*』第二輯、一九八五年七月）、前掲(5)菅井論文がある。
- (14) 小内一明「あまてる御神をねむしませ」の夢——更級日記解釈私見——〔群馬県立女子大学国文学研究〕第二号、一九八二年三月）。
- (15) 家永三郎「更級日記を通して見たる古代末期の廻心」〔上代仏教思想史研究〕畝傍書房、一九四二

年)をはじめ多くの論考がある。

(16)石原昭平「平安女流日記と仏教——『かげろう日記』『紫日記』『更級日記』と浄土教」(今成元昭編『仏教文学の構想』新典社、一九九六年)、和田律子「晩年の菟書と『更級日記』」(藤原頼通の文化世界と更級日記』新典社、二〇〇八年)等。

表1 主要歌集における冬の月の用例数

	冬の月
万葉集	7
古今和歌集	2
後撰和歌集	2
古今和歌六帖	9
拾遺和歌集	6
後拾遺和歌集	3

表2 主要散文作品における冬の月の用例数

	冬の月	師走の月夜
竹取物語	0	0
伊勢物語	0	0
土佐日記	0	0
うつほ物語	0	1
落窪物語	0	0
平中物語	0	0
かげろふ日記	0	0
篁物語	3	1
枕草子	7	0
源氏物語	13	1
紫式部日記	1	0
和泉式部日記	4	0
浜松中納言物語	3	0
夜の寝覚	5	0
更級日記	7	0
四条宮下野集	8	0
狭衣物語	3	1
堤中納言物語	1	0
栄花物語	2	0

※「霜」や「雪」、「冬」等と共に使用される、冬の季節感のある月を「冬の月」としてカウントした。また、
 比喩表現等もカウントした。

※「師走の月夜」には、『狭衣物語』の「師走の月」の用例もカウントした。

第五章 女房日記の踏襲と逸脱——主家賛美の欠如をめぐって——

『更級日記』は菅原孝標女のほぼ一生を描いた日記作品であり、一三才の上洛の記事に始まり晩年の悔恨の記事に至るまで、日記中には孝標女の様々な経験が記されている。その中には、日記後半に始まる宮仕えの記事群があるが、これらは従来以上に注目されるべきである。孝標女は宮仕え記事を書いて以降も、物語での記事や悔恨の記事において主家周辺の事柄を断続的に記述しており、日記後半において宮仕えと主家の記述は分量・内容ともに重要な位置を占める。乳母願望と稻荷信仰などはその好例であり、日記の成立時期も考え併せると、宮仕えは日記の執筆態度に少なからぬ影響を与えていると推察される。

孝標女は祐子内親王家の女房であり、宮仕え記事は女房としての立場から書かれた、女房日記的な記事ともいえるだろう。後述するが、事実これらには女房日記的な要素が見える。本稿は、『更級日記』に見られるこのような女房的性格の記事を取り上げ、そこに主家賛美の記述がどことく欠如していることに注目する。

孝標女の主家にあたる人物は、出仕先の祐子内親王とその養父・藤原頼通である。孝標女は祐子の御前に伺候したり、頼通の女房や邸宅に接したりと、主家賛美を記しうる機会を幾度となく持ちながら、それを徹底して排除しているのである。

孝標女の主従関係をめぐる先行研究には、頼通の出仕要請と孝標女を論じた和田律子氏の論稿、孝標女の乳母願望を論じた津本信博氏と福家俊幸氏の論稿、孝標女の頼通権力下への帰属意識を論じた富澤祥子氏の論稿(1)等がある。

これらを鑑みても、『更級日記』における主家賛美の有無という問題は、改めて論じられる必要があるだろう。女房による宮仕えの記述とは、本来主家の記録と賛美に密接に関わるはずである。本章は、『更級日記』の宮仕え記事において、主家への記述がどのように欠如しているのか、なぜ欠如しているのかという問題を扱う。これは、『更級日記』が女房としての記述態度の通例をどのように踏襲し、またどのように逸脱するのかという議論と重なり合う。

以下においては、女房としての記述を有する同時代の他作品と『更級日記』との比較を通じて、『更級日記』の宮仕え記事の特異性を論じる。具体的には、まず『栄花物語』の祐子関連記事と比較し、『更級日記』が主家を賛美せず、主家の寂寥を専らに描いていることを捉える。つぎに『枕草子』『紫式部日記』の自卑表現と比較し、『更級日記』が主家との関係を意図的に省筆していることを論じる。つづいて、『四条宮下野集』『出羽弁集』等の女房歌集の邸宅の歌群と比較し、『更級日記』が主家の記録、賛美を欠いていることを明らかにする。最後にこれらの考察として、当時の時代状況と日記読者層の問題を論じる。

祐子は幼少時に母娘子女中宮に死なれ、妹禊子内親王とともに頼通の養女となった。その後、姉妹は関白頼通の庇護を受け、彼女達のもとには女房が多く集まり、歌合等華やかな文芸活動が行われた。

祐子とその周辺の様子は『更級日記』及び『栄花物語』にある程度記述があり、高橋由記氏により、それらはつとに整理されている²⁾。高橋氏が指摘するように、『更級日記』と『栄花物語』の各記事には共通性が見られるが、本節はそこでの二作品間の差異の方に注目する。

A 『栄花物語』巻第三四「暮まつほし」長久三年（一〇四二）某月

内裏わたりいと今めかしくをかし。殿の宮（祐子・禊子）も入らせたまへり。昔おぼえて女房などものあはれなり。梅壺の女御（生子）などの上らせたまふを見るにも、思ひ出づること多かり。四五日ばかりおはしまいで出でさせたまひぬ。^③三〇九頁

B 『栄花物語』巻第三四「暮まつほし」長久三年九月

殿の駒競として行幸ありき。女院も渡らせたまふ。殿の宮（祐子・禊子）の女房などいみじう装束きて、それ過ぎて内裏に入らせたまへりき。所狭くて梅壺の上（生子）の御局におはします。やがてその御しつらひのままなり。うちとくる世なくめでたき御しつらひなれば、さながら下におりさせたまひて譲りきこえさせたまへる、御几帳の帷、御座なども心ことに、とまりたる匂ひなどもなべてならずと、人々めであへり。^④三一八頁

C 『更級日記』長久三年四月

またの夜も、月のいと明きに、藤壺の東の戸をおしあけて、さべき人々、物語しつづ月をながむるに、梅壺の女御（生子）の上らせたまふなる音なひ、いみじく優なるにも、故宮（娘子女御）のおはします世ならましかば、かやうに上らせたまはましなど、人々いひ出づる、げにいとあはれなりかし。

天の戸を雲居ながらもよそに見てむかしのあとを恋ふる月かな

（三三一頁）

引用に際し、祐子家の華美にあたる表現に傍線を、寂寥にあたる表現に波線を付した。右のA～Cはいずれも祐子の参内についての記述である。特に、A『栄花物語』とC『更級日記』は同一の参内をそれぞれ記述したものであると考えられ、生子女御の現在と故娘子女中宮の回想という類似も見られる。

まず、A『栄花物語』とC『更級日記』の比較をしたい。この二記事は類似性に目が行きがちであるが、『更級日記』の特性を考える上ではその差異も注目すべきである。A『栄花物語』は、傍線部「今めかしくをかし」と宮中の華やかさを述べる文脈で、波線部「昔おぼえて」「思ひ出づること多かり」と故娘子女の死を臚化して表現するのに対し、C『更級日記』は華やかさを一切記述せず、波線部「故宮のおはします世ならましかば、かやうに上らせたまはまし」と、故娘子女の不在による不如意な境遇、女房達の寂寥感を直接的に記述している。

この、親の不在を嘆く「……のおはします世ならましかば」という反実仮想は、『うつほ物語』『源氏物語』等の先行物語に見られる類型的な表現である³⁾。特に、『源氏物語』の竹河巻はその最たる例であり、故髭黒の不在を嘆く遺族達の心境が、「内裏わたりなどまかり歩きても、故殿おはしまさましかば」^⑤七六頁、「殿おはせましかば」^⑥七八頁、「殿の

おはせましかば」(⑤八九頁)、「大臣おはせましかばおし消ちたまはざらまし」(⑤一〇三頁)、「故殿おはせましかば」(⑤一一二頁)と、反実仮想で繰り返し印象的に記述される。物語に通じた孝標女は、これらの表現を踏まえながら、庇護者を失った祐子周辺の寂寥感を強調したのだと考えられる。

実際、母孀子は皇子を出産せず亡くなっており、祐子は兄弟に東宮を持つ可能性を早々に断られた内親王であった。この点、C『更級日記』はA『栄花物語』に比べ、強い寂寥感をもって祐子周辺を描いている。

つぎに、B『栄花物語』とC『更級日記』の比較を行いたい。B『栄花物語』は同年の参内の記述と考えられるが、ここでは傍線部のように祐子家の女房達が「いみじう装束きて」、多人数で参内したために、「梅壺の御局」に一時滞在したとあり、祐子周辺の華やかな様子が描かれている。これは梅壺女御の生子が後朱雀天皇の寵愛を受け盛時を迎えていた頃の記述であり、この時期の梅壺に居住できたこと自体が、祐子の権勢と父後朱雀天皇の愛情を意味する。また、ここでの祐子付きの女房達には寂寥感は一切なく、梅壺の素晴らしさを「めであ」うほど心にゆとりを持った様子で描かれている。

この一方で、C『更級日記』は先ほど確認したように祐子周辺の寂寥感を思わせる記述がなされており、和歌の内容も傍線部「むかしのあとを恋ふる」と、女房達の追想になっている。そもそも、『更級日記』の祐子周辺の記述はCに限らず一貫して寂寥感をもって描かれており、華やかな様子が読み取れる記事は一切存在しない。『更級日記』中の祐子家の様子は、寒々とした冬の場面や贈答歌の頻出によって描かれる。「雪うち散りつつ、いみじくはげしく、さえ凍る暁がたの月」(三二八頁)や、「さえし夜の氷は袖にまだとけで冬の夜ながら音をこそは泣け」(三三二頁)等と、寂寥感を専らにして描かれるのである。ちなみにこのような寂寥の表現は、当時の文芸における冬賞美の流行⁴も関係する問題かと考えられる。

それでは、『栄花物語』が祐子周辺を華やかな様子で記述するのに対し、『更級日記』が寂寥感に満ちた様子のみで記述するのはなぜか。祐子周辺をめぐるこの対照的な様子は、どちらも偽りではないと考えられる。祐子は頼通夫妻に養育され、文芸活動の中心的宮家として華やかな存在でありながら、一方では系図的、政治的に収まりのよくない存在でもあった。

『栄花物語』は主に前者を記述し、『更級日記』は結果として後者を記述する形になっているようだ。

『更級日記』が祐子の華やかな様子を一切記述しなかった理由、すなわち専ら寂寥感をもって記述した理由としては、のちに詳しく論じるが、『更級日記』がそもそも祐子賛美の記事が必要としなかったという状況が考えられる。女房による主家賛美の記録とは、主家の政治的な、あるいは文化的な権威の対外的アピールであり、主家賛美の欠如はすなわち対外的アピールの不必要さを意味するのではないだろうか。

ただ、この主家賛美欠如の問題を論じるにあたっては、『更級日記』の源資通記事に触れなければならない。『更級日記』には、資通が優美な男性として登場する記事が存在する。この点は、大倉比呂志氏が「祐子側からの何らかの働きかけによって、作者孝標は資通を理

想的な貴公子として造型したのではないのか」、また「更級日記全体ではないにせよ、一部分に祐子内親王家側からの働きかけがあったのではないか」と指摘する(5)ように、孝標女が要請により祐子家の文芸的権威のアピールを行った可能性が考えられる。

しかし、資通記事は他の『更級日記』宮仕え記事と同じく、他作品の女房による記録と性格を異にする部分が多い。例えば、『枕草子』の藤原齊信や『紫式部日記』の藤原頼通は、本文の呼称から彼等を特定することができるのに対し、『更級日記』の資通は「参りたる人」(三三三頁)と呼ばれ、御物本傍注等によりかろうじて資通と判断できるような書かれ方がなされている。これは女房の記録としては不可解な記述のしかたである。

また、『枕草子』の文化的権威を誇示する記事の多くが、主家が清少納言の才能を称賛する結末を取るのに対し、『更級日記』の資通記事は孝標女と資通の私的なやり取りに終始している点も異なっている。資通記事が祐子家の権威のアピールとなる可能性を考える際は、このような権威のアピールにそぐわない『更級日記』の特異性も考慮すべきである。

次節では、主家に対する記述という同様の観点から、女房という立場から書かれた散文学作品である『枕草子』『紫式部日記』と『更級日記』を比較する。

二 『枕草子』『紫式部日記』との相違

『枕草子』と『紫式部日記』はその成り立ちや内容から、女房による記録という側面を多分に有する二作品である。『更級日記』の宮仕え記事には、この先行二作品から影響を受けているとおぼしい記述がいくつもあり、先行研究においてもその問題はすでに指摘されている(6)。本節では、その中でも女房による自卑の表現に着目し、それが女房と主家との距離にどう影響を与えているかを確認する。

まずは『枕草子』と『更級日記』の類似記事を検討する。この二作品はつぎに引用する初仕時の心境の記述が似通っているが、類似性を確認した上で、異なる点に着目する。

D 『枕草子』一七七段 初仕時の困惑の様子。

宮にはじめてまゐりたるころ、物のはづかしき事の数知らず、涙も落ちぬべければ、夜々まゐりて、三尺の御几帳のうしろに候ふに、絵など取り出でて見せさせたまふを、手にもえさし出づまじうわりなし。「これはとあり、かかり。それか、かれか」などのたまはず。(中略)いとつめたきころなれば、さし出でさせたまへる御手のはつかに見ゆるが、いみじうにほひたる薄紅梅なるは、限りなくめでたしと、見知らぬ里人心地には、「かかるとこそは、世におはしましたけれ」と、おどろかるまでぞまもりまゐらす。暁には、とくおりなむといそがるる。(三〇六頁)

E 『更級日記』 初仕時の困惑の様子。

……立ち出づるほどの心地、あれかにもあらず、うつつともおぼえて、暁にはまかぬ。里びたる心地には、なかなか、定まりたらむ里住みよりは、をかしきことをも見聞きて、心もなぐさみやせむと思ふをりをりありしを、……(中略)

師走になりて、また参る。局してこのたびは日ごろさぶらふ。上には時々、夜々も上りて、知らぬ人の中にうち臥して、つゆまどろまれず、恥づかしうものつつまじきままに、忍びてうち泣かれつつ、暁には夜深く下りて…… (三二五頁)

類似表現に傍線を付したが、「慣れない出仕の恥ずかしさと泣くような思い」や、「里びている心情」、「暁のうちに早々と退出する」といった文言を始め、初出仕に困惑する様子が共通している。これは自らを未熟な女房として強調した、自卑の表現といえるだろう。

しかし、この二記事には決定的な差異がある。D『枕草子』は破線部のように定子の「御手」の美しさを通じて主家賛美を行なっているのに対し、E『更級日記』は御前に伺候しているにも拘わらず、主家やその周辺人物を記述せず、調度等を称賛することも一切しない。この違いは引用箇所の後述の記述において、より対照的となる。すなわち、D『枕草子』が定子・伊周に近侍し寵を受ける記述に続くのに対し、E『更級日記』は出仕に馴染めず里がちに過ごす記述に続くのである。『枕草子』の定子が大人なのに対し、『更級日記』の祐子が子供という違いはあるものの、『更級日記』が徹底して主家の記述を控えるのは、女房の立場から書かれた記事としては特異な記述態度であるといえる。

『枕草子』の自卑表現の記述全般にもいえることであるが、そもそも女房による自卑の態度とは、自らの才覚が主家の目に留まり称賛を受ける際の謙遜行為であると思われる。自卑表現の多くが主家等からの称賛に結び付く『枕草子』は通例というべきであり、自卑表現が主家、称賛といったものに全く結び付かない『更級日記』は特異な例である。

この『更級日記』の専らな自卑表現は、日記中の孝標女を愚鈍な人物のように見せ、長らく孝標女の人物像の理解に大きな影響を与えてきた。しかし、これはそもそも自卑表現のみを専らにし、女房として主家の記録をしない、いびつともいえるような『更級日記』の記述態度に由来しているという点に注目しなければならない。

つぎに、『紫式部日記』と『更級日記』の類似記事を検討する。つぎに引用する三記事は、いずれも女房生活の物憂さを水鳥の身によそえた詠歌の場面である。

F『紫式部日記』 局での水鳥の和歌の独詠。

……もの憂く、思はずに、嘆かしきことのまさるぞ、いと苦しき。いかで、いまはなほ、もの忘れしなむ、思ひがひもなし、罪も深かなりなど、明けたてば、うちながめて、水鳥どもの思ふことなげに遊びあへるを見る。

水鳥を水の上とやよそに見むわれも浮きたる世をすぐしつつかれも、さこそ、心をやりて遊ぶと見ゆれど、身はいと苦しかなりと、思ひよそへらる。 (一五二頁)

G『紫式部日記』 里居での水鳥の和歌の贈答。

大納言の君の、夜々は、御前にいと近う臥したまひつつ、物語したまひしけはひの恋しきも、なほ世にしたがひぬる心か。

浮き寝せし水の上のみ恋しくて鴨の上毛にさへぞおとらぬかへし、

うちはらふ友なきころのねざめにはつがひし鴛鴦ぞ夜半に恋しき(中略)

殿の上の御消息には、「まろがとどめしたびなれば、ことさらにいそぎまかでて、疾く
まあらむとありしもそらごとにて、ほどふるなめり」と、のたまはせられたれば、たはぶれ
にても、さ聞こえさせ、たまはせしことなれば、かたじけなくてまありぬ。

(一七一・一七二頁)

H『更級日記』 御前で水鳥の和歌の贈答。

御前に臥して聞けば、池の鳥どもの、夜もすがら、声々羽ぶき騒ぐ音のするに目もさめ
て、

わがごとぞ水のうきねに明かしつつ上毛の霜をはらひわぶなる

とひとりごちたるを、かたはらに臥したまへる人聞きつけて、

まして思へ水の仮寝のほどだにぞ上毛の霜をはらひわびける (三三二頁)

これらは女房生活の物憂さを水鳥の浮き寝によそえた詠歌であり、「冬の池の鴨のうはげに
おくしものきえて物思ふころにもあるかな」(『後撰集』冬・四六〇・よみ人知らず)等の先行歌
を踏まえ、「水の上の浮き(憂き)寝」「鴨の上毛の霜」に類する語句が共通する。

二作品の相違点としては、やはり主家に対する記述という点が挙げられる。『枕草子』の
場合と同様、『紫式部日記』の彰子は大人で、『更級日記』の祐子は子供という違いはあるも
のの、G『紫式部日記』は彰子の懇ろな召しを受ける場面であるのに対し、H『更級日記』
は御前にありながら主家の存在には一切触れない。

またF、Gの『紫式部日記』は局と里居の記事であり、H『更級日記』は祐子の御前の記
事である。場所による相違のみ見れば、H『更級日記』の方が主家に接近しているように見
えるが、この場面での和歌はいずれも女房生活の物憂さの表出である。御前においてそれを
詠むという『更級日記』の記事は、主家に対する記述を徹底して排除する姿勢と重なり、主
家の存在を希薄なものにしている。

これら女房生活を水鳥によそえた詠歌の記事は、先に引用した『枕草子』ほど明確でない
が、女房による自卑表現の一種に数えられるだろう。女房生活にいつまでも馴染めない不
意さは、G『紫式部日記』において主家の出仕要請に応じる際のポーズとして読める(7)。
対するH『更級日記』の記事は、前後の出仕に馴染めない孝標女の姿に連なり、主家とは無
関係な、単純な自卑表現と読める。

以上、『枕草子』『紫式部日記』と『更級日記』の類似記事を見てきた。孝標女がこの先行
二作品を撰取し『更級日記』を執筆したとの指摘は既に先行研究にもある⁸が、自卑表現
のみを専らに取り入れ、主家への記述を全て省筆した姿勢を取っていることは見落とされ
てきた。これは先にも触れた通り、『更級日記』が主家の記述を別段必要としなかった状況
に原因があるのではないかと考えられる。確かに、清少納言、紫式部と孝標女とは、作品
の執筆状況が少なからず異なるのであろうが、孝標女のような才女が主家の記録をあえて
省筆していることは、より注目されるべきである。この点は本章四節で詳しく論じる。

次節でも同様の観点から、邸宅の記述をめぐって女房家集と『更級日記』の比較検討をする。

三 同時代の女房家集との相違

同時代の女房家集は比較的多く現存しており、本節では『出羽弁集』『四条宮下野集』『康資王母集』『祐子内親王家紀伊集』の四集を扱う。これらには、主家の後見人にあたる男性貴族の邸宅が登場する記事があるので、『更級日記』の宇治別邸の記事と比較する。まず『更級日記』の宇治別邸の記事を引用する。

I 『更級日記』初瀬詣での折、宇治の頼通別邸に泊まる。

……紫の物語に宇治の宮のむすめどものことあるを、いかなる所なればそこにしも住ませたるならむとゆかし思ひし所ぞかし。げにをかき所かなと思ひつつ、からうじて渡りて、殿の御領所の宇治殿（頼通別邸）を入りて見るにも、浮舟の女君の、かかる所にやありけむなど、まづ思ひ出でらる。夜深く出でしかば、……（三四三頁）

孝標女は大嘗会の御禊の当日、初瀬詣でに出立し、宇治の頼通別邸に立ち寄り、邸内を観覧したようである。その後「夜深く出でしかば」とあり、ほぼ一泊してから出立したとおぼしいが、孝標女は頼通別邸を見ても、『源氏物語』の浮舟の邸宅を想起するのみで、頼通別邸に対する説明や賛美を記述しない。

頼通は孝標女の主家祐子の養父であり、第一の後見人である。富澤祥子氏はこの頼通別邸の記事から、孝標女が頼通のもとでの創作活動の特別さを「顕示」していると述べる⁹⁾。たしかに宇治行きの記事は『源氏物語』宇治十帖をオーバーラップさせるように記述されており、孝標女の物語愛好や物語創作をうかがわせるような内容になっている。しかし、主家の後見人であり摂関政治の頂点にいた頼通の別邸に立ち入るに及び、宇治十帖の話のみで説明を済ませるといふ記述態度は、後見人頼通に対する『更級日記』の記述を考える上で、いささか問題となるのではないか。

この問題は、同時代の女房家集の類似記事を確認することでより明確なものとなる。まず『下野集』の宇治別邸記事を引用する。

J 『四条宮下野集』九〇 下野等、宇治の別邸に遣わされる。

宇治殿（頼通別邸）に、はじめおはせぬ人々いで立つに、このたび□いけとおほせらるれば、大納言殿など具せさせ給へり。富家殿（頼通別邸）にぞ参り着きたる。おもしらくあたらしく、御障子の歌あるべき殿なれば、まだしきに、歌あるべしとて、殿上人々詠まねば、まいてめづらしげなき人は、とて思ひもかけで、あたらしく見給ふ筑前詠まむ、うちうちにはなどてか、と、詠ままほしげに思はれたる、ことわりに、譲りてみれば、殿上人々、舟に乗りて遊びかへるに、筑前

曳く人も渚の舟もあるものをうらやましくも漕ぎわたるかな

これは下野が主家寛子により宇治の頼通別邸に遣わされた記事で、歌集中では二度目の頼通別邸来訪となる。右の九〇番の詞書では別邸が「おもしろくあたらしく」と称賛され、「御

障子」の歌をめぐり人々が興じる場面が記録されている。寛子は後冷泉天皇に入内した頼通女であり、言うまでもなく頼通は寛子の後見人である。

『下野集』は歌集冒頭に執筆経緯の説明があり、「めでたくをかしき事ども」を某貴人から記録に残せと命じられて執筆したとある。Jの場面は主家寛子の要請により宇治に行き、頼通別邸を称賛した記事であり、これは歌集の執筆意図によく合致した、寛子家及び後見人頼通の文芸的な権威のアピールと考えられるだろう。『下野集』にはJの前後にも宇治の別邸に関する記事が散見され、この別邸をめぐる記録を積極的に収録しようとしている。J『下野集』とI『更級日記』の宇治別邸記事を突き合わせると、『更級日記』が主家賛美の記述と無縁であることが改めて看取される。

つぎに、『康資王母集』『紀伊集』の宇治別邸記事を引用する。

K『康資王母集』一一・二二 宇治別邸と主家の和歌。

宮(寛子)の宇治殿(頼通別邸)におはしますころ殿(頼通)まゐらせ給ひて女房誘はせ給ひて小倉見せさせ給ふ。それよりやがて帰らせ給ひて京より贈られたる春なれば花の都へ帰るまで小倉の里は霞隔てつ

御返し

見すてつる人の心も見ゆばかりこの里の花ときはならなん

L『祐子内親王家紀伊集』二七・二八 宇治邸往還と主家の和歌。

宇治殿(頼通邸)に日ごろありて、我一人帰りてありしに、宇治殿より里なれぬ山ほととぎす語らふに都の人のなかおとせぬ

御返し

都にはいかばかりかは待ちわぶる山ほととぎす語らひしねを

Kの康資王母は筑前とも呼ばれた女房で、下野と同じく寛子に仕えていた。Kは寛子が宇治別邸を訪れていた折、同じく宇治を訪れた頼通が、先に帰京して寛子へと歌を贈ったという内容と考えられ、返歌は「御返し」とあるから寛子の歌と考えられる。この場面は、康資王母が後見人と主家の贈答歌を記録したものであるといえる。

Lの紀伊は孝標女と同じく祐子に仕えた女房であるが、孝標女より半世代から一世代ほど後の人物である。Lの詞書は難解だが、頼通が晩年宇治に居住していた折、宇治邸を訪れていた紀伊が帰京し、頼通から和歌を贈られるという内容かと推測される。これも返歌に「御返し」とあることから、後見人頼通と主家祐子との贈答歌の記録かと考えられる。

K、Lともに、宇治別邸をめぐる主家と頼通の記録とおぼしいが、これらは『更級日記』には到底見受けられない記録である。彼等の贈答歌の記録は、主家の文芸的権威のアピールと見なせるだろう。

最後に『出羽弁集』の長家邸記事を引用する。

M『出羽弁集』五一〜五四 章子中宮、長家邸に方違えする。

御方違へに、大宮殿(長家邸)に渡らせ給ふこと六月十よ日、泉の涼しげさ、木高き松の年経りにける梢など、ただにて過ぐさせ給ふ所のさまならず、(中略)「庭の松いくら

の年をかかぎれる」といふ題を、但馬の守実綱出したるを、殿人々いとう詠み集め給へめるに、女方もことさらに一つに出だせと、にはかにはべしかば、宣旨殿（以下の和歌四首省略）

これは出羽弁の主家章子中宮が、大夫の藤原長家邸に方違えした際の記録であり、詞書と和歌によって邸宅の素晴らしさを賛美している。長家邸は御子左邸とも呼ばれ、その美しさは有名であった。『出羽弁集』はこれ以降も約二〇首にわたり長家邸を賛美する歌群を載せており、それらは歌集中において、目を引く晴れの記事となっている。

このように『出羽弁集』が長家邸を賛美し、多くの和歌を記録した理由として、やはり主家章子の権威のアピールということが考えられる。中宮大夫であった長家は藤原道長男の末子の存在で、多くの公卿が婿に欲しがるような、優れた出自の人物であった。また、天喜四年寛子春秋歌合では右方選者を務める等、文芸活動にもよく関わる人物であった。

章子付きの女房達が、大夫を務める長家邸で華やかな詠歌活動を行ったという記録は、そのまま章子家の権威をアピールすることとなるだろう。実際、『出羽弁集』八三番詞書には、長家邸での詠歌の記録が相模等のよその人物に回ったということが書かれており、この歌群がそもそも権威のアピールを主な執筆目的としていたことをうかがわせる。この『出羽弁集』の長家邸歌群と、『更級日記』の頼通別邸記事とは、状況的な差異も多いが、主家とその後見人への意識という点において、決定的な差が認められる。

以上、本節では主家・後見人・邸宅という要素に絞りを絞って、『更級日記』と四つの女房家集を比較検討した。日記と歌集というジャンル上の違いや、作品それぞれの状況にばらつきがあるため、単純な比較検討は困難である。しかし、それでも並べて記事を見てみると、『更級日記』の宇治別邸記事が他と性格を大きく異にしていることがわかる。

邸宅を訪問する記録は、必ずとまではいかないが、その多くが後見人や主家を賛美し、記録する記述に結び付く。しかし、『更級日記』の宇治別邸記事は一泊するほどの余裕があるにも拘わらず、浮舟への随想を記述するのみで、祐子や頼通への記述が全く存在しない。先に引用した富澤氏の指摘のように、孝標女が頼通という存在を意識していたとすれば、この記述内容はなおさら特異ということになる。

次節ではこれまで確認した『更級日記』の主家賛美の欠如という問題を、孝標女周辺の状況と関わらせながら考察する。

四 孝標女の周辺と主家賛美の欠如

本章はここまで、『更級日記』と他作品の女房による記録とを多角的に比較しながら、『更級日記』が主家に対しどのような記述態度を取っているのか確認してきた。その結果、『更級日記』が他の女房による作品の記述態度に通じ、それらに近似しながらも、主家やその後見人、すなわち祐子や頼通に対し、徹底した省筆の姿勢を取っていることがわかった。祐子参内の場面や、女房としての自卑表現、頼通別邸訪問といった、女房の記録としては格好の

題材を記述しながら、『更級日記』が主家に対し不自然なほどの沈黙の姿勢を貫き、主家賛美、すなわち権威のアピールを行わないのはなぜだろうか。

従来、『更級日記』作者である孝標女は主家と関係の薄い人物だったと捉えられていたように、『更級日記』の主家賛美の欠如に注目した先行研究はごく少数であった。管見では小谷野純一氏の、『更級日記』の宮仕え記事の「非記録性」に着目し、「主家の事実は、僅少、自己の側の私的事実が大半を占めている」と指摘する論稿や、これを引用する石坂妙子氏の、『更級日記』の宮仕え記事が「私的感情に属する部分のみ」であり、それが「意識的に選び取られたものである」と指摘する論稿がある¹⁰。この二論稿は、主家の記録の欠如に着目した先見的なものであり、欠如の原因として小谷野氏は上洛後の記事の基底が「内面史構築」であることを指摘し、石坂氏は孝標女が「女房社会の周縁的存在」であることを指摘する。

両指摘はいずれも『更級日記』の特徴を丹念に捉えたものであるが、『更級日記』に描かれた孝標女のイメージを、実像に近いものとしてやや信用しすぎているようにも考えられる。孝標女は、日記中では浅薄で、極めて内向的な人物として描かれているが、実際の彼女がそのままの人物であるとは限らない。特に、その教養、見識において『更級日記』の叙述を額面通りに信用することには慎重であるべきだろう。

そして同様に、彼女の女房としての立場もより慎重に考えられるべきである。日記中では「時々まらうとにさし放たれて」「われよりまさる人あるもうらやましくもあらず」(三三〇頁)と不参がちな宮仕えを訴えるが、その一方で孝標女は主家側からの要請を受け度々参上し、御前にも伺候している。頼通付きの女房との交友(三三二頁)や、宇治別邸訪問等も日記に記述されており、孝標女は意外と主家に近い立場にあったのではないか。

主家賛美の欠如という問題は、『更級日記』の内部的徴候以外からも検討されるべきであろう。これらのことを考え併せ、稿者は『更級日記』における主家賛美の欠如の原因として、その時代状況と読者層を想定する。『更級日記』はともすれば自閉的な作者像、作品世界を想定されがちであるが、実際には同時代の文芸的流行を踏まえ、対読者意識をうかがわせるような、当時の読者達と密接に結び付いた作品である¹¹。

孝標女が生きた頼通の時代は、前の道長の時代に比べて「派閥的なものが解消されて」¹²おり、「宮廷は、頼通を中心とする一大血族集団」¹³であったとされる。後宮の軋轢等が少なく、文芸活動は融和的で平穏な雰囲気のもとに行われていたとおぼしい。

主家の賛美、主家の記録といった行為は、つまるところ主家の対外的な権威のアピールに結び付くが、孝標女が祐子に仕えたのはこのような時代であり、あくまで相対的にはあるが、権威をアピールする必要性が薄い状況にあったのだろう。これが、『更級日記』から主家賛美が一貫して欠如する所以の一つとして考えられる。『栄花物語』や『下野集』のような主家賛美の作品が依然として存在する一方、新たな時代状況の中で、『更級日記』のような主家に接近する側面を確かに持ちながら、それを賛美する必要性の薄い日記が生まれたのではないだろうか。

また、『更級日記』の宮仕え記事からは、その読者層を想定したい。『更級日記』は女房という立場からの記事を持ちながら、主家の対外的アピールをせず、かつそれを必要ともされない作品であったとおぼしい。ここから、『更級日記』は第一に主家や主家に近い人々を読者対象としつつ、頼通を中心とした文化圏内⁽¹⁴⁾の人々をも同質的な読者対象とするような日記だったと考えられる。『更級日記』の読者は孝標女と同様、その主家にあえて視線を向ける必要のない者達だったのでないか⁽¹⁵⁾。換言すれば、『更級日記』は主家の外部へと向けられたアピールではなく、主家の内部へと向けられたような特徴を持つということになる。

以上、『更級日記』の宮仕え記事が女房による通例の記述態度を踏襲する一方で、それを明らかに逸脱していることの原因を孝標女の周辺に求めた。宮仕え記事とは主家との関わりと本来不可分であり、それを徹底して省筆するという態度は、当時の女房としては破格の姿勢だったのでないだろうか。これは日記後半の宮仕え記事に見られる特徴であるが、日記全体の執筆態度、読者意識といった要素とも関わりうる問題だと考えられる。

五 まとめ

本章では、『更級日記』の主家賛美の欠如という問題を、『栄花物語』との比較、『枕草子』『紫式部日記』との比較、同時代の女房家集との比較という二つの視点を通じて確認した上で、それが孝標女や主家を取り巻く時代状況と読者層に起因するのではないかと論じた。従来、『更級日記』と女房的な作品との比較は局所的になされるのみであったが、本章の調査、考察を通じて、その研究をより推し進めることができたのではないだろうか。

『更級日記』は、いわゆる女房日記の性格を持ちながら、それを逸脱した記事を有する。このような特徴を始め、『更級日記』の作品的性格を研究する上では、社会状況の中の孝標女、同時代他作品の中の『更級日記』といった視座が有効になるだろう。

※凡例に挙げた作品以外の引用本文もすべて「新編日本古典文学全集」に拠った。

注

- (1) 和田律子「文化世界確立の構想——祐子内親王家サロンの形成——」『藤原頼通の文化世界と更級日記』新典社、二〇〇八年)、津本信博「乳母としての作者——祐子・禊子内親王——」『更級日記の研究』早稲田大学出版部、一九八二年)、福家俊幸「物語創作が記されない意味」『紫式部日記の表現世界と方法』武蔵野書院、二〇〇六年)、富澤祥子『更級日記』における頼通——「殿」という呼称をめぐる——」『日記文学研究誌』第一六号、二〇一四年六月)。
- (2) 高橋由記「孝標女の出仕記事に関する一考察——『更級日記』と『栄花物語』巻三十四から——」『大妻国文』第三六号、二〇〇五年三月)。

(3) 論文中で引用した『源氏物語』竹河巻以外に、管見では以下の用例を認めている。

- 「故おとどおはしまさましかば、綾、錦にまつはれて生ひ出でたまはまし」(『うつほ物語』俊蔭巻①六八頁)、「故上おはせましかば、何事につけても、かく憂き目見せましや」(『落窪物語』四五頁)「ただ親おはせましかばと」(『源氏物語』玉鬘巻③一〇四頁)「故大臣のおはしまさましかば、戯れにても人には侮られはべらざらまし」(『源氏物語』少女巻③六九頁)「一ところおはせましかば」(『源氏物語』総角巻⑤二四六頁)「あはれ、大将殿おはしまさましかば、いかにめでたき御後見ならまし」(『栄花物語』巻第一二たまのむらぎく②七〇頁)「いで、あはれ、故大臣おはせましかば、いみじき宮と申すとも……」(『夜の寝覚』二四六頁)「あはれ、故宮のおはせましかば」(『ほどほどの懸想』四二八頁)「これにつけても、母のおはせましかば。あはれ、かくは」(『貝合』四五〇頁)
- (4) 久下裕利「雪と月と」(『王朝物語文学の研究』武蔵野書院、二〇一二年)等。
- (5) 大倉比呂志「更級日記の制作状況——祐子内親王との関わりから——」(『早稲田大学高等学院研究年誌』三三、一九八九年)。
- (6) 伊藤守幸『枕草子』と『更級日記』(『日本文学』第四〇巻第一号、一九九一年一月)、山本浩子「更級日記と枕草子」(『解釈学』第一四輯、一九九五年七月)、和田律子「藤原頼通文化世界における『枕草子』の一樣相——『更級日記』を中心に——」(『古代中世文学論考』第二九集、二〇一四年四月)、小谷野純一「更級日記」に於ける「紫式部日記」受容の問題」(『平安文学研究』第六輯、一九七九年六月)、石坂妙子「孝標女の位相——周縁の女房」(『平安日記文芸の研究』新典社、一九九七年)、和田律子「宮仕えの記——物語の男君——」(『藤原頼通の文化世界と更級日記』新典社、二〇〇八年)等。
- (7) 福家俊幸「女房日記的性格と憂愁の叙述の方法」(『紫式部日記の表現世界と方法』武蔵野書院、二〇〇六年)は『紫式部日記』の「憂愁の叙述」や身の程意識が、結果として主家を称揚する表現になると論じる。首肯されるべき論理である。
- (8) 前掲(6)諸論文等。
- (9) 前掲(1)富澤論文。
- (10) 小谷野純一「更級日記出仕記事の内実」(『女流日記への視界——更級日記・讃岐典侍日記をめぐる——』笠間書院、一九九一年)、前掲(6)石坂論文。ちなみに、孝標女の性格をめぐる同趣旨の論稿として、千原美沙子「孝標女と祐子内親王」(『古代と現代』六八号、二〇〇〇年一〇月)がある。
- (11) このような問題を扱った論稿として、久保木秀夫『更級日記』上洛の記の背景——同時代における名所題の流行——(和田律子・久下裕利編『更級日記の新研究——孝標女の世界を考える』新典社、二〇〇四年)、福家俊幸『更級日記』冒頭表現と上洛の記の成立——候名と読者の問題——(『学術研究——人文科学・社会科学編——』第六〇号、二〇一二年二月)等がある。
- (12) 池田亀鑑「解説」(久松潜一編『日本文学史 中古』至文堂、一九五五年)の三三三頁。
- (13) 犬養廉「撰関時代後期の文学潮流——後冷泉朝文壇への証明——」(『国文学解釈と鑑賞』第二八巻第一号、一九六三年一月)。
- (14) 頼通の文芸活動、文芸事業については、和田律子『藤原頼通の文化世界と更級日記』(新典社、二〇〇八年)に詳しい論述がある。

(15) ちなみに三角洋一「文学史上の『更級日記』の位置」(『古文研究シリーズ一五 更級日記』国語展望別冊N。四四、一九八五年五月)では、姪や娘等が『更級』の第一次の読者と推測され、妹尾好信『蜻蛉日記』と『更級日記』の執筆契機考」(『王朝和歌・日記文学試論』新典社、二〇〇三年)では、祐子サロンの読者達の要望により『更級』が書かれたと推測されている。いずれの読者層の想定も興味深い。

第二部

後冷泉朝前後の作者達と読者達

第一章 「左右」の修辞法の展開——紫式部から後冷泉朝へ——

平安時代の仮名作品には、「左右」の語の使用が確認できる。「左右」の語義は基本的に明快であるが、用例の中には漢文由来のやや特殊なものや、「ひだりみぎ」等と仮名表記されるものもあり、注意が必要である。

本章は、その中でも特に紫式部の作品に見られる「左右」の用例と、その次世代にあたる後冷泉朝の諸作品の用例に着目する。それらの用例は「左右」の一語に複数の意味を重ね合わせる等、他の一般的な用例に比べ語の意味に広がりを持たせているように見受けられる。こうした用例は、漢文と仮名文、韻文と散文といった複数の文体の間を交錯するようにして展開したとおぼしい。「左右」の語は、先行研究においてほぼ論じられていないが、「左右」の用法に注目することは、仮名文芸の一樣相の究明として有効であろう。

以下具体的に、「左右」の辞書的な語義、及び諸作品の用例数を押さえた上で、紫式部の著述における「左右」の用例から、後冷泉朝の著述における「左右」の用例へと順に注目し、その特徴を考察したい。考察の過程では関連する漢文や和歌の用例にも適宜触れつつ、「左右」という語が修辞によって複数の意味を担わされていく様相に注目する。

一 「左右」の語義と用例

「左右」は各辞書により、「さいう」「さう」「ひだりみぎ」の三つに適宜分けられ立項される。本論を始めるにあたり、まずはそれらを引用したい。主要な二辞書中から、平安時代以前の用例がある語義に限って引用するが、原則として漢語の「さいう」「さう」と和語の「ひだりみぎ」はほぼ同語と見なして列挙し、用例自体は省略した。

『角川古語大辞典』（角川書店、一九八四年）

《さいう》①ひだりとみぎ。両側。

《さう》①左と右。②人の傍ら。そば。また、傍らにいる人。そば近く仕えている人。③あれやこれや。また、あれやこれやと言いつたこと。否定表現を伴って、その必要もないほど当然だという意味で用いる。「左右なし」「左右に及ばず」の形が多い。

『日本国語大辞典』（小学館、オンライン版、二〇一五年七月三〇日参照）

《さゆう》①ひだりとみぎ。左側と右側。また、左翼と右翼。③（一する）そば。かたわらにあること。また、そば近く仕え補佐すること。または、その人。側近。

《そう》①左と右。さゆう。②そば。かたわら。また、そば近くに仕える者。さゆう。④あれこれ言うこと。とやかく言うこと。また、非難してあれこれ言うこと。

《ひだりみぎ》①左と右。左側と右側。さゆう。そう。②左にしたり右にしたりすること。

あれこれとすること。多く「に」を伴って副詞的に用いる。かれこれと。あれやこれや。とやかく。とやこう。③舞楽で、左舞と右舞。左方の楽と右方の楽。

他の主な古語辞典でも、およそ同様の語義が確認される。平安時代までの語義をまとめると、①「左と右」、②「傍ら・側近」、③「あれやこれや」の三つに大別できるだろう。『類聚名義抄』の「左右」の項にも「トニカクニ 皆去声 タスケ タスク」(天理図書館善本叢書、一九七六年)とあり、「トニカクニ」が③、「タスケ」「タスク」が②に通じる。この②③は派生的な意味であり、その経緯に留意したい。

②「傍ら・側近」は、中国の漢文由来の用法であり、『大漢和辞典』(修訂第二版、大修館書店、一九八九年)の「左右」の項にもこの語義と用例が載る。本朝では『日本書紀』にも同様の用例が確認できる。

③「あれやこれや」は、中国の用例に確認できず、本朝に用法の起源があるとおぼしい。『日本国語大辞典』の「そう」の項の語誌に指摘される通り、『万葉集』では「左右将為カモカクモセム」(三九九)等と、「左右」に「どうにもこうにも」というような意味になる訓が複数あてられている。これらからは、本朝における「左右」の語と「あれやこれや」という派生的意味との繋がりがうかがえるのではないだろうか。平安中期になると、『小右記』の「但至于召上事只在勅定、左右難定申」(長徳三年(九九七)四月五日条)や、『御堂関白記』の「今日随定、後日可左右云」(寛弘三年(一〇〇六)正月一六日条)のように、漢文日記にもこの語義とおぼしい用例が散見される。

このように、「左右」には異なる由来の派生的意味が併存している。これらが文芸作品においてどのような修辭をなしているのか、各用例を調査する上で留意したい。

では、後冷泉朝以前の仮名作品における「左右」の用例を概観する。「左右」「さう」「ひだりみぎ」等、表記の異なるものを全てあわせてカウントし、先に示した①②③の意味に分けると、次頁の表3のようになる。用例の調査にあたっては、小学館の新編日本古典文学全集と角川書店の新編国歌大観の本文を用い、各語彙索引類と検索データベースを併用した。なお、「左右」の用例が確認できなかった『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『和泉式部日記』、並びに『万葉集』や勅撰集等の諸歌集は表から除外した。

表3 仮名作品における「左右」の用例数

	① 左と 右	② 傍ら 側近	③ あれや これや	総数
大和物語	1	0	0	1
かげろふ日記	1	0	0	1
うつほ物語	48	0	1	49
落窪物語	1	0	0	1
枕草子	8	0	0	8
源氏物語	18	0	※4	21
紫式部日記	3	1	0	4
更級日記	2	※2	0	2
浜松中納言物語	1	1	0	2
夜の寝覚	0	1	0	1
狭衣物語	2	0	0	2
栄花物語	39	0	1	40
源順馬名歌合	1	0	0	1
赤染衛門集	1	0	0	1
東宮学士義忠歌合	1	0	0	1

※二つの語義を併せ持つと判断した用例は、複数回カウントした。

語義的な内分けは①「左と右」が圧倒的に多く、『大和物語』の「女の墓をばなかにて、左
右になむ、男の墓ども今もあなる」(三七〇頁)等の物の両端の意や、『うつほ物語』(以下『う
つほ』と略す)俊蔭卷の「左、右の大将、御琴ども合はせて……」(①二一八頁)等の官職の左
右が挙げられる。

派生的な語義の用例は、『うつほ』祭の使卷の「いまだ左右の念に預からず」(①四八八・四
八九頁)等が③「あれやこれや」の意としてわずかに確認できる。このような状況の中、『源
氏物語』『紫式部日記』等の特殊な数例が本章の対象とする修辭的な「左右」であり、節を
改めて詳しく論じたい。なお関連する用例として、「左も右も」という語句も五例確認でき
たが、全て次節以降で引用するため、右の表からは割愛した。

二 紫式部の「左右」の修辭法

紫式部は著述において、従来の一般的な「左右」の用い方をする一方で、いくつかの用例
では複数の意味を一つの「左右」に重ね合わせるといふ手法を取っているように見受けられ
る。そしてこのような用例は、それぞれが用いられている箇所の内容と密接に関わる問題を
はらむようであり、個々の検討を要すると考えられる。以下、紫式部の用例の中で修辭的な
用法が確認できる『源氏物語』(以下『源氏』と略す)の四例と『紫式部日記』の一例に絞
り、順に検討したい。なお、「左右」について作品成立当時の表記、発音に遡ることは困難
であるが、引用に際して「左右」の箇所は本章末尾に示した底本の表記をそれぞれ用い、そ
の参考とした。

まずは、『源氏』空蟬卷の小君の用例を検討する。

A 小君を御前に臥せて、よろづに恨み、かつは語らひたまふ。(中略) 姉君待ちつけていみじくのたまふ。「あさましかりしに、とかう紛らはしても、人の思ひけむこと避りどころなきに、いとなむわりなき。いとかう心幼きをかつはいかに思ほすらん」とて、恥づかしめたまふ。ひだりみぎに苦しく思へど、かの御手習とり出でたり。(①一三〇頁)

右の場面は、空蟬弟である小君が、光源氏からは「よろづに恨まれ、空蟬からは「恥づかしめ」られ、「ひだりみぎに苦しく思」うという場面である。この表現は、「あれやこれや」という意味と、光源氏と空蟬の二者の板挟みにあっているという意味と、二つの意味が含まれていると考えられる。この、「左右」に二つの意味を重ね合わせるという技法は『源氏』以前には見出されず、紫式部により拓かれたものであるとおぼしい。ネガティブな状況に「左右」の語が副詞的に用いられる場面は、以後の紫式部の用例にも複数認められるため、その点にも留意したい。

つぎに、『源氏』須磨巻の和歌の用例を検討する。

B その夜、上のいとなつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも恋しく思ひ出できこえたまひて、「恩賜の御衣は今此に在り」と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身はなたず、かたはらに置きたまへり。

うしとのみひとへにもは思ほえてひだりみぎにもぬるる袖かな (②二〇三頁)

右の和歌は、須磨に蟄居している光源氏が、朱雀帝を悲喜こもこもに思い出した折のものである。下の句「ひだりみぎにもぬるる袖かな」は、左右の袖の意と、「あれやこれや」の感情によって落涙する意が含まれている。

このBの「左右」について久富木原玲氏は、つぎの赤染衛門の一首と、『万葉集』の二首を参考として挙げる⁽¹⁾。

1 行く道のひだりみぎなるすまひ草かたわけてこそとるべかりけれ

『赤染衛門集』五六六・ものへ詣づる道に、すまひ草の花のいと多かるを、仏に奉らんと言へば、

わがをらんとあらそふを見て

2 不相念人乎也本名白細之袖漬左右二哭耳四泣裳

アヒオモハヌヒトヲヤモトナシロタヘノソデヒツマデニネノミシナクモ

『万葉集』巻四・六一四

3 吾妹子之吾呼送跡白細布乃袂漬左右二哭四所念

ワギモコガワレヲオクルトシロタヘノソデヒツマデニナキシオモホユ

『万葉集』巻一・二五二八

久富木原氏は、紫式部の時代に「左右」の歌句が稀なことを指摘し、右の『万葉集』二首の「左右／マデ」という助詞が、当時あるいは「左右の袖を濡らした」と訓ぜられることがあったかもしれないと述べる。可能性の指摘として示唆に富むだろう。

ただ、稿者は紫式部の「左右」を考える上では、直接交流のあった赤染衛門の存在や、彼女の「すまい草」の歌における「左右」が、道の左右の意に相撲の左右の意を響かせていることの方に注目したい⁽²⁾。

つぎの『為信集』の歌も同様である。

4 から衣ひだりもみぎもぬらすらいまかたそではたれがためにぞ

『為信集』書陵部枅形本・二七・返し

二句は「ひだりもみぎも」であり、解釈が難解な歌であるが、左右の袖がそれぞれ誰かのために濡れることを指摘した恋歌である。これは左右の袖が涙で濡れるという点でBの光源氏の歌と似通う。笹川氏が詳しく論じるように、『為信集』の為信は紫式部の祖父とも目されており、直接的な関係を想定しうる間柄である³⁾。

紫式部は赤染衛門と交流があり、『為信集』の為信とも交流があった可能性がある。先後関係の推定は困難だが、二者の和歌とBの光源氏の和歌との同時代的な影響関係の問題は、留意されるべきであろう。赤染衛門の技法や『為信集』の発想は、紫式部の「左右」の修辞法について影響を与えた、あるいは影響を受けた可能性が想定される。

つぎに、『源氏』真木柱巻の鬚黒の用例を検討する。

C 「なほこのごろばかり。心のほどを知らで、とかく人の言ひなし、大臣たちもひだり右に聞き思さんことを憚りてなん、とだえあらむはいとほしき。思ひしづめてなほ見はてたまへ。……」
(③二六三頁)

これは鬚黒から北の方への台詞であり、大臣達が「ひだり右に聞き思」うことを憚って、仕方なく新婚の玉鬘のもとへ行くのだという外出の言い訳である。この大臣達とは、玉鬘の養父である太政大臣光源氏と実父である内大臣(元頭中将)を指す。玉鬘の結婚に対し、巻の冒頭から二大臣の見解が対となって述べられていることから、これは明らかである。この「左右」も、「あれやこれや」という意味と、光源氏と内大臣という二者の意味が含まれているといえよう。

そしてさらに、この二者が大臣である点も言葉遊びになっている。左大臣と右大臣を合わせて「左右大臣」と呼称することは当時一般的であり、物語でも「左右の大臣」(『うつほ』吹上下巻①五二二頁)、「左右大臣」(『源氏』行幸巻③二九〇頁)等の用例が確認できる。光源氏と内大臣は左右大臣ではないが、Cの「大臣たちもひだり右に聞き思さん」という表現は、左右の官職である大臣を意識したものである。鬚黒は通例の男君とは違い、愚直で戯画的な人物として描かれる傾向にあるが、彼の言い訳の台詞においてこのような修辞が用いられることは、その諧謔性を助長しているといえる。

ちなみに、のちの『無名草子』の玉鬘評には、「世にとりてとりどりにおはする大臣たち二人ながら左右の親にて、いづれもおろかならず数まへられたるほど、いとあらまほしきを……」(二九四頁)とある。玉鬘の恵まれた境遇の説明として鬚黒の台詞が用いられていることは明らかであり、Cの「左右」の表現は、一方では玉鬘の境遇をいみじくも言い表したものであるといえよう。

つぎに、『源氏』若菜上巻の夕霧の用例を検討する。

D……女君の、今はとうちとけて頼みたまへるを、(中略)なのめならず、やむことなき方にかかづらひなば、何ごとも思ふままならで、ひだりみぎに安からずは、わが身も苦しくこそはあらめ……
(④三八頁)

これは女三の宮降嫁問題が出来た際の夕霧の心中思惟であり、現在は妻雲居雁と安定した関係にあり、女三の宮にかかざらつては苦難するだろうと思いを冷ますものである。この「左右」は「あれやこれや」の意味と、女三の宮と雲居雁という二者の意味が含まれる。

夕霧は「まめ人」と称される実直な人物であり、二人の女性との関係を忌避する姿勢は相応しいものといえる。しかし、のちの匂兵部卿巻でこの夕霧が、雲居雁と落葉の宮と「夜ごと」に十五日づつ、うるはしう通ひ住」(⑤二〇頁)んでいることも見逃せないだろう。夕霧は実直さゆえに一度は思い冷ました二人の女性関係を、のちに実直さゆえに一五日ずつ通い住むのである。この匂兵部卿巻からDの夕霧の心中思惟を捉え直すとき、「まめ人」としての諧謔性が認められるのではないか。あるいは、作者紫式部の長編的構想として、実直な夕霧が二人の妻を持つというアイデアが、長らく念頭にあったのかもしれない。

最後に作品も用法も変わるが、『紫式部日記』の道長と親王達の用例を検討する。

E「年ごろ、宮のすさまじげにて、一ところおはしますを、さうざうしく見たてまつりしに、かくむつかしきまで、ひだりみぎに見たてまつるこそうれしけれ」と、おほとのもりたる宮たちを、ひきあけつつ見たてまつりたまふ。
(二二七頁)

これは酔った道長が、外孫である敦成・敦良両親王の姿を見て満悦するという場面である。「ひだりみぎ」には二人の親王という意味があることは確実であるが、和漢の史書の先例を調べると、他に「身近に」の意味も認められるのではないかと推測される。

例えば、『魏書』明帝紀には「明皇帝諱叡、字元仲、文帝太子也、生而太祖愛之常令在左右」²とあり、明帝が幼少時、父帝に愛され常に「左右」、すなわち身近に置かれたとされる。『漢書』成帝紀にも「孝成皇帝元帝太子也(中略)帝愛之字曰太孫常置左右」³年三歳……」と同様の記述がある。

本朝の『日本書紀』においても、垂仁天皇の幼少期の「天皇愛之、引置左右」⁴(①二九八頁)や、誉津別命の「天皇愛之、常在左右」⁵(①三〇〇頁)、欽明天皇の「天皇愛之、常置左右」⁶(②三五六頁)と同様の例が見られる。これらの「左右」も、天皇の身近に置かれるという表現であり、父帝の寵愛を表している⁴。

これらの用例から、史書において父帝の寵愛を受ける慣用的な表現として、身近という意味で「左右」が用いられていたことがわかる。『紫式部日記』は状況こそ違うが、こうした先例を踏まえて両親王へ祝意を持たせ、「左右」の表現を用いたのではないかと考えられる。Eの記事からは、道長が実際に「左右」の発言をした可能性と、記録者である紫式部が「左右」の脚色をした可能性と、二通りのケースが考えられるが、いずれにせよ紫式部は和漢の歴史に通じていたとおぼしく⁵、この表現を意識的に記述したと推察できる。

また、「かくむつかしきまで、ひだりみぎに」という表現は、満悦している道長の冗談であるが、所狭いほどや、煩わしいほどといったニュアンスは、身近であるという意味とも連続しているのだろう。

以上、『源氏』の四例と『紫式部日記』の一例を検討した。いずれも二つの意味を含むように用いられているが、大きく三つに分類することができる。第一に、A・C・Dのグループは、具体的な人物を対象としつつ、ストーリー上諧謔的ないしはネガティブな描写がなされている。第二に、Bは和歌中の用例であり、同時代の和歌との影響関係がある。第三に、Eは他と違い漢文的な用法を踏まえ、幼い両親王へ祝意を向けるように描かれている。紫式部が仮名文において、「左右」という語に対し異なる複数の修辭法を用いていることがわかるであろう。

これらの「左右」の技法は、パターンとして紫式部の次世代である後冷泉朝の文芸作品にその影響を認めることができる。次節では次世代の用例群をめぐり、さらに「左右」の修辭を検討したい。

三 後冷泉朝の「左右」の修辭法

本節では紫式部から強い影響を受けた作品、『更級日記』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』（以下それぞれ『更級』『浜松』『寝覚』と略す）と、散逸物語である『袖濡らす』を中心に扱う。これらの作品は先の表に示した通り、「左右」の用例数が僅少であるが、そのほぼ全てが修辭的に用いられており注目される。

まず、菅原孝標女作と伝わる『更級』の、遺児達の用例を検討する。

F 母などは皆亡くなりたる方にあるに、形見にとまりたる幼き人々を左右に臥せたるに、あれたる板屋のひまより月のもり来て、児の顔にあたりたるが、いとゆゆしくおぼゆれば、袖をうちおほひて、いま一人をもかき寄せて、思ふぞいみじきや。(三〇五頁)

G 母亡くなりにし姪どもも、生まれしよりひとつにて、夜はひだりみぎに臥し起きするも、あはれに思ひ出でられなどして、心もそらにながめ暮らさる。立ち聞き、かいまむけはひして、いとみじくものつつまし。(三二六頁)

Fは姉の死に際し、作者である孝標女が形見の遺児達を「左右に」寝かせ添い臥すという場面である。一人は袖で覆い、もう一人はかき寄せているので、遺児は二人だということがわかる。Gは孝標女が慣れない出仕の折、かつて姉の遺児達と「ひだりみぎに」添い寝していたことを思い出すという場面である。

この反復される「左右」はいずれも、二人の幼児を左側と右側に寝かせるという意味の他に、「身近に」という意味も含まれているのではないだろうか。添い臥しという行為が近接するものであるのに加え、二人の幼児に「左右」が使用される例は稀であり、先例としては前節のE『紫式部日記』中の「おほとのごも」っていた両親王が想起されるだろう。孝標女は日記中で『源氏』を耽読しているが、彼女は『紫式部日記』も読んでいた可能性が高く、6、

このような受容は十分ありえたと推察される。ただ、『紫式部日記』における史書に依拠した祝意は、『更級』では踏まえられていない。

また、ここで注目される用例として、『三宝絵』須太那太子の二児の場面もある。

「二人ノ子吾ヲ棄テ、誰ニ付テ去リヌルゾ。伏ス時モ居ル時モ常ニ左リ右ニ有テ、吾ガ手ニ菓子モノ有レバ悦ビテ来リ乞ヒ……」
(五七頁)

これは須太那太子の二児が失踪した際、妻が常に身近にいた彼等を思い、嘆き悲しむ場面である。「常ニ左リ右ニ有テ」は、前節で見た史書のように「身近に」という意味であろうが、解釈の可能性として、「二人ノ子」の意味も包含していると見なしうる表現である⁷。

孝標女が『三宝絵』のこの箇所を踏まえているかは推測の域を出ないが、母子の離別と悲哀という雰囲気、二児とともに常に起居するという描写は、右の『更級』の二場面と似通っている。『紫式部日記』と併せこの『三宝絵』も、あるいは『更級』の「左右」に影響を与えた先例かもしれない。

つぎに同様の例として、『浜松』巻二の二児の場面を検討する。

H これ（引用者注——若君）をわがもとにて、姫君とひだりみぎに遊ばせて見まほしう、あかずおぼいたれど、なほ思ふやうありて、籠め置きたてまつり給へり。（一八五頁）

これは主人公の中納言が、別邸に住む若君を自邸に引き取り、児姫君とともに「ひだりみぎに」遊ばせたいと望む場面である。若君は唐后との密通により儲けた男児であり、尼姫君との子である児姫君と違い、おおよけにできない存在であった。

『浜松』は、『更級』仮名奥書や作中の内部的徴候から孝標女の作と推定されており、このHの表現についても『更級』のF・Gとの相関性を検討されるべきであろう。すなわちこの「ひだりみぎ」にも、「身近に」という意味と、若君と児姫君という意味が含まれているのではないだろうか。これは添い臥してはいるが、「わがもとにて」「ひだりみぎに遊ばせ」という表現、及び自邸に引き取りたいというその願望から、「身近に」というニュアンスが読み取れる。ここまでくると『紫式部日記』の両親の面影は薄くなるが、二児をめぐる「左右」の用例として、一連の繋がりが想定される⁸。

つぎに、『寢覚』巻四の、寢覚の上の継子達の用例を検討する。

I 「さばかりおほけなき思ひ絶ゆべくもあらぬ宰相中将を、片端に置きて、はらからとも言はじ、大納言も、思ふままに、くまなき心ある人なり、かかる人々を左右に置きたまひて、我はかすかに夜を明かいたまはむこそ、うしろめたけれ。」（三五九・三六〇頁）

右は、男主人公である内大臣が、二人の婿の存在を危惧する台詞である。この時、寢覚の上のもとには故老関白の遺した二人の継娘がおり、それぞれ宰相中将と大納言を婿取っていた。内大臣は、二人の婿が同邸に住む寢覚の上に懸想するだろうと心配するのである。

この「左右」の用例も、「身近に」という意味と、宰相中将と大納言という意味と、二つの意味を含んでいるように解釈できる。「左右に置」くという表現や、距離の近さを危惧することからは、先ほどと同様「身近に」というニュアンスが読み取れる。このIは、ネガテ

イブな状況や色恋にまつわる煩わしさという点で『源氏』のA・C・Dとも共通するが、「左右」に「あれやこれや」のニュアンスは認めづらい。

『寢覚』も『更級』仮名奥書に孝標女の作と伝わっており、F・G・H・Iの三作品の用例群からは、あるいは孝標女は「左右」の用法として、「身近に」という意味を多用する書き手であったかとも考えられるのではないだろうか。その場合、「あれやこれや」の意味を多用した紫式部とは、対照的な書き振りであるといえよう。

最後に、散逸物語である『袖濡らす』について検討したい。『袖濡らす』は『物語二百番歌合』に一〇首、『風葉和歌集』に一五首採られており、中編クラスの分量であったと推測される。『狭衣物語』に『袖濡らす』といふ物語の承香殿女御（巻三②一八一頁）、「法音寺とかや、袖濡らす宰相の通ひたまひし所（巻四②三七六頁）とあるため、『狭衣』以前の成立であり、平安後期から鎌倉にかけて知名度のあった作品かと考えられる。

物語の内容としては、男主人公の宰相中将と女主人公の中納言の君、他複数の女君等が登場し、最終的に宰相中将は太政大臣となり、中納言の君は准后となることが現存資料から確認できる。松尾聰氏等により具体的な復元研究もなされている⁹⁾。

『袖濡らす』における「左右」との関連箇所は、その物語名自体である。当時の物語名は長短等のバリエーションが頻繁に発生するものであり、『袖濡らす』も『物語二百番歌合』の後百番巻頭では「左毛右毛袖湿」と記載され、同六四番右の詠者名「関白」には注記として「左も右も袖ぬらす宰相中将是也」とある¹⁰⁾。ここから、『袖濡らす』の物語名は「左も右も袖濡らす」という和歌的表現の一部であることがわかる。

この「左も右も袖濡らす」という表現の典拠は、松尾氏等が指摘する通り、本章二節で引用したB『源氏』須磨巻の「うしとのみひとへにもは思ほえてひだりみぎにもぬる袖かな」であるかと考えられる。松尾氏は二人の女性のために流す涙という可能性や、一人の女性のために流す恋慕や恨みの涙という可能性を指摘しているが、当時の物語名の傾向として、色恋の涙という線ではほぼ間違いないだろう。そして「左も右も」に対する氏の解釈も妥当であり、やはり左右の袖という意味に加え、「あれやこれや」という意味、または特定の二人の恋人という意味等、複数の意味が含まれていると考えられる¹¹⁾。

ちなみに本章二節に引用した『為信集』二七番の「から衣ひだりもみぎもぬらすらいまかたそではたれがためにぞ」はマイナーであるが、『袖濡らす』に関しては『源氏』と同程度に内容の重なりが認められる。この歌は典拠とは考えられないまでも、何らかの経緯で『袖濡らす』作者の目に触れていたかもしれない¹²⁾。

また、この『袖濡らす』の「左も右も」という七音の表現に関しては、成立時期とおぼしい後冷泉朝において、つぎのような相関性を有する和歌の用例も確認できる。

5 常夏はいつともわかぬ花なればひだりも右もひとしとぞ見る

『或所歌合天喜四年四月』一一・六番判詞

6 なつかしき花橘の香にしなければ左も右もわかずこそしめ

（同一八・九番判詞）

7 あやめぐさひだりもみぎもかたひけばいとまもあらじ君がみごもり

『皇后宮歌合治暦二年』一六・しもつけ・これをききて)

いずれも歌合における詠作であるが、5・6は判者「式部大夫」が判詞に代えて詠んだ和歌であり、7は歌合の果てた後、人々に菖蒲が配られたことを聞いた下野が詠んだ和歌である。いずれも歌合のつがいである「左右」を「左も右も」と詠んでいる。成立の先後関係という問題は残るが、当時「左も右も」という歌句が局所的に流行した可能性が考えられる。この時代の文芸圏において、歌合と物語創作はともに高貴な女性のもとで盛んに行われており、これらは近しい位置にあるといえよう。

以上、後冷泉朝における「左右」の用法を、紫式部からの影響という視点から検討した。『更級』『浜松』『寝覚』はいずれも「身近に」の意と特定の二者の意を重ねて用いている。特に『更級』『浜松』は『紫式部日記』と同じく兄弟の二児を指しており、対する『寝覚』は『源氏』の用例と状況が似通っている。『袖濡らす』は和歌的表現の系譜に連なり、左右の袖の意と「あれやこれや」ないしは特定の二者の意とが重ねられていたと推察され、『源氏』の作中歌からの影響と、同時代の歌合関連歌との相関性がともに注目される。

四 まとめ

本章では「左右」の用法をめぐり、具体例の精査をもってその修辭を論じた。「左右」は基本的に語義の明快な語であるが、『源氏』をはじめ注目した用例群からは、場面に即して二種類の意味を重ね合わせる修辭法が複数看取された。

紫式部の著述においては三つのパターンが確認でき、次世代の後冷泉朝の著述においてはおよそ二つのパターンが確認できた。この二世代は約五〇年隔たっているが、「左右」の修辭はおよそ継承されているといえるのではないだろうか。もちろん、『源氏』中の本文表現や引歌表現等が、のちの作品に引用される例は無数に存在する。しかし、「左右」の修辭のように、漢文の影響や和歌との関わり等、複数の異なる系統が仮名散文において混在するケースは、稀に見るものといえるだろう。

「左右」に近似する例としては、「東西」「あふささるさ」の二語が挙げられるものの、「東西」は『うつほ』蔵開下巻の「東西知らずなむ」(②五三二頁)、『うつほ』国譲上巻の「東西知らず侍りて」(③一〇八頁)、『枕草子』の「東西せさせず乞ひ取りて」(一三七頁)の三例が数えられるのみであり、「あふささるさ」は散文作品では『源氏』帚木巻「とあればかかり、あふささるさにて」(①六二頁)の一例のみである。これらと比較しても、「左右」の修辭は、継承や変遷といった側面が特に強いと考えられる。

また、「左右」の修辭は、紫式部をルーツとし、孝標女をそれと比較するような書き手の問題として捉えられる一方で、紫式部や赤染衛門の交流、後冷泉朝における女房文化圏内の流行というような、書き手の交友圏の問題としても捉えられるものである。関連する先行研究として、一条朝については中西智子氏の論稿、後冷泉朝については久下裕利氏、和田律子氏の論稿等が挙げられる¹³⁾。

従来、「左右」の語はほとんど論じられてこなかったが、平安時代の仮名作品においては、当時の文芸活動の一樣相を認めうるものであった。ちなみにこの後、中世以降の「左右」の用例からは、「あれやこれや」から派生したと考えられる語義、「とかくの指図。指令。命令」「善悪、良否、是非などの裁定。あれかこれかの決定」(『日本国語大辞典』「左右」項)等を確認できるようになる。後世においても、このような語義の拡大があることについて、最後に付言しておく。

※「左右」とそれに類する部分を除いて、凡例で挙げた作品以外の引用本文も基本的に「新編日本古典文学全集」に拠った。また『三宝絵』は「新日本古典文学大系」に、『魏書』『漢書』は「和刻本正史」に、歌合は『新編国歌大観』にそれぞれ拠った。

※「左右」の表記については、『源氏物語』空蝉・須磨・真木柱巻は大島本を、『源氏物語』若菜上巻は明融本を、『紫式部日記』は黒川本を、『更級日記』は御物本を、『浜松中納言物語』は榊原家旧蔵本を、『夜の寢覚』は松平文庫本をそれぞれ用いた。

注

- (1)久富木原玲「歌人としての紫式部——逸脱する源氏物語作中歌——」(『源氏物語研究集成』第一巻、風間書房、二〇〇一年一月)。
- (2)ちなみに当時の歌合における「左右」の用例は、「左右くらぶるこまのあしはやみわがたにうつかちぶちをみよ」(『源順馬名歌合(二十巻本)』四)、「ひだりみぎひくてもたゆくたつといはづかたへかはよるべかるらん」(『東宮学土義忠歌合』八)である。
- (3)笹川博司『為信集と源氏物語——校本・注釈・研究——』(風間書房、二〇一〇年)。なお、笹川氏もこの左右の袖の和歌について、為信と紫式部間の影響関係を指摘している。
- (4)ちなみに『古事記』には、小楯連が二人の王子を見つける場面に「其二柱王子坐左右膝上」(三五六頁)とある。
- (5)浅尾広良(紫式部)と『日本紀』——呼び起こされる歴史意識——(『紫式部』と王朝文芸の表現史』森話社、二〇一二年)等。
- (6)小谷野純「『更級日記』に於ける「紫式部日記」受容の問題——上洛後の記の世界をめぐる——」(『平安文学研究』第六一輯、一九七九年六月)、和田律子「宮仕への記——物語の男君——」(『藤原頼通の文化世界と更級日記』新典社、二〇〇八年)等。
- (7)ちなみに出典である『六度集経』須太孛経にも、「吾れ坐すと兒立ちて各左右に在り、身に塵有るを觀て競ひて共に拂い拭ふ」(『國釋一切経』本縁部六、大東出版社、一九三二年)とある。
- (8)ちなみに『浜松』のもう一例は「さうの薬屋」(巻一・五八頁)であり、修辭的でないため考察対象から外した。
- (9)松尾聰「袖ぬらす宰相中将の物語」(『平安時代物語の研究』改訂増補版、武蔵野書院、一九六三年)、小木喬「袖ぬらす」(『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』笠間書院、一九七三年)、樋口芳麻呂『源

氏物語』と散逸物語——『左も右も袖ぬらす』物語を中心に——」（寺本直彦編『源氏物語』とその受容』右文書院、一九八四年）。

(10)前掲(9)松尾論文に指摘があるが、『明月記』貞永二年（一二三三）三月二〇日条にも「左右袖湿」（国書刊行会、一九七〇年）とある。

(11)ちなみにのちの『とりかへばや物語』では、「左右の袖を濡らしわびつつは」（二七〇頁）、「うれしういみじきに左右の袖濡るる心地して」（二九八頁）、「左右にて生ほしたてまつりたまふ」（五一頁）と、「左右」が袖に二例、幼児に一例用いられており、本章で論じた修辭法の積極的な撰取を見て取れる。

(12)前掲(3)笹川著書も、『為信集』、『源氏』、『袖濡らす』の左右の袖の表現を、併せて検討している。

(13)中西智子「紫式部と伊勢大輔の贈答歌における『源氏物語』引用——「作り手」圏内の記憶と連帯——」（『日本文学』第六一卷第一二号、二〇一二年二月）、久下裕利「雪と月と」（『王朝物語文学の研究』武蔵野書院、二〇一二年）、和田律子「藤原頼通文化世界における『枕草子』撰取の二様相——『更級日記』を中心に——」（『古代中世文学論考』第二九集、二〇一四年四月）等。

第二章 『狭衣物語』における源氏の宮付の女房達

——男君への応対を中心に——

つくり物語には、女房達のさまざまな活動が描かれる。活動内容は、客人の取り次ぎをしたり、密通の手引きをしたり、主人に代わって不平を述べたりといくつかのパターンに分けられるが、『狭衣物語』（以下『狭衣』と略す）の齋院には、複数の女房が客人狭衣に対して、からかうような応対をする場面が集中して見られる。

この、女房集団が男君を客人として遇するという行為は、『枕草子』の男性が登場する諸記事や、『紫式部日記』冒頭の藤原頼通の記事等、平安文学、特に女房日記においてはなじみ深いものである。しかしつくり物語においては、密通の手引きをはじめとした密談の場面や、女主人の代弁めいた不平の場面等に比べ、そこまで多くないようである。のちに詳しく確認するが、例としては『源氏物語』（以下『源氏』と略す）蜻蛉巻の、薫と弁のおもと達のやりとり等が挙げられ、基本的に色めいた内容が多いようである。

女房達は物語において脇役や端役といった立場に置かれることがほとんどであるが、いわゆる語り手や生成者といった存在にも相当しうる者達である¹⁾。彼女達の活動は、研究上より注視されるべきだろう。

本章は、『狭衣』における女房の応対場面に着目する。源氏の宮付の女房達が狭衣と応対する場面を中心に引き上げ、その特質を論じながら新たな作品理解に至ることを目的とする。

管見の限り、『狭衣』の当該場面は七例あり、『源氏』の七例に劣らない。その上、『狭衣』の主要な場面は源氏の宮付の女房達に集中して見られるという特徴がある。ここから源氏の宮付の女房達の特異性がまず予想される。この女房集団の問題は、齋院となる源氏の宮と、実在の六条齋院禊子内親王との関係と関わりうるのではないか。六条齋院禊子に仕えた女房「宣旨」は、『狭衣』作者と目されている²⁾。『狭衣』における源氏の宮付の女房達の問題を、男君に應對する場面を中心に、作品の生成・享受圏という視点も含めながら考えたい。

以下、まず『源氏』中の男君に應對する女房達を概観した上で、それらとの比較も含め『狭衣』に登場する源氏の宮付の「宣旨」「女別当」「新少将」等を詳しく見ていく。この際、彼女達の伺候名が同時代の実在した女房といかに関わるかという問題にも力点を置く。最後にまとめとして、作品内での源氏の宮付の女房達が、どのように特殊な位置にあるのかという点を論じたい。

一 『源氏物語』の男君に應對する女房達

本節では『狭衣』に多大な影響を与えた先行作品である『源氏』の女房達のうち、客人の男君と應對する者達を概観する。密かに手引き等をする女房や、帚木卷等に見える口々に光

源氏の噂をする女房①九四頁)、朝顔巻等の主人との取り次ぎ中に口を挟む女房②四七四頁)等は除外した。原則として「複数」の女房が「客人」の男君に應對し、実際に言葉を交わす場面に対象を絞った。このような挨拶的な應對は、女房の活動として一つのパターンに数えることができるだろうし、次節の『狭衣』の特質を考える上でも参考となる。

まずは正編の例を挙げる。

A花宴巻 簾中をのぞいた光源氏を、女房がたしなめる。

「……蔭にも隠させたまはめ」とて、妻戸の御簾をひき着たまへば、「あな、わづらはし。よからぬ人こそ、やむごとなきゆかりはかこちはべるなれ」と言ふ気色を見たまふに、重々しうはあらねど、おしなべての若人どもにはあらず、あてにをかしきはひしるし。(中略)「扇を取られてからきめを見る」と、うちおほどけたる声に言ひなして、寄りゐたまへり。「あやしくも、さま変へける高麗人かな」と答ふるは、心知らぬにやあらん。(①三六五・三六六頁)

B初音巻 光源氏のからかいに、紫の上の女房達が恥じらう。

……大臣の君さしのぞきたまへれば、懐手ひきなほしつ、「いとはしたなきわざかな」とわびあへり。「いとしたたかななるみづからの祝言どもかな。(中略)とうち笑ひたまへる御ありさまを、年のはじめの榮えに見たてまつる。我はと思ひあがれる中将の君ぞ、「かねてぞ見ゆるなどこそ、鏡の影にも語らひはべりつれ。私の祈りは何ばかりのことをか」など聞こゆ。(③一四四頁)

C野分巻 夕霧の挨拶に、明石の姫君の女房達が応じる。

風さわぎむら雲まがふ夕べにもわするる間なく忘られぬ君

吹き乱りたる刈萱につけたまへれば、人々、「交野の少将は、紙の色にこそとのへはべりけれ」と聞こゆ。「さばかりの色も思ひわかざりけりや。いづこの野辺のほとりの花」など、かやうの人々にも、言少なに見えて、心解くべくももてなさず。(③二八三頁)

Aは臈月夜を探す光源氏が簾中をのぞく場面であり、女房がそれをたしなめている。女房達が「あてにをかしき」様態である描写に加え、扇の話題に対してある事情を知らない女房が「あやしくも……」と応じている。Bは正月に互いを言祝ぎあう女房達を光源氏がからかう場面である。「わびあへり」と複数の女房が困惑するのに加え、召人である中将の君がからかいを切り返している。Cは見舞いの歌を送った夕霧に対し、明石の姫君付の女房達が刈萱と紙をからかう場面である。いずれも程度の差はあるが、色めいた雰囲気を有しているといえよう。そして正編の長さを考えると、場面数は少ないといえるだろう。

つぎに続編だが、薫に應對する女房達はそれなりに登場するようになる。

D竹河巻 大君(冷泉院女御)付の女房達の一人が、薫をなぐさめる。

「闇はあやなきを、月映えはいますこし心ことなりとさだめきこえし」などすかして、内より、

竹河のその夜のことは思ひ出づやしのぶばかりのふしはなけれど

と言ふ。はかなきことなれど、涙ぐまるるもげにいと浅くはおぼえぬことなりけりと、みづから思ひ知らる。
(⑤九八頁)

E 蜻蛉巻 女一の宮付の女房達、薫に交際をうながす。

「おほかたは参りながら、この御方の見参に入ることの難くはべれば、いとおぼえなく翁びはてにたる心地しはべるを、今よりはと思ひおこしはべりてなん。ありつかずと若き人どもぞ思ふらんかし」と、甥の君達の方を見やりたまふ。「今よりならはせたまふこそ、げに若くならせたまふならめ」など、はかなきことを言ふ人々のけはひも、あやしうみやびかにかしき御方のありさまにぞある。
(⑥二五五・二五六頁)

F 蜻蛉巻 薫の戯れに、弁のおもとと中将のおもとが応じる。

「……やうやう見知りたまふべかめれば、いとなんうれしき」とのたまへば、いと答へにくくのみ思ふ中に、弁のおもととて馴れたる大人、「そも睦ましく思ひきこゆべきゆゑなき人の、恥ぢきこえはべらぬや。ものはきこそは、なかなかはべるめれ。かならずそのゆゑ尋ねて、うちとけ御覧せらるるにしもはべらねど、かばかりおもなくつくりそめてける身に負はざらんも、かたはらいたくてなむ」と聞こゆれば(中略)

「女郎花みだるる野辺にまじるともつゆのあだ名をわれにかけめや心やすくは思さで」と、ただこの障子にうしろしたる人に見せたまへば、うちみじろぎなどもせず、のどやかに、いととく、

花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露に乱れやはする

と書きたる手、かだかたそばなれどよしづきて、おほかためやすければ、誰ならむと見たまふ。
(⑥二六六〜二六八頁)

G 蜻蛉巻 薫の懸想に、中将のおもとが応じる。

「など、かくねたまし顔に掻き鳴らしたまふ」とのたまふに、なみおどろかるべかめれど、すこしあげたる簾うちおろしなどもせず、起き上がりて、「似るべき兄やははべるべき」と答ふる声、中将のおもととが言ひつるなりけり。
(⑥二七一頁)

Dは、大君(玉鬘女)に対する薫の思慕を推し量った女房が、なぐさめの歌を送る場面、Eは年寄じみていると自嘲する薫に対し、女房が今からでも若々しく交際すればよいと応える場面、F・Gは、薫が宮中で弁のおもとと中将のおもとに戯れかかる場面である。

E以降の蜻蛉巻に関しては、召人の小宰相という女房や、女王でありながら零落した「宮の君」という女房の登場場面とも前後する展開になっている。女房達と薫との関係が重層的に、とりわけ恋をめぐって描かれる場面構成になっているといえよう³⁾。

このように、『源氏』において女房集団、ないしはそのうちの一人が客人に対応する場面は、正続いずれも多いとはいえない。女房の視点から書かれる『枕草子』や『紫式部日記』等との差異がまずうかがわれよう。右の場面を並べて見てみると、いずれも女房と男君の間で懸想や恋の話題を含み持つ応対であることや、正編に比べ続編、それも薫をめぐる場面が多いことがわかる。『源氏』のこれらの場面は、以後の物語にどのような影響を与えたのだろうか。

『浜松中納言物語』を見てみると、唐后付の女房達のうち一人が中納言に返歌する場面(四一頁)や、中宮付の女房達のうち「少将内侍」が主人公に色めいた和歌を送る場面(二七七頁)がある。後者はのちに召人となっていたことが二九〇頁でわかり、内親王降嫁の沙汰止みに関わる女房となる。天喜三年(一〇五五)の物語歌合に提出され、『堤中納言物語』にも収められた『逢坂越えぬ権中納言』には、女房「小宰相」等が根合の準備で主人公に戯れかかる場面がある(四三二頁)。

他に、『夜の寢覚』には中宮付の女房「新少将」が男主人公に懸想される場面(六九頁)がかろうじてあるものの、これは密かになされており、挨拶的な女房集団の応対とは一線を画すといえよう。

このような状況の中、『狭衣』はその分量に比して多くの場面で女房達が狭衣に対応するようである。次節以降、登場人物毎に詳しく確認し、検討を加えたい。

二 『狭衣物語』の源氏の宮付の女房達

『狭衣』には多くの女房が登場するが、その中でも齋院卜定後の源氏の宮付の女房達は、よく狭衣に対応する。源氏の宮は狭衣と兄妹同然に育った女君であり、物語内で理想の存在として造型されている。源氏の宮は、理想的な描かれ方や、齋院に卜定されること、ついに狭衣と結ばれないこと等から、実在の六条齋院禊子内親王モデル説とともに議論されてきた(4)。これは、『狭衣』の作者が禊子家女房「宣旨」であるという定説と、『狭衣』が禊子家周辺で禊子没後に成立しただろうという観点に起因するものでもある。

たしかに源氏の宮に関する議論は『狭衣』の研究上、重要である。ただ、作者や同時代の享受者といった問題を考えるとき、源氏の宮付の女房達に対しても、同様に注意深い検討が必要となるのではないだろうか。源氏の宮付の女房達も、宣旨をめぐる実在の作者圏や、そこでの所属意識や紐帯意識と無関係だとは考えられない。彼女達は、いかに登場人物の女房達と関わるのだろうか。

『狭衣』中で狭衣に対応する女房は、密通の手引き等を除くとごく限られる(5)。母堀川の上付の「中務」という女房が「道の果てなると嘆きし人のありしこそ、ことわりには変らね」(①六七頁)と独り言めかして言う例と、齋院卜定以前の源氏の宮付の「大納言の君」が「賜はせよ。見くらべはべらん」(①二四六頁)と言う例以外は、齋院卜定後の源氏の宮付の女房による四例のみである。以下、齋院源氏の宮付の「宣旨」「女別当」「大人しき人々」「新少将」に加え、語り手の問題を含む「御簾の中の人々」を順に見ていきたい。

①宣旨

宣旨は源氏の宮付の上臈女房である。

H巻三 宣旨、新婚の狭衣をからかう。

「この御猫、しばし預けさせ給へかし。人肌つける春を求むるよりは」とのたまふを、
宣旨といふ人うち笑ひて、「今更は、などてか。人は誰をかは求めさせ給はん。いと大

人しき御扱ひをさへせさせ給ふなるに、猫は所狭う思されぬ」と聞こゆれば、「さらなりや。岩間を潜る水だにも漏るまじければ」とてうち笑ふものから(中略)前なる人々の絵描き散らしたる筆どもの散りたるを、取り給ひて…… (②一三八・一三九頁)

これは、初齋院で源氏の宮の猫を欲しがる狭衣に対し、宣旨という女房が新婚生活をからかう場面である。狭衣はこの時、一品の宮と不本意な結婚をしているが、宣旨に対しては表面上取り繕った返事をしている。

齋院源氏の宮に作者と同名の「宣旨」が仕えていることに関しては、すでに小町谷照彦氏が「作者が洒落っ気で自らを作中に登場させたものか」と注している(6)。この指摘は卓見である。源氏の宮は裸子を意識させる登場人物であるとおぼしく、したがって彼女に仕える宣旨も実在の作者宣旨を意識させる登場人物と考えるべきであろう。

Hの場面は当時の読者達にとっても、なじみ深い作者が登場しているような「洒落っ気」を感じさせるものだったと言えるかもしれない。狭衣の心中は不如意な夫婦関係や源氏の宮思慕により鬱屈としているのだが、宣旨とのやりとりにはそれは反映されておらず、前後の叙述に対して軽妙さが際立っている。

しかし物語における宣旨の登場の意味はそれだけなのだろうか。実は宣旨の登場場面はもう一箇所ある。

I 卷三 本院渡御に見える女別当と宣旨の名前。

やむごとなき人は、女別当、宣旨など、人々同じと、いま四十人、童八人乗るべき車は、透き通りて、隠れなくあるべきよし、簾も上がりて、我も我もと、心を尽したるに、いかばかりめでたからんずらん。 (②一四六・一四七頁)

※宣旨——ナシ(黒川本・承応版本・平出本)

IはHからほどない箇所であるが、源氏の宮が本院に渡る行列の場面であり、女別当と宣旨の名が挙げられている。前後には入念な準備のもと、盛大に催された渡御の様子が描かれる。「宣旨」の名が見えない伝本が三つあるものの、ほとんどの伝本に「宣旨」が「やんごとなき人」として記されていることは看過できない。

「女別当」は後述するが、その名の通り上臈女房である。『延喜式』「齋院司」における「祓物」項の「院女別当已下並従車後へ女別当已下蔵人以上乗私車……」という記述や、「三年齋」項の「女別当已下並乗車……」という記述が示す通り、女房の筆頭格であった。

『延喜式』の記述に「宣旨」の名が見えず、『狭衣』のIにことさら「宣旨」の名が挙げられていることに、どのような意味を見出すべきだろうか。周知の通り、平安当時の物語作品は無署名が原則である。しかし『紫式部日記』の物語書写の記事等、署名とは言えないが自作を何らかの形で叙述する例も存在しないわけではない(7)。Iも、齋院という集団における「宣旨」の名を「やんごとなき人」とことさらに記すことで、当時の読者達に矜持のよなものを想起させたのではないだろうか。

このように考えると、直前のHにおける狭衣と宣旨のやりとりの場面も考察の余地が広がるだろう。Iの上臈女房の場面からHの対応の場面を捉え直すとき、主人公狭衣に対して

物語作者自身、ないしはそれが投影された登場人物が直接言葉を交わすという図式が看取できる。IにせよHにせよ、物語内における作者宣言のやや特権的な位置づけや、自己主張のような姿勢を見出すべきではないだろうか。

②女別当

女別当は先にIで見た通り、筆頭格の女房で「やむごとなき人は、女別当、宣言など」と記されていた。この女房にも狭衣と応対する場面が先のIからほどなくしてある。

J巻三 女別当、狭衣を後押しする歌を詠む。

吹きわたしたる川風の音、あはれにもをかしくも聞きなす人からは、つゆばかりまどろまれぬに、ほととぎすをち返りうちへ鳴く声いと近きを、大将殿御前近く候ひ給ひて、思ふことなるともなしにほととぎす尋ね来にけり賀茂の社にと独りごち給ふを、女別当、

語らばば神も聞くらんほととぎす思はん限り声な惜しみそ

明けはなるる山際、春ならねどをかし。

(②一五五頁)

※女別当——女別当いとちかくゐて(為家本・為相本等)

Jは狭衣が源氏の宮思慕の独詠歌を御前近くで詠んだところ、女別当が賀茂神社の地になんだ和歌を詠みかけるという場面である。女別当は、狭衣の不満が源氏の宮思慕に起因すると知らずに、狭衣の願いを神様も聞き届けてくれるだろうと応援する和歌を贈る。本来源氏の宮付の女房が詠むには不適切な内容であるが、後述の新少将と違い批判的な叙述が見えないのは、女別当が上臈だからであろうか。もしくは、実在の女別当の存在が何らかの形で関わるのであろうか。

実在の女別当は裸子家で存在感を持っていたとおぼしい。女別当は他の女房達と違い、歌合への出詠がほぼ確認できないにもかかわらず(8)、天喜三年のいわゆる物語歌合に、一番左という筆頭に相応しい参加の仕方をしている。さらに、つがえられた一番右は他ならない宣言であった。

霞隔つる中務宮

左

女別当

九重にいとど霞は隔てつつ山のふもとは春めきにけり(一)

玉藻に遊ぶ権大納言

右

宣言

有明の月待つ里はありやとてうきても空に出でにけるかな(二)

この物語歌合のつがいから示唆される宣言に対する高評価が、宣言当人の自負心に結びついた可能性もある。では、ともに列記される女別当とはいかなる人物だったのだろうか。

女別当は身分の高さというパーソナリティが第一にあって、それゆえ物語歌合において一番左を担ったとおぼしい。女別当の詠作は他に『出羽弁集』二二番に「別当殿のたまたる」として「雲居までにはふと見れどもすれば霞隔つる花桜かな」がかるうじて見えるが、やはり和歌等の文芸方面で活躍した女房とは考えがたい。ただ、この「雲居まで……霞

隔つる花桜かな」の詠などは物語歌合一番左の和歌と酷似しており、現存資料からは『霞隔つる中務宮』（以下『霞隔つる』と略す）は女別当の自作と考えるのが自然だろう。

そして『霞隔つる』は現在散逸しているが、物語としての出来栄も悪くないものだったと予想される。物語歌合は、『栄花物語』巻第三七「けぶりの後」に「物語合とて、今新しく作りて」(③四〇二頁)と記録され、『後拾遺和歌集』八七四番詞書に「宇治の前太政大臣」かの弁が物語は見どころなどやあらむ」とてこと物語を留めて待ち待りければ……」とあるように、関白藤原頼通が進行に口をはさむほど執心する催しだったようである。そのような催しの一番左に、稚拙な物語が出されたとは考えがたい。

以上のことから『狭衣』のI・Jに女別当という女房が登場する意味を改めて考えると、祿子家の筆頭格の上臈であるという地位に加え、物語歌合において一番をとくに務めたことに対する宣旨の紐帯意識を想定すべきではないだろうか。物語歌合は当時においても祿子家を象徴する盛儀であった。紐帯意識には、女別当の物語創作の腕に対する、宣旨の敬意も含まれていたと考えられる。

この問題との関連で、『霞隔つる』と『狭衣』という物語同士の影響関係も考察したい。『霞隔つる』は『風葉和歌集』に三首入集しているが、その一場面がつぎのK、『狭衣』冒頭部の吹笛の場面に類似しているのである。

左大将御あそびに笛つかうまつりて侍りけるあしたに給はせける

霞へだつるの御門の御歌

たぐひなく心にすみし笛のねは月の都もひとつなりけり(一三二七)

御かへし

笛の音は月の都にとほけれど清き心や空にすみけむ(一三二八)

K巻一 狭衣がやむを得ず笛を吹く。

……中将の君、もの心細くなりて、いたう惜しみ給ふ笛の音をやや残すことなく、吹き澄まして、

稲妻の光に行かん天の原はるかに渡せ雲の架け橋

と音のかぎり吹き給へるは、げに月の都の人もいかでか聞き驚かざらん。(①四三頁)

『霞隔つる』には左大将という人物が帝の御前で笛を吹き、月の都と異ならないという賞賛の和歌を受ける場面があったようである。『狭衣』でも狭衣が御前で笛を吹き、月の都の人も聞きつけるだろうと草子地が述べている。この後の天稚御子降臨に関してはともかく、御前での吹笛と月の都は一致しているといえよう。この一致はすでに萩谷朴氏をはじめ、諸氏が指摘するところであるが(9)、ここからも宣旨の女別当に対する意識がうかがえるのではないか。

加えて、管見のかぎりいまだ指摘がないが、『狭衣』の登場人物「中務宮の姫君」にも『霞隔つる』からの影響がうかがえるのではないか。中務宮の姫君は巻二の女二の宮付の女房の噂話に登場する女君で、狭衣の吹笛の様子を伝聞して絵に描いたことが語られる。女房から、

狭衣の「具」すなわち妻妾に相応しい女君であると評されている(①一七〇頁)。のちに狭衣が中務宮の姫君の家を訪れると、すでに引越したあとで会えなかった(①一九四頁)。

『霞隔つる』の現存資料に姫君の存在は確認できないが、物語歌合の一番左に提出されるほどの物語であり、恋の要素があったはずだということ、優美な左大将が登場することから、この作品の中務宮には姫君がいたのではないかという復元が一般的である(10)。推測の域をでないものの首肯される。

その場合、『霞隔つる』の影響下にある吹笛の場面をもとに、中務宮の姫君のちに狭衣の絵を描いていたことになる。これは吹笛と月の都、及び中務宮の姫君という、『霞隔つる』から『狭衣』への、広範囲にわたる二重の影響ということになるだろう。女別当は従来看過されてきたが、『狭衣』とは縁深い女房なのではないか。

③大人しき人々

女別当のJの場面の直後には、「大人しき人々」とのやりとりが記される。

㊦巻三 本院の簡素さを氣遣う狭衣に、女房達が応じる。

「……齋院こそ、なまよろしくおはしまさんは、あしかりぬべかりけれ」とて、よろづつくるひ歩きたまへば、大人しき人々は、「かやうにさだ過ぎたるさまにては、さし出でにくくはべりけり。よろづの人に向ひたるやうにおぼえて、この若き人々に、何しに車より下りつらんとわびたまふめる」と聞こゆれば…… (②一五五・一五六頁)

狭衣に所の頭わさを訴える返答をするだけの場面であるが、女房とのやりとりなので念のため挙げた。狭衣と女房達との、心理的な距離の近さ等がうかがわれる。

④新少将

右までは源氏の宮の初齋院から本院入りの場面であったが、新少将の登場はのちの巻四、狭衣が春に齋院を訪れる場面である。

M巻四 新少将、狭衣の戯れに応じる。

「君達さへ、余りつつみたまひて今は目も見せたまはねば、いみじうつれづれにこそなりにたれ」とのたまへば、新少将とて大人しき人、「ものにもがなとこそ、皆思ひたるけしきども侍るめれば、まいて、何かは見入れ参らする人も侍らん」と聞こゆれば、「心憂のことや。物恐ろしからで過しし末の中頃、くやしうこそ思ひ出でらるれ」など、いづれとなく言ひ戯れたまひて、

御垣守る野辺の霞も暇なくて折らで過ぎゆく花桜かな

と、わざとなく言ひすさびたまへば、少将、

「花桜野辺の霞のひまひまに折らでは人の過ぐるものかは

さまでは、なんでふいさめか侍る」と聞こゆれば、うち笑ひたまひて、「一文字も思し咎むるこそいとほしけれ。さらば、いかがすべき。かの東の対に、昔もさることありけるは」とのたまへば、「逢ふにしかへば、かばかりの身は、まいて何か惜しく侍らん。この世の面目にこそ」などわららかに戯れきこゆるを、若き人々は、あいなう汗あえてぞ聞きける。

(②三三五・三三六頁)

狭衣の「相手にされなくて無聊である」という発言に対し、新少将は女房達の中には狭衣に気がある者もいるだろうというような返答をする。そしてその後の和歌の贈答でも、新少将は「どうして花（女房）を手折らないで過ぎようか、咎めもないだろう」という挑発的な発言をして、さらに逢瀬を持てるならばこの身も惜しくないと言う。これは、これまでの用例と比べても露骨な色恋の応対であり、若い女房達の困惑の様子が併せて描かれている。ちなみに「かの東の対」での出来事は作中に語られておらず、散逸物語の一場面か何かと推測される。

新少将のように、狭衣に面と向かって好色なはたらきかけをする女房は珍しい。狭衣に好色めいた視線を向ける女房の存在は他家にも確認できるが、いずれも物陰等から噂をするという構図を取っている。今姫君付の女房達（①一〇六頁）や、女二の宮付の女房達（①一六九頁）が該当するが、前者に至っては、未熟な女房たちが狭衣の呼びかけに答えることができないう場面が続く。新少将の応対から、やはり彼女自身及び源氏の宮家の特異性を読み取るべきであろう。

ただ新少将は、現存資料から実在の女房との関連を見出しがたい。同名の女房は諸資料に見えず、あえて候補として挙げるならば物語歌合に『よそふる恋の一卷』を提出した「宮少将」と『打つ墨繩の大將』を提出した「少将君」がいるが、いずれも事跡等が詳らかでない。いわゆるモデルとなるような実在の女房が新少将にもいた可能性もあるが、ここではあくまで物語内での特異性の指摘にとどめる。

⑤御簾の中の人々（語り手を含む）

つぎの引用は、Mで新少将が応対した直後の場面であり、齋院を訪れた君達が蹴鞠をしている場面である。狭衣は蹴鞠に加わらずにたたずんでいる。

N巻四 女房達が、狭衣を夕霧になぞらえる。

「ややもせば、下りたちぬべき心地こそすれ。などで、今しばし若うてあらざりけん」
とのたまへば、御簾の中の人々、「まめ人の大將は、おはせずや侍りける」「さらばしも、花の散るも惜しからじ」など、口々、いと立てたてまつらまほしげなるけはひどもなり。
「そのいたう屈じたる名ざしこそ、よそへつべかめれど、こよなう見くらべたまはんが、妬ければ」とて……
②二三八頁

○巻四 語り手が、過去に実見した柏木と狭衣とを比較する。

花のいたう散りかかるを見たまひて、「桃李先散りて、後なるは深し」と忍びやかに口ずさみたまひて、高欄にをしかかりたまへるまみ・けしき・御声などは、かの「桜を避きて」とて、花の下にやすらひ給へりし御さまを、その折は見しかど、この御ありさま、また類なげにて、何事の折節も見ゆる。
②二三八頁

Nは女房達により狭衣が夕霧になぞらえられる場面であり、Oは語り手により眼前の狭衣と若菜上巻の柏木とが引き比べられる場面である。なにより注目すべきはOの「その折は見しかど」であり、この口々にはやし立てた簾中の女房達にまじった語り手が、若菜上巻の柏

木をかつてその目で見たと言っている点である。『狭衣』における『源氏』引用は枚挙に遑がないが、このような形式は極めて特異であるといえよう。

源氏の宮付の女房に若菜上巻の世界を見聞した者がいて、かつ現在の語り手になっていくというのはいかなる状況であろうか。まずは二つの物語世界を横断する女房の存在を想定すべきかもしれないが、源氏の宮家が実在の裸子家と重なり合うという点を考慮すれば、また少し異なる意味が見出せそうである。

裸子家は物語歌合を行うほど物語を愛好する宮家であった。それゆえ物語に造詣の深い女房集団を抱えていたことは、彼女達自身の自負するところであつたらうし、外部にも周知されていただろう。源氏の宮が裸子を想起させるのと同様に、その齋院の女房集団も実在の者が想起されるのであれば、『源氏』の世界を見聞しているという設定は、宣旨による自家の文化的なアピールのようなものとも考えられるのではないか。ただし当然、そこからは大げさな諧謔性を認めるべきだろう。

例えば、橋姫巻における弁の尼の語りに「その昔睦ましう思うたまへし同じほどの人多く亡せはべりにける世の末に」(⑤一四六頁)や「小侍従はいつか亡せはべりにけん。その昔の若ざかりと見はべりし人は、数少なくともはべりにける末の世に」(⑤一六二頁)という隔世の感の繰り返しがある。『狭衣』の〇の語り手は、まさにこの数少ない『源氏』第二部世界の生き残りということになる。物語に精通している読者ほど、この大仰な仕掛けと、実在の裸子家女房達の重なりとに驚くのではないだろうか。

ちなみにこの「その折は見しかど」について、後藤祥子氏は「歴史物語の語り手の口吻に似る」と注している⁽¹¹⁾。難解な語りであるため、さらなる後考を俟ちたい。

以上、『狭衣』の齋院源氏の宮付の女房達が、客人狭衣に対応する場面を見てきた。実在の裸子家女房達との重なりや、『源氏』の世界の女房達との重なりという点は、源氏の宮家の大きな独自性といえるものだろう。また狭衣に対応する女房達は、からかいの姿勢や色めいた雰囲気等に関して、前節の薫に対応する女房達からの緩やかな影響があるかとも考えられる。ただし、源氏の宮付の女房には、実際に狭衣の召人になるような者が見受けられない等、相違点もあった。

三 まとめ

以上、『源氏』等の女房達と客人との対応場面を見た上で、宣旨をはじめとした『狭衣』の源氏の宮付の女房達を検討した。宣旨と女別当のような、作者と実在の人物とが物語内において複雑に交錯する女房が確認できた一方、新少将や簾中の語り手のような、物語内において特異な振舞いをする女房も確認できた。いずれにせよ齋院卜定以後の源氏の宮付の女房は、女二の宮等の他家と違い、狭衣との対応が積極的に描かれている。源氏の宮付の女房達の積極性は、彼女達が在る齋院という空間の特異性を際立たせてもいるし、主家である源

氏の宮自身の才気を演出しているともいえよう。そこには実在の裸子家女房達が見え隠れしているようである。

今後は、源氏の宮と裸子という主家の一対一の対応関係を考察するだけでなく、作中の女房集団と実在の女房集団、ないしは『源氏』中の女房集団のような、より多様な対応に目を向けるべきである。第二部第三章では狭衣帝の乳母の大式三位と実在の大式三位藤原賢子の重なりを論じるが、『狭衣』においてこのような同時代的な事例は多数存在していると推察される⁽¹²⁾。これらを究明することは、作品世界における物語展開や登場人物の考察にも資するものとなるろう。

※凡例に挙げた作品以外の引用本文は、基本的に「新編日本古典文学全集」に拠った。ただし『延喜式』

は「国史大系（新訂増補版）」に、歌合は『新編国歌大観』にそれぞれ拠った

※『狭衣物語』の本文異同は中田剛直編『校本狭衣物語』（桜楓社、一九七六〜一九八〇年）に拠った。

注

- (1) 近年は、古田正幸『平安物語における侍女の研究』（笠間書院、二〇一四年）、陣野英則『源氏物語論 女房・書かれた言葉・引用』（勉誠出版、二〇一六年）等が注目される。
- (2) 藤原定家『僻案抄』等の資料や、源氏の宮が齋院となる物語展開を根拠に、現在定説化している。久下裕利「狭衣作者六条齋院宣旨略伝考」（『狭衣物語の人物と方法』新典社、一九九二年）や小町谷照彦・後藤祥子校注・訳『狭衣物語①』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九九年）の後藤祥子「解説」等に詳しい。
- (3) 宮の君は女房という身分に着目されることが多く、高橋由記「蜻蛉」巻の宮の君——式部卿宮女の出仕——」（『国語国文』第七〇巻第二号、二〇〇一年二月）、三角洋一「蜻蛉巻の宮の君」（『むらさき』第四八輯、二〇一一年二月）等がある。
- (4) 三谷栄一「齋院源氏宮」（『狭衣物語の研究「異本文学論編」』笠間書院、二〇〇二年）、中城さと子「『狭衣物語』と裸子内親王」（『中京国文学』第八号、一九八九年）等。
- (5) 井上眞弓『狭衣物語』における奪われた女房の声をめぐって——「うるま」という狭衣の発話言説より——」（『立教大学日本文学』第九三号、二〇〇四年十二月）は、今姫君付の女房が狭衣の挨拶に対応できない事態をめぐり「言語伝達不能」という問題を論じている。
- (6) 小町谷照彦・後藤祥子校注・訳『狭衣物語②』（新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇一年）の三三八頁の頭注八。
- (7) 陣野英則「紫式部という物語作家——物語文学と署名——」（『源氏物語の話しと表現世界』勉誠出版、二〇〇四年）、陣野英則「藤式部丞と紫式部——藤式部」（『文学』第一六巻第一号、二〇一五年一月）等。
- (8) 最初の永承年間の歌合大成一三五に「別当」の名で二首の出詠が見られる。
- (9) 萩谷朴『平安朝歌合大成第二巻』（同朋社出版、一九九五年）の二一〇八頁等。なお、久下晴康（裕利）『狭衣物語』の創作意識——六条齋院物語歌合に関連して——」（『平安後期物語の研究 狭衣

浜松』新典社、一九八四年）は、『狭衣』の冒頭部を中心に、物語歌合の『玉藻に遊ぶ権大納言』『淀の沢水』『あやめも知らぬ大将』『あらば逢ふ夜のと嘆く民部卿』『岩垣沼の中將』との類似も指摘している。

(10) 小木喬「霞へだつる中務宮」(『散逸物語の研究平安・鎌倉時代編』笠間書院、一九七三年)、樋口芳麻呂「霞隔つる中務宮」(『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』ひたく書房、一九八二年)、野藤昭夫「散逸物語『霞へだつる中務宮』の復原」(『散逸した物語世界と物語史』若草書房、一九九八年)等。

(11) 前掲(6)小町谷・後藤注釈の二三九頁の頭注七。

(12) 須田哲夫『狭衣物語』——その社会意識と歴史意識について——(『論争狭衣物語2 歴史との往還』新典社、二〇〇一年)は、女二の宮乳母の「出雲」と「大和」が、同名の実在女房の存在を反映していると指摘する。

第三章 『狭衣物語』の「大式三位」と大式三位藤原賢子

『狭衣物語』（以下『狭衣』と略す）には、実在の人物を想起させるような登場人物の呼称、例えば飛鳥井物語の平中納言や伯の君¹、源氏の宮付きの女房宣旨²等が確認できる。このような史実を想起させる人物呼称、あるいは人物設定は、作り物語における準拠説、モデル説とも近い位置にある。例えば、『源氏物語』（以下『源氏』と略す）の横川僧都などは源信を想起させる人物呼称であり、特にわかりやすい事例といえるだろう。先行研究では、源信の説話や『往生要集』等から『源氏』を読み解く試みがなされている³。

本章が議論の対象とする『狭衣』の「大式三位」も同様に、実在の大式三位藤原賢子を想起させる登場人物であるといえるだろう。大式三位は狭衣の乳母という脇役であるが、その叙述の中には、賢子に対する皮肉や揶揄と考えられるような箇所が散見される。

『狭衣』作者宣旨と賢子は、同時代に活躍した女房であり、『狭衣』の大式三位の叙述は当時における賢子の存在感や、女房達の微妙な距離感を反映しているとおぼしい。これはいわゆるモデル説をめぐる議論とはやや質を異にする問題であり、『狭衣』作者宣旨や賢子の周辺を広く調査した上で、「大式三位」が作中に登場する意義と、宣旨の意図とを考察する必要がある。ちなみに、物語作者が読者の持つ知識に配慮して創作を行っていたとする先行研究として、早くは稲賀敬二氏のもの⁴、近年では土方洋一氏のものがある⁵。本章もこれらを参考としている。

また『狭衣』の大式三位は、物語の結末部における狭衣帝の在り方や、その憂愁とも呼応しうる登場人物である。実在の賢子との関わりと併せ、物語の結末部における大式三位の位置についても考察したい。

以下、宣旨の執筆姿勢を視野に入れつつ、『狭衣』における大式三位の描かれ方の問題、そして『狭衣』と実在の賢子をめぐる問題を論じる。『狭衣』の大式三位と実在の賢子は、女房としての伺候名だけでなく、複数の点で比較検討されるべき特徴を持ち合わせている。はじめに、『狭衣』の大式三位の登場場面を押さえ、物語結末部での特徴を論じたのちに、賢子の事跡を比較検討する。そして、賢子の文芸活動における活躍を確認した上で、『狭衣』の大式三位と賢子、二者の関わりを、『狭衣』作者宣旨による揶揄といった視点から論じ、『狭衣』結末部を考える。なお本章では呼称の混同を避けるため、原則として『狭衣』の登場人物を「大式三位」と呼び、実在の大式三位藤原賢子は「賢子」と呼ぶことにする。

一 『狭衣』の登場人物「大式三位」

本節では、『狭衣』全体における大式三位の登場箇所を確認する。大式三位の先行研究が見受けられないことも考慮し、時系列順にその登場場面を列挙したい。

大式三位は狭衣の乳母であり、脇役ながら物語の序盤と終盤に集中して登場する。狭衣の即位以前は「大式の乳母」等と呼ばれ、狭衣思いの人物として描かれる。物語前半では夫とともに大宰府に下っているが、終盤は帰京し、狭衣の身边に伺候するようになる。

A この殿(狭衣)の御乳母の大式の北の方にてあるありけり。(卷一①一七頁)

右は大式三位が初めて紹介される場面である。ここでは彼女が大式の北の方であることがわかるが、大式三位は物語前半部では夫の任地に下っており、直接は登場しない。

しかし、大式三位は任地にありながらも狭衣の後見たるよき乳母として、繰り返しその存在感を放っている。女二の宮密通事件におけるつぎの三場面に注目したい。

B 内裏にさぶらふ中納言典侍は、大式の乳母の妹ぞかし。(中略)大式の乳母くだりてのちは、「同じ心にてこそ」など申し置きしが、常に見、睦び聞こゆれば、折々の局のわたりに立ち寄りなどし給ひけり。(卷二①一六六・一六七頁)

C ……ただかの御児のほどとおぼえ給へるを見るに、大式の乳母にこれを見せたらん、いかばかり人目も知らず喜びかなしがりきこえんと…(卷二①二二頁)

D かからましかばと恨めしくおぼえ給へば、いでやためこそ人のどもの憂がるを、「例の心憂く、よそ人のやうに常にのたまふよ。大式ならましかば、堪へぬことなりともかからましや」とのたまふを、「げに」と心苦しかり。(卷二①二四七頁)

Bは任地下向に際し、大式三位が妹中納言典侍に狭衣の後見を頼んでいたことがわかる場面、Cは中納言典侍が狭衣と女二の宮との子である若宮を、大式三位に見せたいと思う場面、Dは女二の宮との仲介役を拒否する中納言典侍に対し、狭衣が「大式の乳母ならばそのような態度をとるだろうか」と責める場面で、中納言典侍もその責めを「げに」と甘受している。右の三場面からは、遠方の地にながら狭衣を気遣う大式三位の姿勢と、狭衣思いの人物柄、そしてその存在感が看取できるだろう。

つぎの場面は間隔が空き、物語終盤の巻四である。狭衣が宰相の妹(後の藤壺女御)を自邸に盗んだ場面だが、大式三位は帰京し狭衣に伺候しており、実際の初登場といえる。

E 大式の乳母参りて、「昨夜も、いづくにおはしますぞと問はせ給ふに…」(中略) ……いとどあたりまでこぼる心地する御匂ひ、愛敬などを、大式の乳母の、粥まかなひして、つつまじげならず、さし向ひたてまつりて…(卷四②三〇九・三一〇頁)

F 「かの聞こえしわたりの、故郷にひとり立ち帰りて心細げなれば、今朝やがて迎へたるぞ。(中略)」大式近う参りて寄りて、御帳のかたびら引き開けて見れば…(卷四②三一・三二頁)

G 大式が参りたるに、「まことにさることにや」と問ひ給へば、はじめよりのことどもを聞こえさせて…(中略)「すべて、大式、心なく口惜しきなり。(後略)」(卷四②三一九〜三二二頁)

Eは狭衣が宰相の妹を連れ帰った場面であり、弁の君の視線を通して、狭衣に心置かず接する大式三位が描かれている。これは、超越的な狭衣を腫物のように扱う両親の姿と、対照的であるといえよう。Fは大式三位が狭衣から宰相の妹のことを聞かされる場面、Gは宰相の

妹の存在が明るみになり、大弐三位が両親から詰問される場面である。いずれも大弐三位が狭衣のよき理解者、協力者として、両親以上の信頼を得ていることを示している。

前半のA～Dの場面と併せて、大弐三位はここまで一貫して狭衣思いの乳母として描かれているといえるが、この後狭衣が帝に即位して以降は、その描かれ方に確かな変化がみられる。この点、特に注意してつぎに引用する狭衣帝即位後の登場箇所を確認したい。

H 年頃、いかさまにしていたまさかにも通はし見たてまつるわざもがなと思ひ願ひ給へる上達部、親王たちなど、(中略)おのおの御女どもをいとどもてかしづきて、大弐三位[※]などして、御けしき給はる人多かりけり。
(巻四②三六〇・三六一頁)

※大弐三位など——大その三位(伝為家筆本)——大弐の三位(紅梅文庫本・雅章筆本)

I 大宮・院などの御膝の上に、取りかへ取りかへ、扱ひきこえさせ給ふさま、げに世の人の物言ひも叶ひぬべきにやと見えたる。大弐三位など、内裏に参りて、「かう、かたはらなかりぬべき御思ひどもになん」など奏するを……
(巻四②三六六・三六七頁)

※大弐三位など、内裏に——大二さんゐそ(伝為明筆本)

J かの行方も知らず果てもなう思し惑はせし三河守も、その後は人知れぬ御心の中ばかりには、こよなう思し隔てしかども、母北の方、おぼえ優れたるゆかりには、何しにかは、思ふことの少し違はん。年はいと若うて、大弐にもなりにければ……
(巻四②三九二頁)

※母北の方——ハ、そのかたの御(雅章筆本)／ゆかりに——ゆへによりて(伝為明筆本)——かたちに(伝慈鎮筆本)

Hは狭衣の即位後、貴族達が娘の入内の打診を大弐三位に持ち掛けるという場面である。ここで初めて「大弐三位」という呼称が用いられるが、これは狭衣の即位に際し、乳母が従三位に叙せられたからだと考えられる。当時、天皇の主要な乳母が典侍となり、従三位に叙せられるのは通例であるが⁶、その旨の説明が一切なく、「大弐三位」という身分を強調した呼称に改められた点、注目したい。さらに、大弐三位が入内の口利きという、政治的に極めて重要な役割を担っている点も看過できない。

Iは若宮に対する堀川夫妻の溺愛ぶりを、大弐三位が狭衣帝に伝える場面である。ここでもHと同様、「大弐三位」と呼称が改まっている点が注目される。Jは大弐三位の子道成が、飛鳥井の君誘拐事件で狭衣に疎んじられているにも拘わらず、母大弐三位の縁故により大宰大弐になったという場面である。大宰大弐は地方官の中でも経済的なメリットが大きかった⁷。傍線部「何しにかは、思ふことの少し違はん」とあるところなどは、語り手によるこの任官への皮肉が表れているといえよう。

このように狭衣が即位して以降のH～Jを見ると、これ以前とは違い、大弐三位の政治的な側面が過剰に描かれていることがわかる。即位以前の大弐三位は、専ら狭衣思いの乳母として描かれていたが、即位後は「大弐三位」という身分を意識した呼称が用いられ、入内の口利き役や、息子の縁故任官など、朝廷内で大きな権力を持った人物に変貌しているといえ

よう。『狭衣』結末部における権威的な大弐三位の姿は、窮屈な帝位に据えられ厭世感を強くする狭衣の境遇と呼応するようであり、作品理解の上でも注目すべきである。

この点、二世源氏の狭衣が即位する是非については、『無名草子』がつとに「返す返す見苦しくあさましきこと」（二三三頁）と評して以来、議論は現在でも枚挙に遑がない。即位後の狭衣の内面に関する論稿としては、鈴木泰恵氏のもと井上眞弓氏のもものが特に挙げられよう⁸。鈴木氏は狭衣の超俗性に疑義を呈しながら、活気づく周囲とは裏腹に狭衣帝と治世の内面が「衰弱して虚無的」だと論じる。井上氏は女君達の母子関係が狭衣即位を導いたと論じつつ、即位という外的側面に対し、狭衣の内面は「女君たちの離反により平安は訪れない」と論じる。いずれも示唆に富む論稿であり、やはり物語結末部において、唐突に帝位へと据えられた狭衣の心中、その憂愁は大きな問題となるだろう。

稿者は結末部の狭衣の心中において、大きな二組の対比が認められる点に注目する。一つは、栄華を極める身分と憂愁を極める心中の対比であり、平野行幸の際に「我が御宿世のめでたかりけるは、かたがたにつけつつ、なのめならず思し知らるるものから、御心の中は、さやうに安かりぬべうもなかりけり」（巻四②三七七頁）と、端的に言明されている。これは源氏の宮と藤壺女御をめぐる感慨であるが、狭衣が結末部において常にこのような境遇、社会的な最高位とはかけ離れた憂愁にあることは、論を俟たないだろう。

いま一つは、即位以前の過去と即位後の現在の対比である。例えば源氏の宮について「そのかみに思ひしことは、皆違ひてこそはあめれ」（巻四②三七五頁）と統括的に把握されたり、故飛鳥井の君について「心憂かりし祈りの師の走りし足もとなど、只今の心地して」（巻四②三八〇頁）と具体的に回想されたりするが、この他複数の場面でも、過去の事柄と現在の憂愁が対比されている。

このような、社会からも過去からも隔てられた狭衣の心中は、即位を境に変貌した大弐三位の在り方によってもより前景化されているのではないだろうか。先に見たHは入内の口利きであり、直後の退位を考える狭衣の心中とは対照的である。Iは藤壺女御所生の若宮の場面であるが、この直後でも狭衣は女二の宮所生の若宮の立場を憂慮している。Jは狭衣が疎んじる道成の任官であり、やはり世間と狭衣の心中との乖離を示唆している。いずれも大弐三位は狭衣の心中と常に対立する立場にあり、帝である狭衣を除け者とした社会の在り方をうかがわせる。また、即位後の大弐三位の姿には、過去のよき理解者としての面影はなく、専ら事務的である。大弐三位はあくまで脇役であるが、その変貌は物語の結末部において、社会と過去から隔てられた狭衣の在り方を繰り返し強調していると考えられる。

では、このような狭衣即位後の大弐三位の姿と、実在の大弐三位藤原賢子からは、どのような関連性が見出せるだろうか。稿者なりに整理すると、以下の五点にまとめられる。すなわち、①「大弐三位」と呼称される天皇乳母であること、②親族が縁故により大宰大弐になること、③天皇へ口利きすること、④即位以前から天皇によく親近していること、⑤夫の任地に下っていること、となる。次節ではこの項目に従い、両者の関係を論じたい。

二 『狭衣』の大式三位と実在の大式三位賢子

藤原賢子は藤原宣孝女で、母は紫式部である。親仁親王（後冷泉天皇）の乳母となり、「弁乳母」「典侍」「大式三位」等と呼ばれた。藤原定頼等複数の男性と関係を持つが、最終的に高階成章の妻となった。また賢子は当時を代表する歌人でもあった。本節では、前節で掲げた項目に沿って、『狭衣』の大式三位と賢子との関連を論じる。

① 「大式三位」と呼称される天皇乳母であること

賢子が「大式三位」と呼称されることは周知の通りである。しかし、賢子と『狭衣』の大式三位との呼称を関連付ける論稿はごくわずかで、管見では宮田和一郎氏、石川徹氏の『狭衣』作者否定説が言及するのみである⁽⁹⁾。両氏の指摘は先見的だが作者と成立時期の推測に留まるため、本章ではより『狭衣』の作品理解に資するような議論を展開したい。

賢子が「大式三位」と呼ばれるのは、夫である高階成章が大宰大式であったことと、賢子自身が従三位に叙せられたことにちなむ。賢子が「大式三位」と呼称される時期は、寛徳二年（一〇四五）の後冷泉天皇の即位（『扶桑略記』と、天喜二年（一〇五四）の成章の大宰大式任官『公卿補任』から、天喜二年を上限と定められる。『狭衣』の成立時期は定かではないが、後冷泉朝以降であることはほぼ確実である。『狭衣』成立当時に賢子の呼称がどのようであったかはともかく、『狭衣』の大式三位という呼称及び天皇乳母という地位が、賢子を想起させるものであったことは想像に難くないだろう⁽¹⁰⁾。

ただし、天喜二年以降の諸資料の中で賢子が実際に「大式三位」と呼ばれる例は大分後半のものであり、『栄花物語』巻第三八「松のしづえ」（以下『栄花』と略す）の後三条院崩御の記事中の「大式三位」^(③四六〇頁)が初例である。賢子を「大式三位」と呼称する確かな用例は白河朝に入ってからのみであり、なお慎重に②以下の項目で検討を重ねたい。

② 親族が縁故により大宰大式になること

『狭衣』の大式三位と賢子が、ともに「大式」ゆかりの人物であるということも重要な論点である。『狭衣』の大式三位は夫がもともと大宰大式であるのに加え、狭衣即位後に子の道成も母の縁故により大宰大式に任官していた。一方、賢子も夫成章が後冷泉即位後に大宰大式に任官している。ここで検討すべきは、成章も賢子の縁故により大宰大式に任官したのではないかということである。

大宰大式は経済的なメリットが大きく人気があったようで、当時任官する貴族達も官位、出自に優れる傾向にある。例えば前任源資通は参議従三位で任官、成章は正四位下で任官、後任藤原経輔は権中納言正二位で大宰帥に任官という具合である⁽¹¹⁾。ここから相対的にではあるが、成章の官位の低さがわかるだろう。成章は出自についても同様に低く、父業遠は丹波守正四位下、祖父敏忠は左右衛門権佐五位上である（『尊卑分脉』）。大宰大式に任ぜられ正三位まで昇った成章は、出自に照らしてみても異例の出世を遂げている。

なお、成章の任官に関わりそうな事跡としては、夭折した藤原通房の乳母が「成章がめ」^(『栄花』巻第二四「わかばえ」②四四二頁)であったことや、成章が親仁親王の東宮権大進であ

ったこと『公卿補任』があるが、大宰大弐任官の要因としては賢子に比べると弱い。彼が大宰大弐に任官できたのは、やはり妻である賢子が、天皇乳母という立場から成章の獵官運動を行ったからだと想定するのが妥当であろう。

成章が賢子の縁故により大宰大弐に任官したことは、前節で引用した『狭衣』Jの、道成が大宰大弐に任官したことと重なる。これを図で示せば、つぎのようになる。夫か息子かという違いはあるものの、両者は天皇乳母の縁故による任官であるといえる。

図1



ここでさらに注目したいのが、前節の『狭衣』Jの「おぼえ優れたるゆかりには、何しにかは、思ふことの少し違はん」という、語り手による皮肉の姿勢である。成章の任官に関しても、以下のように当時よからぬ反響があり、この点も相関性が認められる。

まず、『公卿補任』であるが、成章の注に「號欲大弐」とあり、彼が「欲大弐」、すなわち欲深い大弐として広く認知され、不名誉なあだ名を付けられていたことがわかる。大宰大弐はそもそも経済的な利権が豊富な役職であるが、成章はそれに輪をかけて強欲な振舞いをしていたことが察せられる。

他に、『経衡集』の贈答歌も参考となる。

またなりたる大弐、心よからず思ひたるなど聞きしかば、むつかしうて、管崎に詣でて

また二つ頼むかたなき我が身かな明け暮れはただ管崎の宮(二四〇)

だいにときしげ

管崎のみことのりぞとこれを知れ国九つのかみてしと見ん(二四一)

右は、新たな大宰大弐に疎んじられていると聞いた経衡が、管崎宮に参詣した折のものと解釈できる。この直前には「下り侍りてほどもなく、資通の大弐、京へ上らるる別れ惜しまれて……」(二三七番詞書)という、前任資通との惜別が載っているので、傍線部「またなりたる大弐」は、後任の成章だと考えられる。ちなみに返歌を詠んだ「だいにときしげ」は、二二八番詞書の「大ぐしのとときしげ」、二二九番の「管崎の宮人」と同一人物とおぼしく、「ときしげ」という管崎宮の神官を大弐と誤写したものかと考えられる。

経衡は当時筑前守であったため、成章とは地方官として交際する必要があったのだろう。この詞書は、あくまで成章と経衡の個人的な不仲を示唆するものだが、経衡があえてそれとわかるように家集に記した点なども含め、成章の人となりの参考になろう。

総合すると、成章は低い官職、出自でありながら妻賢子の縁故により大宰大弐に任官するも、「欲大弐」と呼ばれるほど強欲な振舞いをし、筑前守経衡と軋轢があったかということになる。成章は、『狭衣』作者宣言など当時受領層であった多くの女房達から、嫉妬や軽蔑

の対象となるような人物であった可能性が考えられる。前任の資通などは管絃、和歌に秀で、宮家の女房達とも交流する好人物であったことが『更級日記』等に確認できるが¹²、その落差は成章の手柄をより印象付けよう。成章に対し、このようなネガティブな意識が宣旨達にあったとすれば、それは妻の賢子へもいくらか向いたのではないだろうか。

『狭衣』で道成の縁故任官に向けられた語り手の皮肉は、この成章の縁故任官への皮肉を想起させるような相関性を有している。宣旨は、狭衣帝乳母の大式三位を賢子へと重ね合わせるように描き、成章達への皮肉、揶揄となるような叙述を行っていたのではないか。

ちなみに成章だけでなく、賢子の子為家も異母兄弟より昇進が早く、白河朝には天皇側近となつている¹³。ここから夫と子のいずれも賢子の恩恵に浴していたとおぼしく、『狭衣』Jの子道成への皮肉、「母北の方、おぼえ優れたるゆかりには、何しにかは、思ふことの少し違はん」は、そのまま賢子の子為家へも向けられていたかと考えられる。

③ 天皇へ口利きすること

前節の『狭衣』Hでは、大式三位が入内の口利きをしていた。現実の後宮は撰閲家を取り仕切っており、同様のことは起こるべくもないが、賢子が天皇への口利きを依頼された事例は『後拾遺集』雑三に確認できる。

静範法師八幡の宮のことにかかりて伊豆の国に流されて又の年の五月に内裏の大

式三位の本に遣はしける 藤原兼房朝臣

五月闇子恋の時鳥人知れずのみなきわたるかな(九九六)

返し 大式三位

時鳥子恋の森になく声は聞くよそ人の袖も濡れけり(九九七)

これを聞こしめして召し返す由仰せ下されけるを聞きて詠み侍りける

素意法師

すべらぎも現人神もなごむまでなきける森の時鳥かな(九九八)

右の三首は柏木由夫氏の指摘通り、兼房が賢子に、静範免罪のとりなしを求めた贈答である¹⁴。これは静範の山陵盗掘事件のことだが『扶桑略記』康平六年(一〇六三)一月一七日条、それを免罪させられるだけの権威を賢子が有していたことには注目される。『狭衣』の大式三位の口利きとは性格が異なるが、このような賢子の宮中での権威のイメージは、作中での大式三位の描かれ方にも底流しているように見受けられる。『狭衣』の大式三位の造型には、宮廷における賢子の隠然たる権威を揶揄するような側面があるのではないか。

④ 即位以前から天皇によく親近していること

大式三位が狭衣の乳母であり、身边に近侍していたことは先に確認した。大式三位は「何事も悪しうは慣らはしまゐらせたりとも思ひたまへられぬものを」(巻四②三二〇頁)と、狭衣を教育していた旨を語る場面があるが、『栄花』によると、賢子も同様に後冷泉天皇が幼い時分から親近し、教育者として重要な役割を担っていたらしい。

内(後冷泉天皇)の御心いとをかしうなよびかにおはしまし、人をすさめさせ給はず、めでたくおはします。をりをりには御遊び、月の夜、花の折過ぐさせ給はず、をかしき

御時なり。弁の乳母（賢子）をかしようおはする人にて、おほしたてならはし申し給へりけるにや。

（巻第三六「根あはせ」③三七四頁）

右では後冷泉天皇の氣質、風雅への言及の後に、「乳母の賢子が風雅な人物なので、そのようにお育てになったのだろうか」とある。賢子の才覚から考えて、これは信憑性が高い。

また、『大式三位集』端白切五番には「さて出でにければ、男少し心とけにけりと聞こしめして、女の侍ひけるに、東宮仰せごと」という詞書に、「待つ人は心ゆくとも住吉の里にとのみは思はざらん」（他出『新古今集』一六〇七）とあり、後冷泉天皇が東宮時代、里居する賢子に恋い慕う歌を贈っていたことが確認できる。賢子は後冷泉天皇に慕われ、かつ教育者的な立場にあったのだろう。狭衣は二世源氏であり、実在の天皇とは比較しづらいが、長らく親近していた乳母と帝位に就いた主人という共通性には着目したい。

⑤夫の任地に下つてゐる

些末だが、『狭衣』の大式三位が物語前半で夫の任地に下つたのと同じく、『大式三位集』三六番詞書に「のちの度、筑紫にまかりしに」とある通り、賢子も夫の任地に下つていた。

*

以上、大きな論点から些末な共通項まで扱ったが、『狭衣』の大式三位と賢子の二者をめぐりその相関性を論じた。具体的には、伺候名とその地位や、縁故による猟官運動、政治的権威とそのコネクション、天皇への親近等である。これらを通して指摘できることは、『狭衣』の大式三位は、当時の読者に対し賢子を想起させる多くの性質を持っており、その上擲諭とも受け止められるような描かれ方がなされているということである。大式三位の姿は、前節で見た結末部の狭衣との関わりに照らしてみても、肯定的な描かれ方とはまずいえないだろう。大式三位はむしろ、結末部の狭衣の境遇を前景化しているとも考えられ、この点は本章の最後に再び触れたい。

大式三位をめぐる擲諭の叙述は、宣旨や当時の読者が持っていた賢子への羨望、嫉妬、そして賢子自身の持つ話題性といったものに喚起されたのではないだろうか。それは単純な個人批判というより、実在人物の戯画化、パロディー化に類するような技法と考えられよう。賢子はその地位や知名度等から、物語に利用されるのに格好の人物であったはずである。では、このような賢子の話題性といったものは、彼女の歌人としての側面といかに関わるのだろうか。次節では賢子の文芸的事跡の確認を通じて、当時の賢子のイメージをより明確にしたい。

三 賢子の文芸的事跡

賢子は後冷泉天皇乳母という側面だけでなく、紫式部の娘、宮廷歌人という文芸的な側面も持っている。これは当時の人々の関心事であり、賢子の文芸活動を押さえることで、『狭衣』において彼女の擲諭が用いられた状況がより見えてくると考えられる。

賢子が紫式部の娘であったことは当時から言及がある。『栄花』巻第二六「楚王のゆめ」では「紫式部が女の越後弁」(②五三〇頁)と、賢子の説明として父宣孝ではなく母紫式部の名が挙がる。そして賢子自身も『源氏』作者を母に持つということに自覚的であったようで、彼女の和歌には『源氏』撰取歌が複数あることが、中周子氏等により指摘されている¹⁵⁾。中氏は「その撰取方法は『源氏』特有の詞やある場面を取るのみならず、物語に描かれた情景や人物を彷彿とさせるような、物語の情趣を大きく取り込んだもの」と論じる。

このように賢子は『源氏』に精通しており、それを詠歌活動に活かしていたことがわかる。当時の人々は、賢子を出自、詠作から特別な存在と認識していたと考えられるが、彼女の『源氏』撰取の姿勢は、歌人だけでなく宣言等の物語作者の注目も集めたのではないだろうか。宣言の属した祿子家は多数の歌合催行や物語歌合等、文芸が盛んであった。

また、賢子は歌壇における活躍も相当であった。賢子の出詠が確認できる歌合は、(1)長元五年(一〇三二)上東門院菊合、(2)長暦二年(一〇三八)源大納言家歌合、(3)永承四年(一〇四九)内裏歌合、(4)永承五年(一〇五〇)祐子家歌合、(5)治暦二年(一〇六六)皇后宮歌合、(6)承暦二年(一〇七八)内裏後番歌合、(7)承暦二年(一〇七八)内裏歌合の七つである。中でも後冷泉即位後の永承年間の歌合からは、賢子の地位の高さがうかがえる。

まず(3)永承四年内裏歌合であるが、賢子は伊勢大輔、相模、江侍従に並び、五番左で出詠している。賢子が当代の女性歌人として第一級に数えられていたことがわかる。つぎに(4)永承五年祐子家歌合であるが、これは実際には頼通が主催しており、盛儀であった。ここでは左方を女性六人、右方を男性六人に分け、三つの歌題を全員に詠ませ計一八番にしている。賢子は一番左、七番左、一三番左で出詠しており、先輩の伊勢大輔や相模を差し置いての左方女性筆頭である。この二つからは、歌壇における賢子の地位といったものがうかがえるだろう。

賢子の詠歌は歌合の他にも諸資料から確認できるが、その中には天皇乳母という立場からなされたものもある。『栄花』巻第三四「暮まつほし」には賢子と出羽弁による威子を偲ぶ贈答「しのびねの涙なかけそかくばかり狭しと思ふころの袂に」「春の日にかわかざりせば古の袂ながらや朽ち果てなまし」が載る(③二九七頁)。これは威子の娘である章子内親王が、親仁親王(後冷泉天皇)のもとに東宮妃として参上した折のものであり、両者の女房間で挨拶的に交わされた贈答であったと考えられる。

他に、『後拾遺集』九八〇番には橘為仲の歌「沢水におりゐるたづは年ふともなれし雲居ぞ恋ひしかるべき」が載るが、詞書に「後冷泉院御時蔵人にて侍けるを冠賜りて又日大弐三位の局に遣はしける」とあり、巡爵して蔵人を辞した為仲から賢子に贈られた挨拶的な歌とわかる¹⁶⁾。『風雅集』一八四八番には賢子の返歌「蘆原に羽休むる葦たづはもとの雲居に帰らざらめや」が載るが、これも天皇乳母という立場による贈答であろう。前節で確認した『後拾遺集』の口利きの贈答も同様の例といえるが、賢子が天皇乳母という立場から折々に贈答し、その記録が残っているという点には注目される。

以上、賢子の文芸的事跡を確認した。賢子は『源氏』摂取を巧みに行った歌人であり、後冷泉朝の歌壇においても高い地位にあった。また、賢子は歌人としても天皇乳母という社会的な側面としばしば深く関わっており、その点も当時の人々の印象に残ったものと考えられる。このように文芸という観点から考えても賢子は、『狭衣』において天皇乳母の大式三位として擲揄されるに相応しい話題性を持っていたのではないだろうか。次節ではそのような賢子を、前に確認した『狭衣』結末部の様相と考え併せ、本章のまとめとしたい。

四 まとめ——賢子の利用と物語の結末部——

『狭衣』作者宣旨は裸子内親王に仕えていた。宣旨は裸子家の歌合には頻繁に参加しているが、他家の歌合等への出向は一度も確認できず、華々しい賢子の活躍に比べると、私的な女房という印象を受ける。加えて宣旨と賢子には、直接の交流も確認できない。

しかし、裸子家専属の宣旨は、宮廷で活躍する賢子の話題を聞き、齋院でその情報を摂取していたとおぼしい。裸子家に入りする出羽弁は賢子と親交があり、情報源であったと目される¹⁷。宣旨のような裸子家専属の女房は複数確認できるが、宣旨達はリアルタイムで賢子の動静を把握しつつ、様々な評を加えていたのではないだろうか。宣旨達にとって、賢子の乳母としての最高位の出世などは羨望、あるいは嫉妬的であり¹⁸、「欲大式」と称されるほどの成章の専横は、賢子による縁故任官も含め非難の対象であったと考えられる。

大式三位という登場人物のイメージ、女房の出世栄達や政治的な権威は、読者達の世俗的な感情を強く刺激するものである。宣旨が、『狭衣』の大式三位を通じて賢子を風刺したとまでは考えづらいが、賢子を戯画化し物語に描き込んだ可能性は考えられよう。『狭衣』における大式三位の登場は、作者宣旨と同時代の読者達による、賢子についての共通知識を踏まえた遊戯的な営みという側面を持つのではないか。

そして本章一節で見た通り、この戯画的な大式三位が、物語の結末部における主人公狭衣の憂愁と呼応し、それを前景化する立場にあるということも看過できない。宣旨は、大式三位の背後に賢子を重ねつつ、彼女の政治的権威を、社会や過去から隔てられた狭衣の最終的な在り方の描出に利用しているのである。にわかな即位により急転する物語結末部において、何食わぬ顔で賢子を利用するあたり、宣旨のしたたかさが認められよう。これは、宮廷や歌壇で華々しく活躍した女房達とは質を異にしたたかさである。

本章の議論は、『狭衣』成立当時の社会状況から作品内容を理解しなおすことを第一としつつ、作品世界そのものの理解にも手を広げるものである。作品周辺に関する研究と、いわゆるテキスト読解をめぐる研究は車の両輪として、あい助け合うべきだと考える。

※凡例に挙げた作品以外の引用本文は、基本的に「新編日本古典文学全集」に拠った。ただし『扶桑略

記』『尊卑分脉』『公卿補任』は「国史大系」に拠った。

※『狭衣物語』巻四の本文異同は「狭衣物語諸本集成」に拠った。

注

- (1) 久下裕利「フィクションとしての飛鳥井君物語」『王朝物語文学の研究』武蔵野書院、二〇一二年。
- (2) 小町谷照彦・後藤祥子校注・訳『狭衣物語②』(新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇一年)の三八頁の頭注八。
- (3) 今西祐一郎「横川僧都」小論『論集日本文学・日本語2中古』角川書店、一九七七年、中哲裕「横川の僧都——その思想と行動をめぐって——」『文学・語学』第八四号、一九七八年(二月)等。
- (4) 稲賀敬二「平安末期物語の遊戯性——短編物語クイズ論——」『後期物語への多彩な視点』稲賀敬二コレクション四、笠間書院、二〇〇七年。
- (5) 土方洋一『源氏物語』須磨巻の書き手と読み手——付・五節の君のこと——『青山語文』第四三号、二〇一三年三月。
- (6) 『平安時代史事典』(角川書店、一九九四年)の角田文衛執筆「乳母」項。
- (7) 久下裕利「大宰大式・権帥について」『学苑』第七八五号、二〇〇六年三月。
- (8) 鈴木泰恵「天人五衰の(かぐや姫)——貴種流離譚の隘路と新生」『狭衣物語／批評』翰林書房、二〇〇七年)、井上眞弓「女君の親子関係」『狭衣物語の語りと引用』笠間書院、二〇〇五年)。なお、前掲(2)小町谷執筆「古典への招待」も参考となる。
- (9) 宮田和一郎「狭衣論攷」『国語国文』第三卷第四号、一九三三年四月)、松村博司・石川徹校註『狭衣物語上』(日本古典全書、朝日新聞社、一九六五年)の石川執筆「解説」。
- (10) ちなみに「大式三位」と称される女房は、賢子の他に後一条天皇乳母藤原基子(美子説有り)がいるが、『狭衣』成立時期においては前世代の人物であり、賢子の存在感と比べても『狭衣』に与えた影響は僅少であると考えられる。
- (11) 田中篤子「大宰帥・大宰大式補任表」『史論』第二六・二七集、一九七三年)。なお、当時の大宰府長官は官位により大式、帥と区別された。
- (12) 菊地仁「源資通の自然感覚——後冷泉朝文学覚書——」『日本文学論究』第三八冊、一九七八年(一月)。
- (13) 角田文衛「紫式部の子孫」『紫式部の身辺』古代学協会、一九六五年)。
- (14) 柏木由夫「大式三位賢子の生」『源氏物語研究集成』第一五卷、二〇〇一年(一月)の末尾年表。
- (15) 中周子「大式三位賢子の和歌における『源氏物語』享受の一樣相」『和歌文学研究』第七九号、一九九九年(二月)等。
- (16) 前掲(14)柏木論文。なお他出の『為仲集』一〇五番詞書では「周防内侍」に贈った歌とされるが、柏木説に倣い賢子とのやりとりと解した。
- (17) 宣旨の夫に『宇治大納言物語』を編纂した源隆国がいたとおぼしく、隆国の説話の収集作業なども、宣旨の情報源の一つであったかもしれない。
- (18) 福家俊幸「物語創作が記されない意味」『紫式部日記の表現世界と方法』武蔵野書院、二〇〇六年)は、菅原孝標女『更級日記』の乳母願望をめぐる賢子の栄達への意識を論じている。また久下裕利「狭衣作者六条斎院宣旨略伝考」『狭衣物語の人物と方法』新典社、一九九二年)に詳しいが、宣

旨は裸子の乳母であつたとおぼしい。乳母同士という点で、宣言に賢子への対抗心がきざしていた可能性も考えられる。

第四章 『四条宮主殿集』における恋の歌群の遍在

『四条宮主殿集』（以下『主殿集』と略す）は、一一世紀後半に成立したとおぼしい女房家集である。『主殿集』は注目されるべき特徴をいくつも持つが、その素性の不確かさ等から、従来マイナーな扱いを受けてきた。加えて、研究状況も仏教方面に偏重しがちであった。

本章の狙いは、『主殿集』の贈答歌群を検討し恋の遍在を明確にすることと、それを踏まえてこの家集を当時の文芸圏の中で考えることにある。以下、『主殿集』と先行研究の問題点を押さえた上で、恋の要素を持つ歌群を順に検討し、考察していく。

一 『主殿集』概略と先行研究

主殿は出自、伝等全て未詳であるが、藤原定家の『集目錄』（1）に「四条宮」と注記があることから、後冷泉天皇の皇后寛子に仕えた女房であったことがかろうじてわかる。『主殿集』は一二〇首からなる家集であるが、前半に「恋と社交生活」、後半に「出家後の詠」を収め、前後半にそれぞれ長文の序跋を付すという独特の構成をとっている²⁰。この前半と後半は、つぎのように整然としたシンメトリーになっている。

〈前半〉序文 十二月詠＋結願詠（二三首） 贈答歌群＋四華引用歌（五二首）

〈後半〉中序 十二月詠＋結願詠（二三首） 贈答歌群＋跋文（五二首）

『主殿集』の研究は仏道信仰の議論と密接に関わってきた。右のうち、序跋にあたる四箇所は、いわゆる狂言綺語観を意識させる仏教的な内容となっている。先行する『発心和歌集』のような構成とも違い、特異な様相を呈しているといえよう。

前半は序文「いづれの垣ほの撫子にかありけむ、身のほど知らず花にめづる女ありけり……」と始まり、四華引用歌「ただしこの人かくてたはれ樂しぶと言へども……」と結ばれ、恋と社交生活が自嘲されている。これに対し後半は中序「ある本文にいはく、一切のもろもろの世間にむまるる物は皆死有り……」と始まり、跋文「……艶なる名をとらむとにあらざるの世間に編めるによりて導かれ奉らむと、書き果つるなり」と結ばれ、仏道帰依が表白されている。これらの序跋は長大である上に、『往生要集』をはじめとした仏典からの引用が多量になされてもいる。

右が『主殿集』の大きな特徴であることは論を俟たず、既に今西祐一郎氏が「懺悔」、久保木寿子氏が「四華」「供花」をめぐる議論している³。これらの論稿で主殿は、最終的に仏道帰依や懺悔へと向かった女性と捉えられ、家集もそれに即して考えられてきた。

ただ、この問題を意識しすぎると、作品理解に偏りが生じはしないかと懸念される。たしかに、出家の前後をシンメトリカルに対比する構成や多量の仏典引用から、『主殿集』と仏道信仰は切り離せない関係にある。しかし、主殿の具体的な活動や心中を伝える贈答歌群に

目を向けると、仏道とはまた違った、家集の重要な側面が見受けられるようである。すなわち、従来の作品理解とは異なるが、『主殿集』は前半だけでなく後半にも恋とその騒動が記録されている可能性が考えられるのである⁴。

この問題は、主殿という謎の多い女房の交友圏や、『主殿集』の成立の考察にまで発展しうる。主殿に関しては、同時代の諸資料にその名も詠歌も確認できないため、家集そのものの解釈が重要なアプローチとなる。

次節以降では、家集の前半から順に恋の歌群を検討していく。

二 前半の恋の歌群

家集前半に恋の歌群があることは周知だが、本節では問題の確認と再検討を行いたい。前半の贈答歌群四八首のうち、約半数の二二首が恋に関わる詠歌である。つぎのような歌群が例として挙げられる。

A 宿直物の贈答。

ある男の、内より宿直物うちとりにおこせたりけるに

待つほどは返す衣に慰めつ今は涙を何に包まむ(四三)

返し

昼はきて夜はふすまとなるものを※いづれの暇に包む涙ぞ(四四)

※いづれの——いづれ(底)

B 来なかつた男との贈答。

「そこはかとなう苦しうてなむ、昨夜は来ざりし」と言ふ人に言ひし

絶えむとやいはれの池のねぬなはのそこはかとなくくるしと言ふらむ(四五)

返し

時の間も君をみぬまのねぬなはのいと恋ひしきにくるしきぞかし(四六)

C 方違えの男との贈答。

夜更けて方たがへに来たる男をあやしき方に思ひなして、つとめておこせたりし

沖つ波よるぞけしきをみしまなるうたがひにこそ思ひ侘びぬれ(四七)

返し

うたがひを清き渚に拾はればかへりて波の罪ぞあるべき(四八)

AとBは関係を持っている男に恨みの歌を贈る贈答、Cは懸想してきた男にすぎなくする贈答である。いずれも恋の応酬としては典型的なものだろう。

他に、三六〇三八番の艶聞を問われる歌群や、四九〇五一番の男性にすぎなくする歌群があるが、とりわけ注目すべきは二人の男性をめぐるつぎの大規模な歌群である。

D 「遠く行く男」との贈答。

秋ごろ、遠く行く男、萩につけていひおくれる

うしろめた露つゆを置くこそ秋萩に思はぬ方の風もこそ吹け(五二)

返し

占めそむるもとあらの小萩たはやすく行く手の風に靡くものかは(五三)

なほ、人の世も知らず、このたびは近くてなど言ひて、男

忍ぶ草いざやかたみに結びてむ憂き世はたれも知らぬ命を(五四)

返し

結びてもまた結ばでも忍ぶ草忘れがたみに思はれよかし(五五)

遠きほどにありける人に、便りぶみと人の乞ひ侍りければ、言ひやる

山風の便りに告ぐる言の葉をいさあらじとや言はむとすらむ(五六)

※露を置く——つくをゝる(底) 言はむと——いはむ(底)

E「忍びて来る男」との贈答。

陸奥国へ往にける人をいと忍びて来る人に、つとめて言ひおこせける、女

かくてのみあるめる海も同じ名を波こす磯のあらはれねかし(五七)

返し

末を越す波だになくは今こそはねはあらはれめ八十島の松(五八)

F貴人からの言問い。

かくなむあると聞きて、ある人の御もとより、彼をばいかに思ひなりぬるぞとあり

ければ、

あだ波にたえず越さるる身となりて思ひもかけず末のまつをば(五九)

G再び「遠く往にける男」との贈答。

秋ごろ物言ひそめて遠く往にける男の、九月ばかりに菊の花を文の中に入れて言

ひ侍りける

千代もとて結びし言の葉にさへや花移ろはす露は置くらむ(六〇)

返し

露むすび霜さへ今は置くれれど色も変はらでまつぞあやしき(六一)

右のDとGは三角関係をめぐる一連の出来事であり、家集前半の贈答歌群の末尾に位置する。そのため前半部のクライマックスのような印象がある。

まずDで主殿と「遠く行く男」との間で浮気や心変わりをしまいと誓い合う贈答が交わされる。しかしつづくEでは主殿は「忍びて来る男」と浮気をしており、「波こす磯のあらはれねかし」と関係をおおやけにしてほしいと訴える。そしてつぎのFでも、ある貴人から心境を問われた主殿は「思ひもかけず末のまつをば」、すなわち元の「遠く行く男」との誓いを守らない意思を答える。しかし最後のGで主殿は「遠く行く男」から心変わりを問いただされ、「色も変はらでまつぞあやしき」と元の男性に変わらぬ思いを訴える(5)。

家集前半の恋の各歌群に関して、針本正行氏は「陸奥国の男への裏切り行為」、「愛の変転」、久保木寿子氏は「概して、主殿の強気な様」、「主殿の覚めた反応」等と指摘する(6)。たしかに両氏の指摘も首肯されうるものであるが、家集から読み取れる主殿の心情や立ち位置という点について、稿者は『源氏物語』の浮舟に共通する要素を捉えておきたい。

家集全体の狂言綺語観からは、主殿の軽薄さや多情さへの自嘲が匂わされている。しかし前半部における実際のやり取りは、間遠をうらむ贈答と懸想を拒絶する贈答、そして三角関係でゆれ動く贈答の三パターンに限られる。これらからは、男性に翻弄される受動的な主殿の姿が認められるのではないだろうか。特に三角関係の歌群は、主殿が浮舟のように二人の男性から迫られ、板挟みに苦悩しているように見受けられる。「波こそ磯のあらはれねかし」とは不誠実な男性への訴えであり、「色も変はらでまつぞあやしき」とは板挟みの苦悩の吐露であると思ふべきではないだろうか。

男女の三角関係というモチーフは生田川伝説等、浮舟以外にも存在する。しかし、後述するが主殿は出家事件を起こした上に男性達から懸想されつづける等、浮舟とのさらなる共通点がある。出家時の七九番詞書「三界の中に流転して」という仏典の引用も、『源氏物語』手習巻の「流転三界中」(⑥三三九頁)と共通している(7)。「主殿集」の成立は、浮舟の物語から影響を受けた『更級日記』や『狭衣物語』の成立と同時期とおぼしい。この点からも浮舟と主殿とのつながりを考えたくなる。

『主殿集』の内容は物語的な要素も多く、あるいは脚色も想定されるが、未だ指摘されていない問題が山積しているようである。今後一層の議論がなされるべきであろう。

ところで五六番詞書と六〇番詞書には、太線部のように「侍り」という読者を意識した敬語表現が用いられている。家集中「侍り」が使用されるのはこの二例のみであり、久保木寿子氏はここから「寛子なりを意識して纏められた部分の編入」を想定している(8)。卓抜な指摘であるが、果たして寛子等に対する読者意識は、このDとGの箇所限定されてよいのだろうか。次節以降で、後半部の贈答歌群のうち、恋との関連を認めうる箇所を確認し、読者の関心という問題へ敷衍していく。

三 後半冒頭のみずから髪を切る歌群

家集後半の贈答歌群は、主殿のみずから髪を切るところから始まる。この点恋の問題と密接に結び付くと考えられるため、少し詳しく引用する。

Hみずから髪を切ること及びその後の喧騒。

からうじて明けぬれば、さるべきところの簾うちおろして、数珠の緒の絶えたるを、挿げへやるところに

玉の緒の命も知らず急げども今日あま舟に乗りはじむべし(八二)

されど、例のたはぶれごとぞと思ひけらし

持仏のお前にて、鏡にあててわづかなる髪を缺むに、理しらぬ涙やかかりけむ
いとどしく憂き身の影は増鏡いかに定めておつる涙ぞ(八二)

からうじて見つけて、親なりける人もあさましと、程々にしたがひては惜しみけれど、何しるしあることならねば、そのわたりの寺の大徳たち集めて、みな誠々しくしはて
て……

※命——いろいろ(底)

紙幅の都合で省略したが、後半の贈答歌群は七九番詞書「またある本文にいはく、三界の中に流転して……とあるに思ひたつに……」と始まり、八一番で知人に出家の決意を告げ、八二番詞書で「わづかなる髪を缺む」と、みずから髪を切る場面につながる。その後は親が事態に気付き、あわただしく事後の処理がなされた。

主殿は「ある本文」、すなわち仏典の一節に心を寄せて出家に至ったとあるが、主殿の出家願望は八一番左注「例のたはぶれごと」というように、日常的に吐露されていたらしい。出家願望を匂わせること自体は『源氏物語』等にも頻出しており、直接的な出家の原因としては違和感をおぼえる。仏道への傾倒や日常的な出家願望は、実際に出家に踏み切る理由とは区別して考えるべきではないだろうか。

主殿がにわかに出家した理由は、家集中に書かれていない。先行研究では神谷敏成氏は「寛子崩御」を、久保木寿子氏は「不如意感・無常感」を想定しているが、いずれも疑問が残る。当時の女性が、果たして右のような理由でみずから髪を切るだろうか。この出家事件は、『主殿集』という作品においてどのように解釈されるべきだろうか。

当時の女性がみずから髪を切る事例は史料・物語ともに複数確認でき、参考となる(9)。引用にあたり割注は(〜)で示した。

①『小右記』天元五年(九八二)四月九日条 尊子

伝聞、昨夜二品女親王(承香殿女御)、不使人知、蜜親切髪云々、或説云、邪氣之所致者、又云、年来本意者、宮人秘隠、不云実誠……

※「内後、火災により「火の宮」とあだ名される『栄花物語』①一〇六頁)／叔父光昭の死去により内裏退出(『小右記』天元五年四月三日条)

②『小右記』長徳二年(九九六)五月二日条 定子

(前略)——伊周の搜索・隆家の捕縛) 后昨日出家給云々、事頗似実者……

※「宮は御缺して御手づから尼にならせたまひぬ」(『栄花物語』①二五〇頁)

③『小右記』小記目錄第一六寛弘九年(一〇二二)閏一〇月一日 元子

同年閏十月十一日、右大臣女御、自切髪、為尼事、

※「右大臣聞きたまひて、(中略)手づから尼になしたてまつりたまふ」(『栄花物語』②一九頁)

④『小右記』寛仁元年(一〇二七)十一月三日条 当子

……前斎宮依病為尼(此親王、故院御存生時、為三位中将道雅被密通……)

※「(悲恋ニヨリ)御手づから尼にならせたまひぬ。またあはれに昔の物語に似たる御事どもなり」

(『栄花物語』②九六頁)

⑤『大和物語』一〇三段 武蔵

人もいひければ、心憂く、くやしと、思ひて泣きけり。(中略)いと長かりける髪をかい切りて、手づから尼になりにけり。

(三二五・三二六頁)

※「いと長き髪をかき撫でて、尼に挟みつ」(『平中物語』五三一頁)

⑥『狭衣物語』卷三 今姫君

……「尼になれ」と言ふを、とく聞かずは、つひにいかがしなされんと恐ろしければ、人の思ふらんことの恥づかしきなどにえあらで、尼になりなんと思ひたまひて、櫛の箱なる銚を取り出でたまひて、(中略)昔物語に、憂きことのあるには、さこそしけれど、ほの聞きし思ひ出でらるれば、泣く泣く、ここかしこしどけなく削ぎ落したるに……

(②七三頁)

①～④はいずれも『小右記』と『栄花物語』両方に確認できる事例である。①②は後見を失った后妃の事例、③④は密通及び恋の破局の事例である。資料間で内容に食い違いがあるが、事実がどうであったかはここで問題にしない。重要なのは、彼女達が置かれた状況が、みずから髪を切るという言説と結び付けられて記録されているということである。

⑤は武蔵と呼ばれる女房が男にひどい捨てられ方をしたと思ひ出家する事例であり、「人もいひければ」と外聞を気にする様も描写される。⑥は密通のような状況を母代に発見され、「尼になれ」と責められた今姫君が出家する事例である。今姫君は浅薄なため外聞を気にすることもなく、昔物語に見える「憂きこと」の場面を思い出して出家に至った。

加えて、先行研究¹⁰⁾において類例と位置づけられることはなかったが、『源氏物語』夕霧巻の「そのころは、御銚などやうのものはみなとり隠して、人々のまもりきこえければ(中略)人聞きもうたて思すまじかべきわざをと思せば、その本意のごともしたまはず」(④四六四頁、『夜の寝覚』巻五の「かばかりおぼすには、手づから削ぎやつしたまひてむを、いかがせむ」(四七五頁)の二つも参考となろう。

それぞれ、母に死なれ、夕霧と望まぬ再婚を強いられる落葉の宮の事例¹¹⁾と、生霊事件に苦慮していた折、父に密事を知られた寢覚の上の事例である。いずれも実行には至らないが、みずから髪を切る行為が苦境や外聞と関わっている点が看取できる。

以上の事例は、社会的状況のわずらいや苦境、男女関係のトラブルが共通する傾向にあるといえる。身分に拘わらず、それらは外聞の悪さという問題とも結びついていた。

それでは改めて主殿の出家事件に立ち戻りたい。これらを踏まえると、出家の原因としては「寛子崩御」や「不如意感・無常感」を想定するよりも、社会的状況や男女関係を想定すべきかと考えられる。当時の女性は、差し迫った問題によりみずから髪を切っている。

そして、出家時の主殿に差し迫っていた問題には、前節で確認した男女の三角関係を想定すべきではないか。二人の男性の板挟みに苦慮し、貴人等の人聞きの問題も加わるといふ状況は、みずから髪を切る原因としてふさわしい。

また、前半の贈答歌群が男女の三角関係で終わり、後半の贈答歌群が出家事件で始まるという配列も示唆的である。当然ながら二つの間には四華引用歌と中序が挟まるが、三角関係と出家事件は時系列において隣接している。この点からも因果関係が読み取れよう。

このように考えると、従来「出家後の詠」を集めたとされていた後半部は、男女関係を発端としたスキヤンダラスな出家事件から始まっていると捉え直すことができる。前半部の三角関係と同様、この事件が周辺の興味関心を惹いたであろうことは想像に難くない。

次節では引き続き、出家事件以降の恋の要素を検討する。

四 後半の男性達との贈答歌群

出家事件以降、主殿は尼となるが、依然として男性とのやりとりがつづく。
I ある男から隠れる。

又ある男、今はひたぶるになれば、きて見むとてかくなむ
身をやつすあまの羽衣思ひたちいかなるふしに染めて着るぞも(九二)
返し

うきふしにかねて染めてし衣手は今始めたる色ならばこそ(九二)
隠れたりけるを、見て、男
いにしへにあはれと物を思ひしは君を見ずてのことぞありける(九三)
返し

やつるれど椎のはごろも何ならず三室の山の飾りと思へば(九四)
例のありさまにて、枕のありければ、あはれにて

とことには打ち払ひつる敷妙の枕の塵に今は穢れじ(九五)

※なれ——たれ(底) 染めて——そふて(底)

J 橘の贈答をする男に髻を返す。

ある男、橘をおこせて、いかが言へりけむ
橘のかばかり今はなれる身に何に昔と思ひいづらむ(九六)
返し

橘の昔を夢に忘れぬはかくながらにもならむとぞ思ふ(九七)
この男のもとにさるべき物どもやりける中に、髻の末のありけるを包みて、ただか
く

思い出のなほしもうさの社には心短かきかみも留めじ(九八)
返し

神代より契り置きてし行く末をかへす人こそうさまさりけれ(九九)

※橘を——たちはな□(底) 社——やし□(底)

Iは、主殿に会おうと訪れた男性から逃げ隠れた際の贈答である。九五番で主殿はいつも通りの枕を見て、「枕の塵に今は穢れじ」と決別の意志を詠むが、これは共寝や身体感覚を意識させる詠み振りでもある。尼としては不似合いな官能性が認められよう。

Jは橘をよこした男性に歌を送ったところ、「かくながらにもならむ」、すなわち尼姿であっても慣れ睦びたいと返歌される贈答である。さらに主殿は九八番詞書のように、昔もらった「髻の末」を送り返すが、やはりこれも官能的といえる行為であろう。

また右のIとJの他に、主殿は八九・九〇番と一〇八・一〇九番でも他の男性達と歌の贈答をしている。多くの男性達から出家を惜しまれ、つきつきとアプローチされること自体も、贈答歌群における恋の要素と見なすべきである。

ちなみに同時代の物語では、尼姿の女君達がしばしば恋と関わる。『浜松中納言物語』の

尼姫君は男君と夫婦のように暮らし、『狭衣物語』の女二の宮は迫る男君から逃れ、仏間に立て籠もるといふように、それぞれ特殊な状況に置かれている。『主殿集』もさながら物語のような展開であるが、尼姿というモチーフは、あるいはこの時代の恋物語をめぐる興味関心を示唆しているかもしれない。

以上、家集後半の男性達との贈答歌群を検討した。従来「出家後の詠」とレットルを貼られていた後半部は、前節で見たスキヤンダラスな出家事件から始まり、本節で見た官能的ともいえる男性達との贈答を有するものだった。家集後半の贈答歌群は全五二首であり、恋に関する歌群は出家事件の七九〇八四番も含めれば一九首、全体の約三五パーセントになる。『主殿集』は前半においても後半においても、恋の要素を多く有しているといえよう。

そして、前半の三角関係、後半の出家事件と男性達との贈答という一連の出来事は、いずれも周囲の興味関心を惹くものだったのだろう。主殿は非常に手の込んだ家集を編める歌人であり、仏道信仰的なテーマを用いながら、手元にあった恋の歌稿等をシンメトリカルに編むことができたのだと考えられる。序跋に仏典を利用したように、贈答歌群も物語等を意識しながら、ないしは利用しながら、主家周辺の読者の関心に応える構成をとったように見受けられる。読者側の期待と作者側の企図は、ある程度連動していただろう。

次節では、家集の成立事情と主家周辺の機運を考え併せ、まとめたい。

五 まとめ——主家周辺の歌集重視と併せて——

『主殿集』はここまで見てきた通り、前半の「恋と社交生活」、後半の「出家後の詠」いずれにも恋の要素を含んでいた。それらは一連の出来事であり、周囲の興味関心を惹くような話題性を持っていたとおぼしい。

『主殿集』の研究は従来、主殿の仏道信仰を特別視する状況にあった。その姿勢はたしかに首肯されうるものではある。ただ一方で、家集の成立事情を考えると、主殿の話題性及び主家周辺からの働きかけという問題にも着目すべきではないだろうか。贈答歌群を見るに、主殿の恋の事情について、主家である皇后寛子の周辺から話題の提供と記録が求められ、主殿がそれに応えて家集が成立したという経緯が想定される。それは、先述した前半末尾の局所的な求めではなく、むしろ家集全体にわたる求めだったと考えられる。

最後に、『主殿集』と皇后寛子周辺の文化的風潮とを考え併せたい。寛子周辺では歌集を重視する風潮があったとおぼしく、『四条宮下野集』には歌集に関する事例が多数登場する。自身の家集編纂の経緯を説明した序文「……「越えずはのちの」と思したる人の「思ひいでて書きつけよ」とあるにもよほされて書きつくれば……」は有名であるが、他にも一二番詞書「後撰の上下巻、因幡のきみふたり書かせさせおはしますに……」、二六番詞書「馬の頭師基、「殿へ召すにだにまゐらぬもの見せむ」とて、おほちの入道のえりたる万葉集の、秋の巻のみおこせ給ひて……」、一五四番詞書「津の守師家、入道の一品の宮の書かせ給へる万葉集の抄を得させ給ふとて……」、一九五番詞書「我そむきてのち、大納言経長、金玉集

借り給ふとて……」の四例が見える。

『後撰集』などは寛子の命による書写活動の事例であるが、いずれからも下野達が家集の披見、収集に積極的であったことがうかがえる。『主殿集』がこのような環境で成立したことは留意すべきであろう。主殿の身の上は仮名日記とならず、仏道信仰の表白も経典とならず、それらは特異な家集として結実した。これには、女房として出仕していた寛子周辺の歌集重視の機運が関係しているのではないかと考えられる。

『主殿集』は権威ある選集ではないし、女房家集としても特異な様相を呈する。しかし、いわゆる寛子サロンが『主殿集』のような手の込んだ家集を擁することは、他の文芸活動と同様、対外的な文化的権威の誇示に一役買ったのではないだろうか⁽¹²⁾。話題の提供と記録と、対外的な文化的権威の誇示とは、両立しうるものだろう。

『主殿集』の研究は、未だ手つかずの問題が多く残されている。本章は贈答歌群の解釈と主家周辺の問題を主に扱い、詠歌そのものの研究にはあまり踏み込めなかった。前半末尾の詠歌に見えた主殿の心情や境遇のように、家集の理解には歌の解釈も不可欠である。また全一三〇首の新たな注釈作業や、『更級日記』等の同時代の浮舟受容との関わりから、明らかになることもあるだろう。それらは今後の課題としたい。

※引用本文は、漢文日記は「大日本古記録」に、また凡例に挙げた作品以外の物語は「新編日本古典文学全集」にそれぞれ拠った。

注

- (1) 冷泉家時雨亭文庫編『平安私家集一』（朝日新聞社、一九九三年）。
- (2) 冷泉家時雨亭文庫編『平安私家集六』（朝日新聞社、一九九九年）の田中登氏の解説。
- (3) 今西祐一郎『主殿集』試論（『国語国文』第四六巻第一号、一九七七年一月）、久保木寿子『主殿集』瞥見——構成と条宮主殿集新注（青簡舎、二〇一一年）の「解説」（初出は久保木寿子『主殿集』瞥見——構成とその意味——（『並木の里』第四四号、一九九六年六月）。
- (4) 針本正行「平安女流日記の終焉——四条宮家の女房日記『主殿集』を素材として——」（『日本文学論究』第五五冊、一九九六年三月）は家集前半部の局所的な指摘であるが、『主殿集』の恋の問題を扱った先見的な論稿である。ちなみに他の『主殿集』関連の先行研究に、神谷敏成『主殿集』考（『北海道自動車短期大学研究紀要』第七号、一九七九年八月）、山本淳子「指示副詞「かく」使用歌による歌群表現——『古今集』『和泉式部統集』『四条宮主殿集』における——」（『国語国文』第七〇巻第二号、二〇〇一年二月）、久下裕利「王朝歌人と陸奥守」（『学苑』第八九一号、二〇一五年一月）がある。
- (5) 「色も変はらで」を前掲(4)針本論文は「心変わりしないなど不可避である」と解し、前掲(3)久保木注釈は「自らの変わらない思い」と解する。語意から「心変わりしていない」という表明と見て、久保木説を採った。
- (6) 前掲(4)針本論文、前掲(3)久保木注釈。

(7) ちなみに前掲(3)久保木注釈は「三界の中に流転して」の他例として『源氏物語』の手習巻や『平家物語』の維盛出家の段を挙げる。

(8) 前掲(3)久保木注釈。ちなみに一七番詞書「……墨など賜ひて、ある人のたまひし」や三四番詞書「ある人の「久しう長居す」とて……のたまへりし」のように、主家や上臈とのやりとりとおぼしい贈答も散見される。文筆に関わる墨をもらったり、出仕を望まれたりと、主殿は気に入られていたようである。

(9) 藤森祐「平安時代物語に見える女性の出家について」『紀要』第一号、長野県短期大学、一九五七年一月)、小林美和子「王朝物語における出家描写について」『国文学攷』第一一四号、一九八七年六月)、栗原弘「平安時代の出家と離婚について」『日本宗教文化史研究』第一卷第二号、一九八七年十一月)、三橋正「女の出家」『人物で読む『源氏物語』第一五卷——女三の宮』勉誠出版、二〇〇六年)等。

(10) 前掲(9)諸論稿。

(11) 三田村雅子氏の教示による。

(12) 前掲(3)久保木注釈は、藤原頼通の蒐集活動と『主殿集』の関連を検討している。首肯されるべきであるが、稿者は頼通だけでなく、特に寛子周辺の事情にも着目すべきかと考えている。ちなみに頼通の蒐集事業に関する研究に、上野理「納和歌集等於平等院経蔵記」『後拾遺集前後』笠間書院、一九七六年)、和田律子「晩年の蒐書と『更級日記』」『藤原頼通の文化世界と更級日記』新典社、二〇〇八年)、後藤昭雄「納和歌集等於平等院経蔵記」私注」『成城国文学』第二九号、二〇一三年三月)等がある。

第五章 後冷泉朝における后妃文芸圈と

内親王文芸圈の位相

後冷泉朝の気風は長らく、犬養廉氏の「頼通を中心とする一大血族集団であり、この世界には嘗ての一条朝に見られた如き表だつた対立はない」(1)という指摘に集約されてきた。これは当時の後宮政策と撰閣政治の様相を言い当てた一面の真理であるとともに、文芸活動においては現在でもほぼ通説となっているだろう。

その後、右の指摘に必ずしも合致しない論稿として、上野理氏の和歌六人党と撰閣家との微妙な距離感を論じたもの(2)や、和田律子氏の後冷泉天皇の文芸活動を論じたもの(3)、高橋由記氏の章子・寛子の二后同殿を論じたものと、その二后間で女房の交流が見られないことを指摘したもの(4)等がしばしば発表されるようになる。やはり、融和的とされる後冷泉朝にもそれなりの懸隔や起伏のようなものがあったことは明らかである。

本章は後冷泉朝の文芸活動を、后妃文芸圈や内親王文芸圈といった每家毎の女房集団に着目し、それらと比較する。それぞれの文芸圈で成立した作品群に、何らかの差異はあるのかという問題を検討したい。周知の事例を繋ぎ合わせ、後冷泉朝の文芸活動を総体的な視点から捉え直すことで、每家毎の特質の一端を明らかにできればと考えている。

後冷泉朝の文芸圈と伝存作品を簡略に示すと、つぎようになる。作品名等のみ伝わる散逸作品も含めた。この時代は歌合の開催が多く、内裏歌合や寛子皇后の春秋歌合、祐子内親王の六度の歌合、祿子内親王の物語歌合を除く二四度の歌合等も確認できるが、行事は伝存作品と性格を異にするため、今回は割愛した。

・後冷泉天皇

『大式三位集』

・章子中宮

『出羽弁集』

・祐子内親王

『更級日記』『浜松』『寢覚』『朝倉』(散逸)『みづから』(散逸)

『紀伊集』『小弁集』(散逸)

・歛子女御

・祿子内親王

物語歌合の一八篇の物語(ほぼ散逸)

・寛子皇后

『下野集』

『狭衣物語』

『康資王母集』

『主殿集』

一見して、后妃達には家集が、内親王達には物語が目立つ印象を受ける。

以下具体的に、作品が伝存しない歛子を除いた祐子、祿子、章子、寛子の四人を順に確認する。伝存作品と、文芸活動の特色をうかがわせる資料を対象とする。その際に、右の家集

と、物語ないしは日記というジャンルの問題に着目したい。なお章子等の后妃の地位の表記は、それぞれ便宜上「章子中宮」「歛子女御」「寛子皇后」で統一した。

一 祐子内親王家

祐子内親王は後朱雀天皇皇女で母は姫子中宮、妹に祿子内親王がいる。幼くして母姫子を失い、藤原頼通養女となった。祐子のもとでは頼通の庇護により、幼少期から華やかな文芸活動が行われた。

本節では、菅原孝標女の『更級日記』及び四つの物語と、紀伊の家集を見る。

祐子家でまず挙げるべきは、菅原孝標女と彼女の作品群だろう。御物本『更級日記』の仮名奥書に「ひたちのかみすがはらのたかすゑのむすめの日記也（母倫寧朝臣女）／傳のとののははうへのめひ也／よはのねざめ みつのはままつ みづからくゆる あさくらなどはこの日記の人のつくられたるとぞ」とあり、この日記及び四つの物語が彼女の作と伝わっている。

『更級日記』は「昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり」（二九八頁）物語を耽読し、のちに「昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひて、おこなひをせましかば」（三五七頁）と悔恨される通り、物語を愛好した半生記が描かれる作品である。物語作者という立場から読者に向けて日記が執筆されているという見方もあり（5）、物語への執心が丁寧に記述されているとともに、『源氏物語』や他の物語作品の引用も多い。

この孝標女が仮名奥書に記された『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『みづからくゆる』『朝倉』の作者であった場合、祐子家では相当な数の中・長編物語が成立し、伝存したことになる。『夜の寝覚』と『浜松中納言物語』は、欠巻はあるものの現存しており、作者説の是非については池田利夫氏がやくにまとめている（6）。稿者は同一作者説を支持している。『みづからくゆる』『朝倉』は散逸しているものの『風葉和歌集』にそれぞれ一〇首と二〇首（7）入集しており、ともに中世まで伝存した中編以上の物語だったとおぼしい。散逸作品の作者説については松尾聰氏等が論じている（8）。

つぎに紀伊だが、母の小弁とともに二代にわたり祐子家に仕えた女房であり、家集が伝存する。『紀伊集』には、題詠や定数歌、折々の詠等が記録されている。その中には、「宇治殿に渡らせおはしましたりしに、宇治の里に住みてゐたる宮の女房」（二九番詞書）等のような女房らしい主家周辺の記録もあり、注目される。

そして他に、二〇番には物語に寄せて詠んだ和歌があり、こちらも注目されよう。

『月待つ女』といふ物語を見て

いにしへの月待つ里を見るにこそあはれうきよはたぐひありけれ

『月待つ女』は散逸物語で、『枕草子』にもその名が見える。絵を見て歌を詠む行為が頻繁に確認できる一方、このように物語に寄せて和歌を詠む、ないしは物語を題にして詠むという行為が確認できる資料は、僅少である。後世の『実材母集』には多くの事例が見られるも

の(9)、後冷泉朝期では『弁乳母集』の「生田のうみに身投げたる女の懸想人の二人ながら落ち入りたるを、人々詠みしに」(六九番詞書)と、その子の『顕綱集』の「源氏を人にかりて、返しやりける」(四一番詞書)がある。『弁乳母集』は生田川伝説自体を歌題としたものか、『大和物語』一四七段の「生田川」を踏まえたものか、定かではない(10)。

物語を題とする詠歌行為が当時珍しいものだったとはただちに断言できないが、少なくともそれを家集に残すという行為は珍しいものだったと考えられよう。紀伊は主家周辺の記録を残した他、物語に通じ、関心が深かった可能性がある。紀伊の母は祐子家女房の小弁であり、後述の物語歌合で『岩垣沼の中将』の提出が遅れた際、頼通に「かの弁が物語は見所などやあらむ」(『後拾遺和歌集』八七五番詞書)と期待されるほどの物語作者であった(11)。

ちなみに祐子家女房の家集として、小弁の集の存在も『紀伊集』に確認できる。

七条宮の四条殿、故小弁が集を借りて、埋み火といふところに歌はなきに書きつけられたりし

もろともに君もはかなく消えにけり埋み火いかでけぶり立ちけむ(二五)

返し

かけていへば驚かされて埋み火の消えにしことはきさてかなしき(二六)

歌のやり取りの内容から、小弁が死んだのちに「七条宮の四条殿」なる人物に貸与したと考えられる。『小弁集』と呼べるほどの家集が存在したのか、どの程度人々に披見されたのかは不明だが、祐子家の作品の一つとして候補に入れるべきだろう。

以上、散逸したものも含めると、祐子家では『更級日記』、『夜の寝覚』、『浜松中納言物語』、『みづからくゆる』、『朝倉』、『紀伊集』、『小弁集』が確認できた。散文作品と家集とどちらもあったが、孝標女、紀伊、小弁いずれも物語という要素と積極的に関わる女房達であった。

二 祿子内親王家

祿子内親王は前節の祐子妹で、同じく頼通養女となった。ただ祐子と違い寛徳三年(一〇四六年)に齋院に卜定され、病による辞任まで一二年間務めた。この点は祐子が頼通のもとで大変にかしずかれていたのと対照的である。

本節では、いわゆる物語歌合の諸物語と『狭衣物語』を見る。

まず物語歌合だが、天喜三年(一〇五五)五月三日、あるいは五日に催された行事である。『栄花物語』巻第三七「けぶりの後」には「物語合とて、今新しく作りて、左右方わきて、二十人合などせさせたまひて、いとをかしかりけり」(③四〇二頁)と、新作物語が二〇人によつて作られたとあるが、実際の資料には一八作品しかない。

これが「物語」というジャンルを扱った催しとして画期的であったことは言を俟たないであろう。久下裕利氏は、物語歌合が物語作者を和歌の詠人と同じ次元に引き上げたとまで述べるが(12)、いずれにせよ祿子家の物語歌合が物語創作の機運の高まりによるものであり、それをけん引もしたであろうことが推察される。参加者には、前節で見た祐子家の小弁や、

次節で見る章子家の出羽弁等他家の女房達もおり、規模の大きさや他家への影響力等も相
当なものであったかと予想される。

提出された物語はほぼ散逸しているが、『堤中納言物語』に収められた唯一の現存物語『逢
坂越えぬ権中納言』や、『無名草子』に取り上げられ『風葉和歌集』にも一三首入集してい
る『玉藻に遊ぶ権大納言』等が注目される。後者は、『狭衣物語』作者の宣旨が作者である。

つぎに『狭衣物語』だが、藤原定家の『僻案抄』等により源頼国女の宣旨が作者とされる
長編物語である¹³。中世以降は『源氏物語』に次ぐ物語と評価されており、成立当時から
高い評価を受けていたのではないかと推察される。

『狭衣物語』の特徴の一つに、和歌や物語の引用が頻出することが挙げられる。当時にお
いて、引歌や歌語的表現は珍しいものではないが、作品名や登場人物名を用いて先行する物
語に言及する引用方法は珍しい。『源氏物語』が引用する「交野の少将」(野分巻、③二八三頁)
や『浜松中納言物語』が引用する『大井の物語』(三三四頁)といった同様の例もあるが、『狭
衣物語』は「光源氏」(①一七頁)、「仲澄の侍従」(④二〇頁)、「宰相中将」(同頁)と、枚挙に遑
がない。これは物語歌合に代表されるように、禊子家が物語に長じた宮家だったことが要因
かとも考えられる。

以上、禊子家では物語歌合とその一八編の物語、『狭衣物語』が確認できた。禊子家は資
料に見えるだけで二五度の歌合が確認できるが、女房の家集は一つも伝存していない。この
点は本章のまとめで再び触れたい。

三 章子中宮家

章子は後一条天皇皇女で、母は藤原道長女の威子である。長暦元年(一〇三七)に親仁親王
(後冷泉天皇)のもとに入内した。内親王であったが、道長外孫ということもあり撰閲家に後
見された。『栄花物語』には頼通が袴着の儀を差配した記事(巻第三二「殿上の花見」③一九〇
頁)や、彰子に厚く庇護された記事(巻第三三「きるはわびしとなげく女房」③二七一頁)等が見え
る。子は成さなかった。

本節では、章子家を代表する出羽弁の家集と諸活動を見る。出羽弁は「この出羽弁、いと
をかしうすきものなるものから、有心なること。出羽の匂ひにや、宮のやうもことになんあ
る」と「殿上の人々」に言わしめるほどの才媛であった(『栄花物語』巻第三四「暮まつほし」③
三二六頁)。また公の挨拶の歌もよく詠み、章子入内の際、東宮から氷の扇を贈られた返しと
して「君が世にあふぎと見れば氷すら千世をかねてぞ結び貫く」(同二九五頁)や、威子を偲
ぶ返歌として「春の日にかわかざりせば古の袂ながらや朽ち果てなまし」(同二九七頁)を詠
んでいる。

まず『出羽弁集』であるが、基本的に宮中や里居の折に知人と贈答した歌が多く収められ
ている。その中で注目すべきは、女房という立場から主家周辺の記録を行ったとおぼしい歌
群である。

章子が中宮大夫藤原長家の邸宅に方違えした折の記録である五一番く七七番の歌群は、五一番の長い詞書から始まる。

御方違へに、大宮殿に渡らせ給ふこと六月十よ日、泉の涼しげさ、木高き松の年経りにける梢など、ただにて過ぐさせ給ふ所のさまならず。七月七日など必ず御遊びありぬべきほどなるを、ことごとしかべきほどにあらねど、その日思ふさまならずあたり^マけるを、ただけしきばかりとてよき日なりけるを、権大夫正のすけなどさるべき人々少し参りたまて、庭の松いくらの年をかかぎれるといふ題を、但馬の守実綱出だしたるを、殿人々いとう詠み集め給へめるに、女方もことさらに一つに出だせと、にはかにはべしかば、宣旨殿

ここからは晴の場の仮名文による記録という性格がうかがえる。この歌群では邸宅を称賛する歌を多数記録する一方、かねてより期待していた七夕当日に強風が吹き、大事になったことなども「……暮れゆくままに、まことの野分になりて（中略）ただひたみちに恐ろしくのみなりて……」（五五番詞書）と詳しく記録されている。

この歌群は、家集成立以前に単独で人目に触れることがあつたらしく、のちに「この大宮殿のほどのことども書き集められたりけるを、左衛門の内侍の伝へて、相模の君に見せ給へりければ、例のいみじきこちたき言葉どもになん愛づる……」（八三番詞書）と書かれている。この詞書は解釈が難解な箇所であるが、左衛門の内侍が相模に歌群を見せ、そのどちらかが大仰にほめそやしたということであろう¹⁴。出羽弁の著述が人々の目に触れ、関心を持たれたことがうかがえる。

これには類似の例がある。『栄花物語』巻第三四「暮まつほし」には、章子家女房達の威子を偲ぶ歌が、「さうし」となって彰子家女房に披見されたという記録がある。

秋の月隈なきに、人々歩いて見るに、南殿へ上らせ給ひし長橋の朽ちたるを見るもあはれにて、（哀傷歌三首省略）また、宴の松原にて（哀傷歌一首省略）など言ひ集めたることども書きたるさうしを、院の女房の「見む」とありければ、奉りたるに、書いて押しつけられたる……（③二九八・二九九頁）

この「さうし」は「冊子」と考えられ、制作者はわからないものの、体裁はある程度以上整っていたと考えられる。

つぎに、出羽弁の物語創作であるが、彼女は前節の裸子家の物語歌合に五番左で『あらば逢うよのと嘆く民部卿』を提出している。これ自体は出羽弁に物語を創作する能力があつたことを示しているが、さらに歌合資料の末尾に『岩垣沼の中将』を遅れて提出した小弁との贈答が載る。

岩垣沼のがり

中宮の出羽弁

五月聞おぼつかなきに紛れぬは花橋の香りなりけり（一九）

返し

橋の香りすぐさずほととぎすおとなふ声を聞くぞ嬉しき（二〇）

又

ひきすぐし岩垣沼の菖蒲草思ひ知らずも今日にあふかな(二二)

返し

君をこそ光とおふに菖蒲草ひき残すねをかけずもあらなむ(二二)

これら等から、久下裕利氏がすでに想定している通り⁽¹⁵⁾、出羽弁は物語歌合において何らかの重要な役割を担っていたのではないかと考えられる。他家主催の物語歌合で仕事を務めていたならば、出羽弁の物語に対する造詣は相当なものだっただろう。

出羽弁と物語創作に関しては、『栄花物語』にさらなる問題がある。『栄花物語』の続編は、出羽弁の和歌の頻出等から、出羽弁作者説が長らく唱えられてきた。現在、作者説は否定される傾向にあり、資料提供者説等の展開も見えるようである⁽¹⁶⁾。単独作者でないにせよ、出羽弁が続編の成立に関わっていたならば、やはり彼女の記録者としての能力や、散文創作の能力が高かったことが示唆されるのではないか。

以上、章子家では出羽弁の家集の記録性とその流布、及び他家での散文創作の状況について確認した。章子家は、出羽弁による長家邸の記事や威子を偲ぶ詠歌群を和歌の記録として形にし、他家にも披見させていたようである。しかし、出羽弁のような物語及び記録に精通していたとおぼしい女房を抱えながら、宮家を代表するような散文作品が残らなかったのはなぜだろうか。例えば、『枕草子』や『紫式部日記』、あるいは『源氏物語』のような、後宮において権威を示しうるような作品である。稚拙な作品ならば散逸しても不思議はないが、祿子家で提出された『あらば逢うよのと嘆く民部卿』は『風葉和歌集』に四首入集しており、中世までは確かに伝存して相応の評価を受けている。この章子家と散文作品の問題は、やはりまとめで触れたい。

四 寛子皇后家

寛子皇后は、頼通女で、母は具平親王女(あるいは孫)祇子である。永承五年(一〇五〇)に後冷泉天皇のもとに入内した。『栄花物語』には「皇后宮にもよき女房参り集まり、はなばなとめでたくおはします。御おぼえも時世に従ふのみにあらず、いみじうおはします」(巻第三六「根あはせ」③三七六頁)等と見え、良い女房を抱え、天皇の寵愛も厚かったようである。

本節では、筑前(康資王母)、下野、主殿の三人の家集を見る。

まず筑前であるが、母に彰子家女房の伊勢大輔を持ち、家集は一般に子の名を取って『康資王母集』と呼ばれる。家集には頼通や寛子の名が見え、宮中での詠も複数収められている。特に前半部に、女房としての立場から詠まれた歌が集中する。

つぎに下野であるが、こちらの家集も女房としての立場が色濃く表れている。特に冒頭の序はつぎのように始まる。

めでたくをかしき事どもを見てのみ止むがあかずおぼえしかば、いと事ゆかずあやしうもの書きつけてありしを度々の火に失せにしかば、後々は年積もりもの憂くなりて止みぬるに、「越えずはのちの」とおぼしたる人の「思ひ出でて書きつけよ」とある

にもよほされて書きつくれば……

右は、焼失した「めでたくをかしき事ども」の記録を、寛子等の貴顕から改めて命じられたという家集作成の経緯の説明である。この言は、『下野集』が他の家集と一線を画すところである。『枕草子』のような、主家周辺の記録の姿勢がうかがえる。

家集の内容も、『康資王母集』以上に宮中や主家周辺の記録が多く、寛子家の春秋歌合の裏話（七七番左注）や、寛子に宇治への行楽参加を命じられたこと（九一番）、寛子弟の師実と、庭に密かに出入りする挑みあいをした記録（二一〇番）等、華やかな記事が目立つ家集である。『下野集』は長い詞書が頻出する傾向にあり、和歌の記録とともに出来事の記録にも気を配っていたとおぼしい。

最後に主殿であるが、伝未詳の女房である。他の女房と違い、その名は同時代の他資料からは全く確認できない。右の二人と大きく異なり、家集は独特の構成をとっている。全体一三〇首を出家の前後で六五首ずつに配列し、前半、後半ともにそれぞれ長大な序跋を付すという構成である。

さらに序跋の内容も、冒頭が「いづれの垣ほの撫子にかありけむ、身のほど知らず花にめづる女ありけり……」と始まるのに対し、末尾は「……艶なる名をとらむとにあらず、仏・経のこと編めるによりて導かれ奉らむと、書き果つるなり」と結ばれる。実際のところはともかく、浮薄な在俗時代を悔い、出家して仏道帰依したことが家集成立の経緯と書かれている。この点の解釈は本論文の第二部第四章で詳しく検討したが、いずれにせよ『下野集』とは対照的な言である。

家集の内容も、「身のほど知らず花にめづる女」と三人称化された書き手が、出家の前と後とでどのような行いをしたかという歌群が多い。出家とその前後を序破急のように配した構成も相まって、物語的な雰囲気を持つ家集といえよう。主殿は作品の執筆にあたり、日記や物語、経典ではなく、家集という形式をあえて選択したと考えられる。

以上、筑前（康資王母）、下野、主殿の家集を概観した。いずれも家集であったが、『下野集』は特に主家周辺の記録という性格が強く、『主殿集』は独特の構成を持った物語的な内容であった。たしかに、長い詞書を持つ家集は『伊勢集』や『成尋阿闍梨母集』等、他にも存在する。しかし、寛子家において記録性や物語性を持つ家集が複数伝存している事態は、やはり特殊といえるのではないだろうか。これは本論文の第二部第四章で指摘した、寛子周辺の歌集を重視する風潮とも無関係ではないだろうが、それは寛子家のみを対象とした考察である。前節の章子家も家集のみ伝存していたが、これはどのように考え併せるべきだろうか。次節ではまとめとして、ここまで見てきた四者の文芸圏を考察したい。

五 まとめ

各家の状況を改めてまとめると、散逸したものも含め存在が確認できる作品は、祐子家は『更級日記』と四つの物語、『紀伊集』、『小弁集』、祿子家は物語歌合とその諸作品、『狭衣

物語』、章子家は『出羽弁集』と威子哀傷歌の冊子、寛子家は『康資王母集』、『下野集』、『主殿集』であった。

各家の特筆すべき点をまとめると、祐子家は散文作品と家集が双方とも伝存しており、禊子家は物語に偏っており、章子家は散文にも堪能だったとおぼしい出羽弁の家集のみ、寛子家は記録的な性格や物語的な性格を持つ家集のみとなる。

これをまとめると、内親王は家集も存在するが散文、ないしは物語寄りの傾向があり、后妃は家集のみだということがわかる。后妃のもとでも、出羽弁による他家に提出した物語の存在や、散文的な要素を持つ家集等も確認できるが、それでも后妃の文芸圏で家集のみ偏重して伝存しているというとはいえるだろう。

一条朝期を引き合いに出せば、彰子家は物語・日記・家集といったさまざまな作品を伝存させているが、『源氏物語』が最たるものであることは論を俟たないだろう。定子家も女房の家集に『清少納言集』『馬内侍集』があるが、『枕草子』が何よりもまず挙げられる。両者とも、代表的な散文作品を持ちつつ、併せて家集等のジャンルも伝存させている。他に大規模な文芸圏といえ、大斎院選子も二つの御集が伝存し、歌と物語の「つかさ」を設けていたと伝わる¹⁷⁾。

さらに三条天皇の後妃では妍子中宮に仕えた大和宣旨がいるが、『本朝書籍目録』に『大和宣旨日記』という作品名が見える。三条天皇の時代にも、后妃のもとで女房日記が作られたとおぼしい。ちなみに大和宣旨は章子家女房の「大和」と同一人物かとも考えられ¹⁸⁾、日記が章子家周辺の記録という可能性もゼロではないが、呼称の違いから妍子家の女房日記の可能性が高い。

後冷泉朝期は、なぜ主家毎に作品形態の偏りが生じたのだろうか。特に后妃のもとでの伝存作品は、家集かそれに準ずる形に限られている。

この点に関しては、家集ないしは歌群の冊子という形態が、后妃周辺の記録として高い利便性を有していたことが要因の一つではないかと考えられる。日記のような形態は散文を正しく時系列でつなげる必要があり、編集や構成にあたって大きな手間がかかる。虚構を原則とする物語も記録的な仮名文と比較して、一から完成にいたるまで時間と手間がよりかかりそうである。このようなコストは制作に加えて、流布、伝存の過程においても生じるものであろう。

これまで見てきたような、章子家女房の長家邸称賛の歌群や、威子を偲んだ歌群の冊子は、主家周辺を記録して、すみやかに対外へ発信するのが容易な形態である。寛子家の『主殿集』でも、特定の歌群にのみ「侍り」と敬語表現が用いられており、久保木寿子氏が「寛子なりを意識して纏められた部分の編入」かと想定している¹⁹⁾。ここなども同様の事例の痕跡かと考えられる。

右のような形態は合理的であり、それらを集約すればコストをかけずに家集を作ることでもできよう。詠歌を集めた短めの仮名文ないし家集の流布は、その合理性から、後宮文芸の洗練された状況とすら評せるだろう²⁰⁾。

そして一方で、物語や日記といった散文は両内親王家が伝存させていた。こちらは要因を推定することがより困難であるが、幼少期から内親王という身分で関白頼通に後見されたことを勘案してよいかもれない。后妃のような身分と比較すると、やはり祐子・祿子内親王姉妹には、宮家周辺を記録する機運が相対的にはあるが生じづらかったのではないだろうか。たしかに祐子家には、主家周辺の記事を含む『紀伊集』や、公卿が臨席し漢文日記も付載された永承五年六月五日の歌合等があり、伝存作品に記録的な傾向も確認される。しかし、当時の宮廷社会における位置を勘案すれば、内親王家はより多様な性格の作品が生成されうる土壌を持っていたのではないかと考えられる。

結果として后妃の文芸圏と内親王の文芸圏とで、伝存作品の分布が家集とそれ以外とであたかも分業化されたような状態になったのだろう。これは何者かの意図的な操作ではなく、右のような事情がからんでそうなったものと考えられる。このような状況は、後冷泉朝期の女主人及び女房達の層の厚さが可能ならしめていたはずである。

※凡例に挙げた作品以外の引用本文は、「新編日本古典文学全集」に拠った。

注

- (1) 犬養廉「撰関時代後期の文学潮流——後冷泉朝文壇への証明——」『国文学解釈と鑑賞』第二八巻 第一号、一九六三年一月。
- (2) 上野理「和歌六人党と歌」『後拾遺集前後』笠間書院、一九七六年。
- (3) 和田律子「文化世界変質のきざし」『藤原頼通の文化世界と更級日記』新典社、二〇〇八年。
- (4) 高橋由記『栄花物語』の描く二后並立——後冷泉朝後宮の特徴に関連して——」『明星大学研究紀要』人文学部・日本文化学科』第一九号、二〇一一年三月)、高橋由記「後冷泉朝の後宮と文化圏——妻后同殿とその文化圏について——」『中古文学』第九一号、二〇一三年五月。
- (5) 三角洋一「文学史上の『更級日記』の位置」『古文研究シリーズ一五 更級日記』国語展望別冊N 9・四四、一九八五年五月)、妹尾好信『蜻蛉日記』と『更級日記』の執筆契機考』『王朝和歌・日記文学試論』新典社、二〇〇三年)。
- (6) 池田利夫「浜松中納言・夜半の寢覚は孝標女の作か否かの論争」『国文学解釈と鑑賞』第二七巻第七号、一九六二年六月)。
- (7) 『朝倉』のうち一首は、桂切の詞書と作者名のみである。
- (8) 松尾聰『平安時代物語の研究』(武蔵野書院、一九五五年、改訂増補版一九六三年)等。
- (9) 『実材母集』には一四一番に『源氏物語』、四一三番に「薄雲の女院」、四一四番に「狭衣の帝」、六二一番に『浜松中納言物語』、六六二番に『源氏物語』の「しなさだめ」(雨夜の品定め)が確認できる。
- (10) あるいは『大和物語』に「かかることどものむかしありけるを、絵にみな書きて、故後の宮に人の奉りたりければ、これがうへを、みな人々この人にかはりてよみける」(三七一頁)とあるので、これに倣い登場人物になり代わって詠んだ可能性もある。

- (11) この母娘や『月待つ女』に関しては、寺本直彦「祐子内親王家紀伊と源氏物語 付『月待つ女』物語 について」(『源氏物語受容史論考 続編』風間書房、一九八四年)に詳しい。
- (12) 久下裕利「挑発する『寝覚』『巢守』の古筆資料——絡み合う物語——」(横井孝・久下裕利編『王朝文学の古筆切を考える——残欠の映発』武蔵野書院、二〇一四年)。
- (13) 小町谷照彦・後藤祥子校注・訳『狭衣物語①』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九九年)の後藤「解説」等に詳しい。
- (14) 久保木哲夫『出羽弁集新注』(青簡社、二〇一〇年)に詳しい検討があり、久保木氏は相模ではなく左衛門の内侍がほめたと解釈している。
- (15) 久下裕利「第一部 王朝物語官名形象論——物語と史実と 第一章 民部卿について」(『王朝物語文学の研究』武蔵野書院、二〇一二年)。
- (16) 山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進校注・訳『栄花物語①』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九五年)の「解説」にまとめられている。
- (17) 九六番に「物語のきよがきせさせ給ひて古きはつかさの人に配らせ……」とあるのによるため、新作の物語も創作していたのか、既存の物語を書写や清書だけしていたのか、確定できない。
- (18) 『栄花物語』卷第三五「くものふるまひ」の「大和」(③三二六頁)や、『出羽弁集』七番詞書の「やまと」、『為仲集』七四番詞書の「中宮のやまとのきみ」等。
- (19) 久保木寿子『四条宮主殿集新注』(青簡舎、二〇一一年)の二二四頁。
- (20) 家集的な形態が原則として合理的である一方、『主殿集』のような、家集の形態に仕上げるために大変な手間がかかるような作品も存在する。本章の考察はあらゆる大小の事例に対するものではなく、後冷泉朝期の大きな傾向に対するものである。

終章

ここまで、『更級日記』を含む後冷泉朝前後の文芸の問題を、さまざまな点から論じてきた。本論文において、文芸の生成と同時代の享受がいかに究明されたのか、まずは各章の成果を確認したい。

【第一部】『更級日記』と孝標女の時代』では、『更級日記』という作品及び菅原孝標女という作者が、主家である祐子内親王家の周辺や、『源氏物語』等が十分に流布した文芸圈において、同時代の読者等と深く関わりあいながら存在していた様相を明らかにした。

【第一章】『殿の中将』藤原長家と祐子内親王家』では、藤原長家が孝標女の仕える祐子家別当になっていたことや、和歌に執心していたこと等から、長家が祐子家にとって重要な印象深い人物であり、日記を読者達により親しませる要因となったことを論じた。

【第二章】『浮舟と「隠し据ゑ」——『浜松中納言物語』との相互性——』では、『更級日記』と『浜松中納言物語』が「隠し据ゑ」をめぐる相関性を有していることから、それが当時の読者達に互いを想起させあうような効果をもたらし、かつ孝標女の『源氏物語』に対する意識の表れとしても注目されただろうと論じた。

【第三章】『長谷寺記事と菅原道真』では、道真偽作の『長谷寺縁起文』や各寺社における十一面観音の照応から、孝標女が日記の長谷寺記事において道真を間接的に記述しており、それは当時天神が広く信仰を集めていたため、家系を露骨にアピールするのがためらわれたための所為であろうと論じた。

【第四章】『源資通と「天照御神」「冬の夜の月」』では、物語的な貴公子の源資通が、神仏的な冬の齋宮の場面を語ることから、日記に頻出する物語と信仰という二項対立は、源資通の場面的に、緩やかにつながる場合も確認できると論じた。

【第五章】『女房日記の踏襲と逸脱——主家賛美の欠如をめぐる——』では、『更級日記』が主家周辺の記録と賛美を徹底して省筆していることから、主家や主家に近い人々が第一の日記読者として想定され、日記は相対的にはあるが権威をアピールする必要性が薄い状況にあったのだろうと論じた。

【第二部】『後冷泉朝前後の作者達と読者達』では、この時代の豊富な作品群、及び文芸に携わった者達を横断的に渉猟し、特定の修辭が広く展開していた様相や、『狭衣物語』等の物語、及び歌集等が当時の状況と深く関わりあいながら生成・享受されていたことを明らかにした。

【第一章】『左右』の修辭法の展開——紫式部から後冷泉朝へ——』では、「左右」の修辭法を広く調査、検討することで、各人における個別の特徴や、各時代の文芸圈の特徴を究明し、継承や変遷の様相を具体的に論じた。

「第二章 『狭衣物語』における源氏の宮付の女房達——男君への応対を中心に——」では、源氏の宮付の女房である「宣旨」等を考察することで、物語内における齋院源氏の宮家の特異性を指摘し、そこには実在の祿子家女房達の姿が読み取れることを論じた。

「第三章 『狭衣物語』の「大式三位」と大式三位藤原賢子」では、物語結末部の「大式三位」の描かれ方と実在の大式三位藤原賢子の似通いから、『狭衣物語』の作者「宣旨」が賢子を揶揄、戯画化しながら、それを狭衣の最終的な在り方の描出に利用していると論じた。

「第四章 『四条宮主殿集』における恋の歌群の遍在」では、恋の要素が家集全体に遍在していることから、主殿の出家周辺に対する読者意識、及び出家周辺からの主殿に対する家集編纂の要請の可能性を論じ、併せて出家周辺における歌集重視の機運等も指摘した。

「第五章 後冷泉朝における后妃文芸圏と内親王文芸圏の位相」では、后妃周辺と内親王周辺で伝存作品のジャンルに差異があることから、后妃周辺では発信が容易な家集等が好まれ、内親王周辺では相対的に多様な作品が生成されたのではないかと論じた。

このように、第一部と第二部ではいずれにおいても、文芸の生成と同時代の享受をめぐるさまざまな議論を積み重ねてきた。後冷泉朝とその前後では、書き手と読み手との動態的な関わりあいが生じた。それが文芸を形成していた。その様相は、詳しく見て取ることができた。第一部における『更級日記』を同時代の中で捉える営みと、第二部における同時代性から諸事を捉える営みは、この点で研究成果を互いに補完しあうものである。

*

本論文ではここまで、平安後期と狭義に呼称される後冷泉朝前後の文芸を論じた。一世紀後半にあたるこの時代の文芸は、『源氏物語』や紫式部等の後塵を拝するようなイメージが常につきまとう。これは無理からぬことで、それらの多大な影響が認められることは、本論文のほとんどの論考からも明らかである。

しかしいうまでもないが、先行する文芸の影響を多大に受けていることは、拙劣さを示すものでは決してない。後冷泉朝前後の文芸をめぐる書き手や読み手、作品たちは、複雑に交錯しながら、互いに影響を及ぼしあい、同時代的な構想やモチーフに鋭敏であり、貪欲であったとおぼしい。これは、直前の時代の文芸を乗り越える行為でもあったと考えられる。

具体例を挙げれば、「第一部 『更級日記』と孝標女の時代」の「第一章 「殿の中將」藤原長家と祐子内親王家」では、撰閲家の藤原長家という存在から、孝標女及び彼女の所属した祐子家の文芸的状况を捉え直す形で論じた。また「第二章 浮舟と「隠し掬」——『浜松中納言物語』との相互性——」では、孝標女の日記と物語の両作品をめぐる構造化された『源氏物語』受容とその展開を論じた。これらの論考の積み重ねは「第五章 女房日記の踏襲と逸脱——主家賛美の欠如をめぐる——」において、『更級日記』という作品がそもそも持っていたとおぼしい、逸脱性の指摘へと通じるものであった。

また、「第二部 後冷泉朝前後の作者達と読者達」の「第二章 『狭衣物語』における源氏の宮付の女房達——男君への応対を中心に——」と「第三章 『狭衣物語』の「大式三位」と大式三位藤原賢子」の両章では、『狭衣物語』の登場人物やその描写から、実在の祿子家

女房や大式三位をめぐる交錯を論じた。「第四章 『四条宮主殿集』における恋の歌群の遍在」では、これまで看過されてきた『主殿集』を同時代の事象とさまざまに結びつけて論じた。これらの論考の積み重ねは「第五章 後冷泉朝における后妃文芸圏と内親王文芸圏の位相」において、総体的な視座から捉えた、この時代の宮家や女房達をめぐる差異の指摘へと通じるものであった。

本論文の序章では「融和」「共有」という時代的な特徴を幾度か指摘したが、後冷泉朝前後はそれに加え、「専門化」や「分業化」といった特徴も見出せるのではないだろうか。女房の記述態度を逸脱し、伺候名も伝わらないが散文作品を多く伝存させた孝標女や、他資料にその名が一切見られない主殿のような作り手達が存在したことと、后妃や内親王の周辺で文芸活動にそれぞれ差異が見られることなどは、いずれも当時の文芸圏の発達・拡大を示唆するのではないか。その発達・拡大とは、専門化や分業化という表現が似つかわしいかと考えられる。右で取り上げなかった各章にも、このような徴候を認めうる点が散在しているだろう。

無論、この指摘は『更級日記』及び後冷泉朝前後を余すところなく究明した上での結論ではない。「融和」「共有」にせよ「専門化」「分業化」にせよ、指摘することでそれにそぐわない事象も無数に顕現する。本論文はあくまでこの時代の一側面を指摘したものである。今後も絶えずさまざまな事象にアプローチし、ジャンル等にとられない総体的な視座からの研究を行いたい。

「微視的な研究」と「巨視的な研究」が織りなす様相は、久松潜一氏をはじめとして諸氏のよく言及するところである⁽¹⁾。稿者の多くの問題意識は、微視的なものであった。本論文の議論は、微細な表現描写を扱ったものや、端役や周辺の人物を扱ったものがほとんどである。

しかし、そのような議論の積み重ねは、後冷泉朝前後を総体的に解明しようとする姿勢へと決して隔たることなくつながり、その特徴の一端に迫るものとなった。今後、微視的な研究に対してその都度明確な意義付けを行い、広い視野、広い問題意識を併せた成果を心掛けたい。

注

(1) 久松潜一「微視的と巨視的と」(『文学研究』第二二号、一九五八年八月)、鈴木日出男『古代和歌史論』(東京大学出版会、一九九〇年)の「あとがき」、桜井宏徳『物語文学としての大鏡』(新典社、二〇〇九年)の「あとがき」。

引用文献一覧

- 浅尾広良「〈紫式部〉と『日本紀』——呼び起こされる歴史意識——」『紫式部』と王朝文芸の表現史』森話社、二〇一二年
- 有馬義貴『更級日記』における『源氏物語』の浮舟——孝標女らしき人とのずれをめぐる——』『奈良教育大学国文——研究と教育——』第三八号、二〇一五年三月
- 家永三郎「更級日記を通して見たる古代末期の廻心」『上代仏教思想史研究』畝傍書房、一九四二年
- 池田亀鑑「自照文学史」津本信博編『日記文学研究叢書第一五巻』クレス出版、二〇〇七年三月（初出は『国文教育』一九二六年一月）
- 池田利夫「浜松中納言・夜半の寢覚は孝標女の作か否かの論争」『国文学解釈と鑑賞』第二七巻第七号、一九六二年六月
- 池田利夫「菅原孝標像の再検討——更級日記との関連に於て——」『国語と国文学』第五五巻第七号、一九七八年七月
- 石井正己「隠し据えられた女、浮舟」『学芸国語国文学』第三二号、二〇〇〇年三月
- 石川徹「夜半の寢覚は孝標女の作と思う」『王朝小説論』新典社、一九九二年
- 石坂妙子「孝標女の位相——周縁の女房」『平安日記文芸の研究』新典社、一九九七年
- 石原昭平「平安女流日記と仏教——『かげろう日記』『紫日記』『更級日記』と浄土教」今成元昭編『仏教文学の構想』新典社、一九九六年
- 伊藤守幸『枕草子』と『更級日記』『日本文学』第四〇巻第一号、一九九一年一月
- 伊藤守幸「物語を読む女たち」『更級日記研究』新典社、一九九五年
- 稲賀敬二「平安末期物語の遊戯性——短編物語クイズ論——」『後期物語への多彩な視点』稲賀敬二コレクション四、笠間書院、二〇〇七年
- 犬養廉「撰関時代後期の文学潮流——後冷泉朝文壇への証明——」『国文学解釈と鑑賞』第二八巻第一号、一九六三年一月
- 井野葉子「〈隠す／隠れる〉浮舟物語」『源氏物語宇治の言の葉』森話社、二〇一一年
- 井上新子『堤中納言物語の言語空間——織りなされる言葉と時代』翰林書房、二〇一六年
- 井上眞弓『狭衣物語』における奪われた女房の声をめぐって——「うるま」という狭衣の発話言説より——』『立教大学日本文学』第九三号、二〇〇四年十二月
- 井上眞弓「女君の親子関係」『狭衣物語の語りと引用』笠間書院、二〇〇五年
- 井上眞弓「夢のわたりの浮橋」論」同前
- 井上宗雄「道長の諸子」『平安後期歌人伝の研究増補版』笠間書院、一九八八年
- 今西祐一郎「横川僧都」小論』『論集日本文学・日本語2中古』角川書店、一九七七年
- 今西祐一郎『主殿集』試論』『国語国文』第四六巻第一号、一九七七年一月

- 岩城隆利「長谷寺と与喜天神社と連歌」『大和文化研究』第五卷二号、一九六〇年二月
- 上島享「中世長谷寺史の再構築」『国文論叢』第三六号、二〇〇六年七月
- 上野理「納和歌集等於平等院経蔵記」『後拾遺集前後』笠間書院、一九七六年
- 上野理「和歌六人党と歌」同前
- 大倉比呂志「更級日記の制作状況——祐子内親王との関わりから——」『早稲田大学高等学院研究年誌』三三、一九八九年
- 大倉比呂志『源氏』受容のありよう——〈浮舟〉志向の原形質——『平安時代日記文学の特質と表現』新典社、二〇〇三年
- 小木喬「霞へだつる中務宮」『散逸物語の研究平安・鎌倉時代編』笠間書院、一九七三年
- 小木喬「袖ぬらす」同前
- 甲斐稔『栄花物語』と藤原長家『國學院大學大學院紀要——文学研究科——』第一五輯、一九八三年
- 柏木由夫「大式三位賢子の生」『源氏物語研究集成』第一五卷、二〇〇一年一月
- 堅田修「寺院縁起の研究」『日本古代信仰と仏教』法蔵館、一九九一年
- 加藤昌嘉「星と浮舟」『揺れ動く『源氏物語』』勉誠出版、二〇一一年
- 神谷敏成『主殿集』考『北海道自動車短期大学研究紀要』第七号、一九七九年八月
- 神田龍身「分身、差異への欲望——『源氏物語』「宇治十帖」——」『物語文学、その解体——『源氏物語』「宇治十帖」以降——』有精堂出版、一九九二年
- 神野藤昭夫「散逸物語『霞へだつる中務宮』の復原」『散逸した物語世界と物語史』若草書房、一九九八年
- 菊地仁「源資通の自然感覚——後冷泉朝文学覚書——」『日本文学論究』第三八冊、一九七八年十一月
- 久我有生『更級日記』「猫への転生」段の位置づけ『解釈』第五八卷第三・四号、二〇一二年四月
- 久下晴康（裕利）『狭衣物語』の創作意識——六条齋院物語歌合に関連して——『平安後期物語の研究 狭衣浜松』新典社、一九八四年
- 久下裕利「狭衣作者六条齋院宣旨略伝考」『狭衣物語の人物と方法』新典社、一九九二年
- 久下裕利「大宰大式・権帥について」『学苑』第七八五号、二〇〇六年三月
- 久下裕利「迷走する孝標女——石山詣から初瀬詣へ——」『福家俊幸・久下裕利編『王朝女流日記を考える——追憶の風景』武蔵野書院、二〇一一年
- 久下裕利「第一部 王朝物語官名形象論——物語と史実と 第一章 民部卿について」『王朝物語文学の研究』武蔵野書院、二〇一二年
- 久下裕利「雪と月と」同前
- 久下裕利「フィクションとしての飛鳥井君物語」同前
- 久下裕利『巢守物語』は孝標女の作か」同前
- 久下裕利『浜松中納言物語』の世界」同前

- 久下裕利「挑発する『寝覚』『巢守』の古筆資料——絡み合う物語——」横井孝・久下裕利編『王朝文学の古筆切を考える——残欠の映発』武蔵野書院、二〇一四年
- 久下裕利「王朝歌人と陸奥守」『学苑』第八九一号、二〇一五年一月
- 久下裕利「大望祈願の物語——石山詣から初瀬詣へ——」福家俊幸・和田律子・久下裕利編『更級日記の新世界』武蔵野書院、二〇一六年
- 久富木原玲「歌人としての紫式部——逸脱する源氏物語作中歌——」『源氏物語研究集成』第一五巻、風間書房、二〇〇一年一月
- 久保木哲夫『出羽弁集新注』青簡社、二〇一〇年
- 久保木寿子『四条宮主殿集新注』青簡舎、二〇一一年
- 久保木秀夫『更級日記』上洛の記の背景——同時代における名所題の流行——」和田律子・久下裕利編『更級日記の新研究——孝標女の世界を考える』新典社、二〇〇四年
- 久保田淳『新古今歌人の研究』東京大学出版会、一九七三年
- 栗原弘「平安時代の出家と離婚について」『日本宗教文化史研究』第一巻第二号、一九九七年一月
- 黒板伸夫「藤原行成の子息たち——後期撰関時代の政治と人脈を背景に——」『後期撰関時代史の研究』吉川弘文館、一九九〇年
- 黒板伸夫『藤原行成』吉川弘文館、一九九四年
- 小内一明「あまてる御神をねむしませ」の夢——更級日記解釈私見——」『群馬県立女子大学国文学研究』第二号、一九八二年三月
- 後藤昭雄「『納和歌集等於平等院経藏記』私注」『成城国文学』第二九号、二〇一三年二月
- 後藤祥子「更級日記の作者と東国——竹芝伝説の周辺——」木村正中編『論集日記文学』日記文学の方法と展開』笠間書院、一九九一年四月
- 小林美和子「王朝物語における出家描写について」『国文学攷』第一一四号、一九八七年六月
- 小峯和明「大江匡房——大宰府時代から——」『国文学解釈と鑑賞』第五五巻第一〇号、一九九〇年一月
- 小谷野純「『更級日記』に於ける「紫式部日記」受容の問題——上洛後の記の世界をめぐる——」『平安文学研究』第六一輯、一九七九年六月
- 小谷野純「『更級日記源資通との邂逅譚』『平安後期女流日記の研究』教育出版センター、一九八三年
- 小谷野純「『更級日記出仕記事の内実』『女流日記への視界——更級日記・讃岐典侍日記をめぐる——』笠間書院、一九九一年
- 坂本共展「浮舟の出家」『源氏物語の展望』第二輯、三弥井書店、二〇〇七年一〇月
- 桜井宏徳『物語文学としての大鏡』新典社、二〇〇九年
- 桜井宏徳『更級日記』における「あらまし」と——物語との関わりをめぐる——『日記文学研究誌』第一八号、二〇一六年六月

- 笹川博司『為信集と源氏物語——校本・注釈・研究——』風間書房、二〇一〇年
- 佐藤祐子「古典に現れた月の研究——平安時代の冬の月——」『信大国語教育』第五号、一九九六年二月
- 塩田公子「浮舟」とは違う女の一生——『更級日記』を物語として読む——」『古代文学研究第二次』第五号、一九九六年一〇月
- 志津田兼三「更級日記考——なぜに夕顔・浮舟か、そのよしなき物語・歌のを中心——」『国語と国文学』第五八卷一〇号、一九八一年一〇月
- 陣野英則「紫式部という物語作家——物語文学と署名——」『源氏物語の話しと表現世界』勉誠出版、二〇〇四年
- 陣野英則「藤式部丞と紫式部——藤式部」『文学』第一六卷第一号、二〇一五年一月
- 陣野英則『源氏物語論 女房・書かれた言葉・引用』勉誠出版、二〇一六年
- 菅井麻由子『源氏物語』『冬の月』試論——朝顔巻をめぐる——」『東洋大学大学院紀要』第三六集、一九九九年
- 鈴木紀子『浜松中納言物語』における大式とその娘『国文橋』第一七号、一九九〇年三月
- 鈴木日出男『古代和歌史論』東京大学出版会、一九九〇年
- 鈴木日出男「浮舟の入水——薫と浮舟（一）」『源氏物語虚構論』東京大学出版会、二〇〇三年
- 鈴木日出男「浮舟の出家生活——薫と浮舟（二）」（同前）
- 鈴木泰恵「序 命名『狭衣物語』批評」への思い」『狭衣物語』批評』翰林書房、二〇〇七年
- 鈴木泰恵「天人五衰の（かぐや姫）——貴種流離譚の隘路と新生——」同前
- 須田哲夫『更級日記』作者像の輪郭——『更級日記』『浜松中納言物語』をめぐる——」『日本文学研究』第三八号、大東文化大学日本文学会、一九九九年二月
- 須田哲夫『狭衣物語』——その社会意識と歴史意識について——」『論争狭衣物語2 歴史との往還』新典社、二〇〇一年
- 関根慶子「平安後期の新旧歌論の対立について」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第二卷、一九五二年一二月
- 妹尾好信『蜻蛉日記』と『更級日記』の執筆契機考」『王朝和歌・日記文学試論』新典社、二〇〇三年
- 高田祐彦「山姫」としての大君——宇治十帖の表現構造——」『むらさき』第二二輯、一九八五年七月
- 高橋由記「蜻蛉」巻の宮の君——式部卿宮女の出仕——」『国語国文』第七〇巻第二号、二〇〇一年二月
- 高橋由記「孝標女の出仕記事に関する一考察——『更級日記』と『栄花物語』巻三十四から——」『大妻国文』第三六号、二〇〇五年三月
- 高橋由記『栄花物語』の描く二后並立——後冷泉朝後宮の特徴に関連して——」『明星大学

- 研究紀要【人文学部・日本文化学科】第一九号、二〇一一年三月
- 高橋由記「後冷泉朝の後宮と文化圏——妻后同殿とその文化圏について——」『中古文学』第九一号、二〇一三年五月
- 田中篤子「大宰帥・大宰大貳補任表」『史論』第二六・二七集、一九七三年
- 田中喜美春「招誘歌の深滞」『国語と国文学』第七七卷第一〇号、二〇〇〇年一〇月
- 千原美沙子「孝標女と祐子内親王」『古代と現代』六八号、二〇〇〇年一〇月
- 中古文学研究会編『平安後期 物語と歴史物語』笠間書院、一九八二年
- 張陵『更級日記』と漢文学についての一試論——景物描写を中心に——『国語国文』第七九卷第七号、二〇一〇年七月
- 達日出典「長谷寺にみる天神信仰」『長谷寺史の研究』古代山岳寺院の研究一、巖南堂書店、一九七九年
- 角田文衛「紫式部の子孫」『紫式部の身边』古代学協会、一九六五年
- 津本信博「乳母としての作者——祐子・禊子内親王——」『更級日記の研究』早稲田大学出版部、一九八二年
- 寺本直彦「祐子内親王家紀伊と源氏物語 付『月待つ女』物語について」『源氏物語受容史論考 続編』風間書房、一九八四年
- 寺本直彦「更級日記「宇治の渡り」の段試解」『源氏物語論考 古注釈・受容』風間書房、一九八九年
- 富澤祥子『更級日記』における頼通——「殿」という呼称をめぐる——『日記文学研究誌』第一六号、二〇一四年六月
- 中周子「大貳三位賢子の和歌における『源氏物語』享受の一樣相」『和歌文学研究』第七九号、一九九九年一二月
- 中嶋朋恵「春秋優劣論と冬の月」『東京成徳短期大学紀要』第一七号、一九八四年三月
- 中城さと子『狭衣物語』と禊子内親王『中京国文学』第八号、一九八九年
- 中西智子「紫式部と伊勢大輔の贈答歌における『源氏物語』引用——「作り手」圏内の記憶と連帯——」『日本文学』第六一卷第二二号、二〇一二年一二月
- 中西進『雪月花 雪の匂い』小沢書店、一九九五年
- 中哲裕「横川の僧都——その思想と行動をめぐる——」『文学・語学』第八四号、一九七八年一二月
- 中村文「孝標女の変容——『更級日記』再出仕記事を読み直す——」和田律子・久下裕利編『更級日記の新研究——孝標女の世界を考える』新典社、二〇〇四年
- 中村成里『平安後期文学の研究 御堂流藤原氏と歴史物語・仮名日記』早稲田大学出版部、二〇一一年
- 並木和子「撰関家と天神信仰」『中央史林』第五号、一九八二年三月
- 西村加代子「悲哀美としての〈心細し〉——平安朝後期の和歌を中心に——」『国文学研究ノート』創刊号、一九七二年一二月

- 袴田光康「光源氏の流離と天神信仰——「須磨」・「明石」巻における道真伝承をめぐって——」秋澤互・袴田光康編『源氏物語を考える——越境の時空』考えるシリーズ三、武蔵野書院、二〇一一年
- 針本正行「平安女流日記の終焉——四条宮家の女房日記『主殿集』を素材として——」『日本文学論究』第五五冊、一九九六年三月
- 樋口芳麻呂『霞隔つる中務宮』物語『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』ひたく書房、一九八二年
- 樋口芳麻呂『源氏物語』と散逸物語——『左も右も袖ぬらす』物語を中心に——」寺本直彦編『源氏物語』とその受容』右文書院、一九八四年
- 樋口芳麻呂「菅原孝標女の和歌——その類似表現——」和田律子・久下裕利編『更級日記の新研究——孝標女の世界を考える』新典社、二〇〇四年
- 久松潜一編『日本文学史 中古』至文堂、一九五五年
- 久松潜一「微視的と巨視的」と『文学研究』第二二号、一九五八年八月
- 土方洋一『源氏物語』須磨巻の書き手と読み手——付、五節の君のこと——」『青山語文』第四三号、二〇一三年三月
- 福家俊幸『更級日記』の初瀬詣で考——御禊の日に出生した意味』『中古文学論攷』第一一〇号、一九九〇年一二月
- 福家俊幸「物語創作が記されない意味」『紫式部日記の表現世界と方法』武蔵野書院、二〇〇六年
- 福家俊幸「女房日記的性格と憂愁の叙述の方法」同前
- 福家俊幸『更級日記』天照大神の夢——創作された時代の言説として——」『国語と国文学』第八七巻第八号、二〇一〇年八月
- 福家俊幸『更級日記』冒頭表現と上洛の記の成立——候名と読者の問題——」『学術研究——人文科学・社会科学編——』第六〇号、二〇一二年二月
- 福家俊幸『更級日記全注釈』角川学芸出版、二〇一五年
- 福家俊幸「孝標女の文学と規範としての紫式部——頼通時代の物語作者——」和田律子・久下裕利編『平安後期頼通文化世界を考える——成熟の行方』武蔵野書院、二〇一六年
- 藤岡作太郎『国文学全史平安朝編』東京開成館、一九〇五年
- 藤田彰子『更級日記における浮舟——形象の方法とその意味——』『中古文学論攷』第七号、一九八六年一〇月
- 藤巻和宏『長谷寺縁起文』天照大神・春日明神誓約譚をめぐって——第六天魔王の登場と『長谷寺密奏記』との照応——」『国文学研究』第一二七集、一九九九年四月
- 藤巻和宏『長谷寺験記』成立年代の再検討——長谷寺炎上と「行仁上人記」——」『国文論叢』第三六号、二〇〇六年七月
- 藤巻和宏「菅原道真仮託の縁起——大安寺と長谷寺——」『巡礼記研究』第四集、二〇〇七年九月

- 藤森祐「平安時代物語に見える女性の出家について」『紀要』第一号、長野県短期大学、一九五七年一月
- 古田正幸『平安物語における侍女の研究』笠間書院、二〇一四年
- 益田勝実「平安後期に於ける貴族文芸の一潮流——形による救済の試みに就いて——」『文学』第一九卷第一号、一九五一年一月
- 松井律子「家隆の冬の歌（二）——「湖上冬月」歌をめぐる——」『就実語文』第一三号、一九九二年十一月
- 松尾聰「袖ぬらす宰相中將の物語」『平安時代物語の研究』改訂増補版、武蔵野書院、一九六三年
- 松本寧至「菅原孝標は同行しなかった——『扶桑略記』竜門寺参詣記事新解——」『古代文化』第三二卷第四号、一九七九年四月
- 松本寧至「母一尺の鏡を鑄させて——『更級日記』と長谷寺信仰——」『国学院雑誌』第八〇卷第四号、一九七九年四月
- 三角洋一「文学史上の『更級日記』の位置」『古文研究シリーズ一五 更級日記』国語展望別冊N・四四、一九八五年五月
- 三角洋一「蜻蛉巻の宮の君」『むらさき』第四八輯、二〇一一年十二月
- 三谷栄一「斎院源氏宮」『狭衣物語の研究』異本文学論編』、笠間書院、二〇〇二年
- 三橋正「女の出家」『人物で読む『源氏物語』第一五巻——女三の宮』勉誠出版、二〇〇六年
- 宮崎莊平「冬の夜の月——若菜下巻に関連して——」『王朝女流文学攷——物語と日記——』新典社、二〇一〇年
- 宮田和一郎「狭衣論攷」『国語国文』第三卷第四号、一九三三年四月
- 元吉進「更級日記と上総国笠森観音」『学苑』第九〇三号、二〇一六年一月
- 森岡常夫『平安朝物語の研究（増補版）』風間書房、一九八一年
- 守屋省吾『平安後期日記文学論 更級日記讃岐典侍日記』新典社、一九八三年
- 山本淳子「指示副詞「かく」使用歌による歌群表現——『古今集』『和泉式部統集』『四条宮主殿集』における——」『国語国文』第七〇卷第二号、二〇〇一年二月
- 山本浩子「更級日記と枕草子」『解釈学』第一四輯、一九九五年七月
- 横尾三雄「「こころぼそし」の文学「狭衣物語」——背景としての自然描写——」『平安朝文学研究』第二卷第六号、一九六八年十二月
- 横田隆志『長谷寺験記』から見えるもの——与喜天神縁起を中心に——』『日本文学』第五〇卷第四号、二〇〇五年四月
- 吉川宗明「与喜山（奈良県桜井市）山中の「磐座」を探し求めて」『岩石を信仰していた日本人——岩神・磐座・磐境・奇岩・巨石と呼ばれるもの研究——』遊タイム出版、二〇一一年
- 吉原浩人「文道の大祖」考——学問神としての天神の淵源』日本における「文」と「ブン

ガク』 勉誠出版、二〇一三年

和田律子 「文化世界確立の構想——祐子内親王家サロンの形成——」 『藤原頼通の文化世界と更級日記』 新典社、二〇〇八年

和田律子 「文化世界変質のきざし」 同前

和田律子 「晩年の蒐書と『更級日記』」 同前

和田律子 『更級日記』の冒頭部——執筆の意図——」 同前

和田律子 「「場の文学」としての『更級日記』」 同前

和田律子 「宮仕えの記——物語の男君——」 同前

和田律子 「孝標女の「石山」——「影をならべ」を中心に——」 横井孝・久下裕利編『平安

後期物語の new 研究——寝覚と浜松を考える』 新典社、二〇〇九年

和田律子 「藤原頼通文化世界における『枕草子』撰取の二様相——『更級日記』を中心に——」

『古代中世文学論考』 第二九集、二〇一四年四月

初出一覧

※表記の変更や誤字脱字の修正等を行ったが、論旨に変わりはない。

序章

*書き下ろし

第一部 『更級日記』と孝標女の時代

第一章 「殿の中将」藤原長家と祐子内親王家

*原題『更級日記』の一基底——藤原長家をめぐって——『日記文学研究誌』第一六号、二〇一四年六月

第二章 浮舟と「隠し据ゑ」——『浜松中納言物語』との相互性——

*原題『更級日記』と『浜松中納言物語』における「隠し据ゑ」——『源氏物語』受容と物語創作をめぐって——『国文学研究』第一八三集、二〇一七年一〇月

第三章 長谷寺記事と菅原道真

*原題『更級日記』の長谷寺記事と菅原道真『早稲田大学高等学院研究年誌』第六一号、二〇一七年三月

第四章 源資通と「天照御神」「冬の夜の月」

*原題『更級日記』における源資通と「天照御神」「冬の夜の月」『平安朝文学研究』復刊第二〇号、二〇一二年三月

第五章 女房日記の踏襲と逸脱——主家賛美の欠如をめぐって——

*原題『更級日記』における主家賛美の欠如——女房日記の踏襲と逸脱——『日記文学研究誌』第一七号、二〇一五年六月

第二部 後冷泉朝前後の作者達と読者達

第一章 「左右」の修辞法の展開——紫式部から後冷泉朝へ——

*原題同じ『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六一輯第三分冊、二〇一六年二月

第二章 『狭衣物語』における源氏の宮付の女房達——男君への応対を中心に——

*書き下ろし

第三章 『狭衣物語』の「大式三位」と大式三位藤原賢子

*原題『狭衣物語』の「大式三位」と大式三位藤原賢子——物語の結末部に関して——『国語と国文学』第九三巻第四号、二〇一六年四月

第四章 『四条宮主殿集』における恋の歌群の遍在

* 原題 『『四条宮主殿集』における恋の歌群の遍在——周辺読者の関心をめぐって——』
『日本文学』第六六巻第四号、二〇一七年四月

第五章 後冷泉朝における后妃文芸圏と内親王文芸圏の位相

* 書き下ろし

終章

* 書き下ろし